

# 第11回大会 せたがや福祉区民学会

学びあい、広げよう せたがや福祉の輪

みんな まち  
「協働でつくる住み続けたい世田谷」

## 報告集

日時：令和元年12月7日(土)  
12:00~17:30 (開場11:30)  
会場：日本大学文理学部





## 目 次

せたがや福社區民学会第11回大会プログラム .....	5
会場見取り図 .....	6
<b>全体会 I</b>	
せたがや福社區民学会会長挨拶 .....	10
せたがや福社區民学会第11回大会開催校挨拶 .....	12
世田谷区長挨拶 .....	13
基調講演「 <sup>みんな</sup> 協働でつくる <sup>まち</sup> 住み続けたい世田谷」 諏訪 徹（日本大学文理学部社会福祉学科教授） .....	16
<b>実践研究発表</b>	
ポスター発表一覧 .....	28
口頭発表一覧 .....	29
<b>〈ポスター発表〉</b>	
(1) 「夏休み親子介護施設体験」－身近な地域の施設について知ろう－ .....	34
(2) 「介護されない、しない生活を目指す」 .....	36
(3) 歩行訓練プログラム－「遊歩倶楽部」取組み－ .....	38
(4) その人らしく暮らしていくために私達が地域でできること .....	40
(5) 3年目の失語症カフェー失語症会話パートナーを知っていますかー .....	42
(6) 訪問看護ステーションのリハビリテーションにおける「物」の活用 －手作り自助具から最新機器まで－ .....	44
(7) 入院中の子どもに付き添う母親の食事に関する実態調査 .....	46
(8) チーム三茶による在宅版パスを通した本人主体の協働連携 －地域包括ケア多職種連携を当事者中心にする実践研究－ .....	48
担当助言者 .....	50
<b>〈口頭発表〉</b>	
<b>第1分科会 住み続けたいまちづくり／多世代による文化交流／                   ひとり一人に向き合った実践／最後までその人らしく生きる</b>	
(1) 高齢者が地域でいきいきと暮らせるために必要なこと	

－「ふれあい松原」を通してあんしんすこやかセンターの役割を考える－	52
(2) 「椎の木」－多世代を結び、懐かしのひと時をつくること－	54
(3) それぞれの自立を一緒につくる	
－自立体験ホームなかまっちの20年と今後の展開－	56
(4) 世田谷おでかけサポーターズの活動（中間報告）－買い物困難者の為のバスを走らせる事による住みやすい世田谷の共生社会の実現－	58
(5) Aちゃんとの10年を振り返って－チームが可能性を広げる－	60
(6) 高齢期の住まいについて考える－自宅、施設、それとも？－	62
(7) 祖師谷地区「公社けやきの会」の取り組みについて	64
担当進行役・助言者	66

## 第2分科会 子ども、若者の輝く社会

(1) 現代の保護者の子どもとの関わりについて	
－スマートフォンを活用した育児からの考察－	68
(2) 子どもが道具を自由に使えるために－プレーパークの役割－	70
(3) 「親カフェ」という居場所	
－子どもの不登校や生きづらさで悩む保護者との出会いと安らぎの場－	72
(4) 人と情報につながる、妊婦さんへの機会づくり－子育てサロンに参加するお母さんの声から生まれた、妊婦さんの集える場－	74
(5) 『子どもの心を育てるインクルーシブ保育2』	76
(6) 児童養護施設・里親を巣立った若者の再出発と自立を支える場としてのシェアハウス運営－安心して住むことの出来る居場所の必要性－	78
(7) 母子実践プロジェクト－母子生活支援施設での実践を通して－	80
担当進行役・助言者	82

## 第3分科会 働く・社会に参加する／やまいや障がいとともに豊かに生きる

### 予防・健康・生きがいつくり／多様性をみとめあう共生社会づくり

(1) 障害の有無を超えて繋がる居場所づくり－上北沢縁側プロジェクト－	84
(2) 障害分野でのボランティア活動	
－福祉の現場において学生ボランティアとしてできること－	86
(3) 「介護タクシー」と「移送NPO」の違いと使い分けの研究－誰もが自由におでかけできる世田谷を目指す「そとでる」の実務から－	88
(4) パートナーセンターはじめました－認知症がある人もまだない人も・障害のある人もない人も水平に繋がる－	90
(5) 精神障害者が働き続けられる職場づくりについて	
－㈱世田谷サービス公社の取り組み事例について－	92
(6) 外出リハビリ倶楽部のあゆみ	94
(7) 太子堂ダンディクラブ	
－退職後の男性の仲間づくり・地域参加へ向けて－	96
担当進行役・助言者	98

#### 第4分科会 地域をつなぐネットワーク

(1) 世田谷区における地域連携・貢献活動について .....	100
(2) お困りごとの相談窓口『ぽーときぬた』の取り組み ーお困りごとはございませんか?ー .....	102
(3) 日大さくらサロン ー学生ならではの継続したネットワークづくりと今後の展望ー .....	104
(4) 「顔の見える関係」から次のステージへ ー砧地域ご近所フォーラムの取り組みー .....	106
(5) ひきこもり家族会のとりのくみー地域でつながる つなげるー .....	108
(6) 下馬・野沢からはじまる子育ての輪 ー下馬・野沢地区子育て関係団体の取り組みー .....	110
(7) 「スポーツ・レクリエーション」それは楽しいを生み出す原点 ースポーツ・レクリエーションというツールを使ってコミュニティーー .....	112
担当進行役・助言者 .....	114

#### 第5分科会 地域をつなぐネットワーク/ケアにおける協働・連携

(1) 地域の力を活かせる場としてできること .....	116
(2) 雑居祭りに参加して ー北沢地域部会から発信する地域包括ケアシステムの実現ー .....	118
(3) 尿路感染症を防止するために陰部洗浄方法の統一を試みて .....	120
(4) エピソードを通じて本人の気持ちに気づく ー知的障害がある方の気持ち、心情をどう捉えるかー .....	122
(5) 特別支援学校介助員を通して学んだこと、感じたこと .....	124
(6) 児童養護施設における多職種連携について ー医師、看護、心理職の働きからー .....	126
担当進行役・助言者 .....	128

#### 第6分科会 ひとり一人に向きあった実践

(1) せたがやゼミナールの実践 .....	130
(2) ケアを受け入れてもらうためのアプローチ ー入浴ケアを通して介護職員が学んだことー .....	132
(3) 不安を強く抱きやすいAさんとの関わりについて .....	134
(4) 食事を継続して召し上がって頂くためにー食事の提供時間ー .....	136
(5) 『おかえり、ただいま』と、声が響くホーム ー小規模多機能ホーム三宿での生活ー .....	138
(6) 気になりすぎるからトラブルになりやすかったAさんとの関わりと変化 .....	140
(7) 行動 心理症状の改善を多職種で取り組み在宅生活継続を目指す ー妻と一緒に過ごすためにー .....	142
担当進行役・助言者 .....	144

## 第7分科会 多様性をみとめあう共生社会づくり

(1) キャンパスライフを通して考える共生社会 ー合理的配慮の視点を大切にー .....	146
(2) スポーツを通じた地域連携作りーボッチャを例としてー .....	148
(3) 地域共生社会の実現に向けた個別支援と地域づくりの一体的な展開ーコミュニ ニティソーシャルワーク機能の発揮を軸とした社協の取り組みー .....	150
(4) 楽しさをベースにー知的障害のある方の施設での取り組みを通してー ....	152
(5) 「EPAインドネシア介護候補生」そのプロセス ーインドネシアでの教育、日本での高齢者ケアについてー .....	154
(6) 音楽でひろがる・音楽でつながる夢のお話 .....	156
(7) 地域住民が地域に参加するきっかけづくりとその効果 ー「地区サポーター制度」拡充の取り組みー .....	158
担当進行役・助言者 .....	160
学生交流会 ワークショップ .....	162

## 全体会Ⅱ

大会総括 .....	166
第11回大会実行委員長挨拶 .....	173

## 資料編

せたがや福祉区民学会役員 .....	176
第11回大会実行委員名簿 .....	177
第11回大会実績 .....	178
団体会員名簿 .....	179
設立趣旨 .....	182

# せたがや福社区民学会 第11回大会プログラム

## 1 全体会Ⅰ (12:00~13:00) 3号館5階 3505教室

○会長挨拶

○開催校挨拶

○世田谷区長挨拶

○基調講演 「<sup>みんな</sup>協働でつくる住み続けたい<sup>まち</sup>世田谷」  
諏訪 徹 (日本大学文理学部社会福祉学科教授)

## 2 分科会 (12:00~16:25)

○ポスター発表 (12:00~16:25) 3号館5階 3502教室

【コアタイム】 発表者が説明および質疑応答に対応します。

13:50~14:20

※ポスター会場は12:00から16:25まで自由にご覧いただけます。

○口頭発表 (13:30~16:25) 3号館5階各教室

第1分科会 3503教室 第5分科会 3508教室

第2分科会 3504教室 第6分科会 3509教室

第3分科会 3506教室 第7分科会 3510教室

第4分科会 3507教室

○学生交流会 ワークショップ (14:50~16:00) 3号館5階 3501教室

## 3 全体会Ⅱ (16:45~17:30) 3号館5階 3505教室

○大会のまとめ

○実行委員長挨拶

○閉会

※全体会では、パソコン文字通訳を行います。

※全体会及びご希望の分科会には、手話通訳が付きます。ご希望の方は大会総合受付にお申し出ください。

※大会運営は、開催校はじめ世田谷区内大学からの学生や、区民、福祉サービス従事者など、多数のボランティアスタッフにより支えられています。

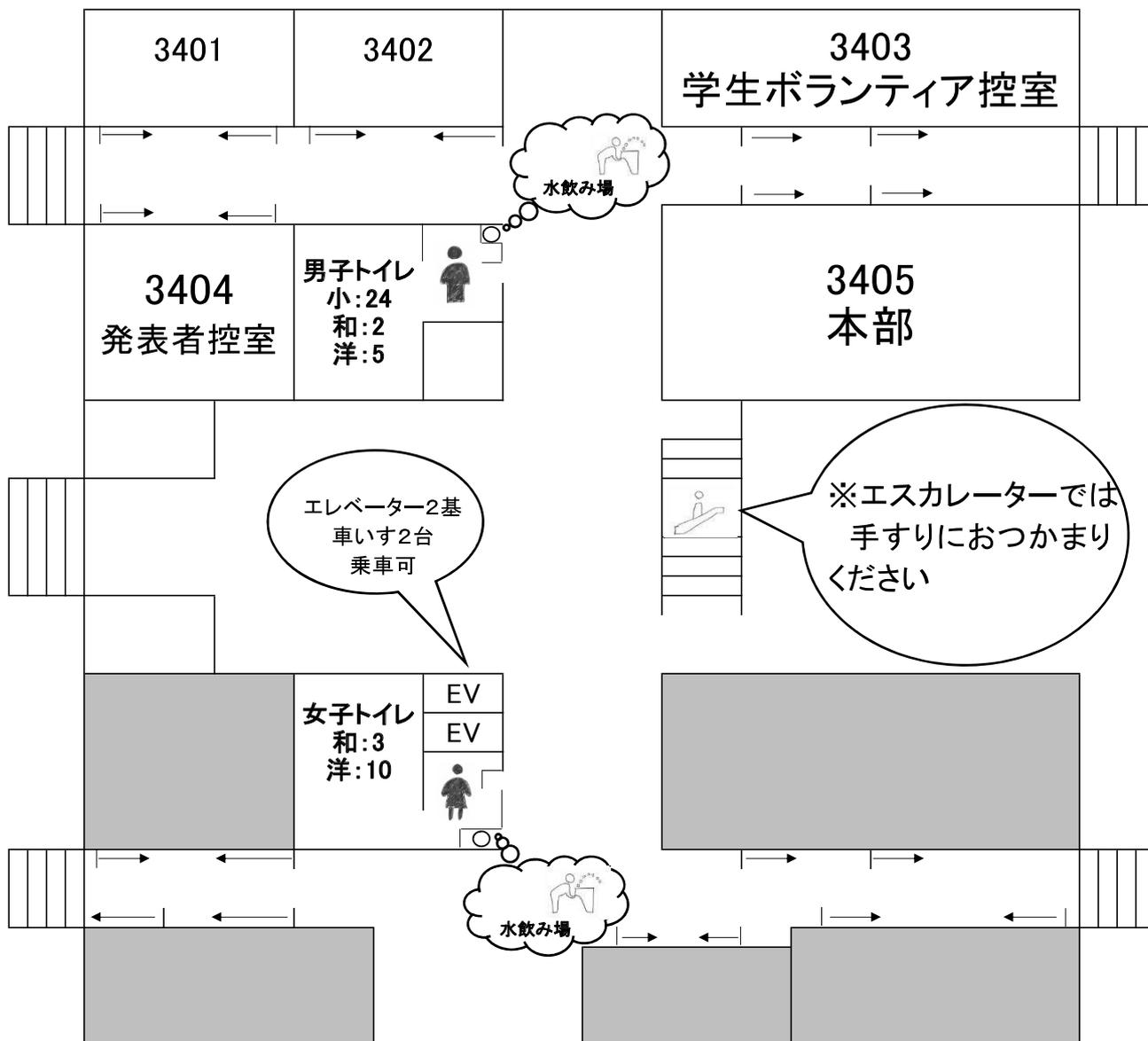
\*懇親会 (17:30~19:00) 日本大学文理学部 カフェテリア チェリー

当日の参加申し込みができます。詳しくは、大会総合受付にお問い合わせください。

# キャンパスマップ・会場見取り図

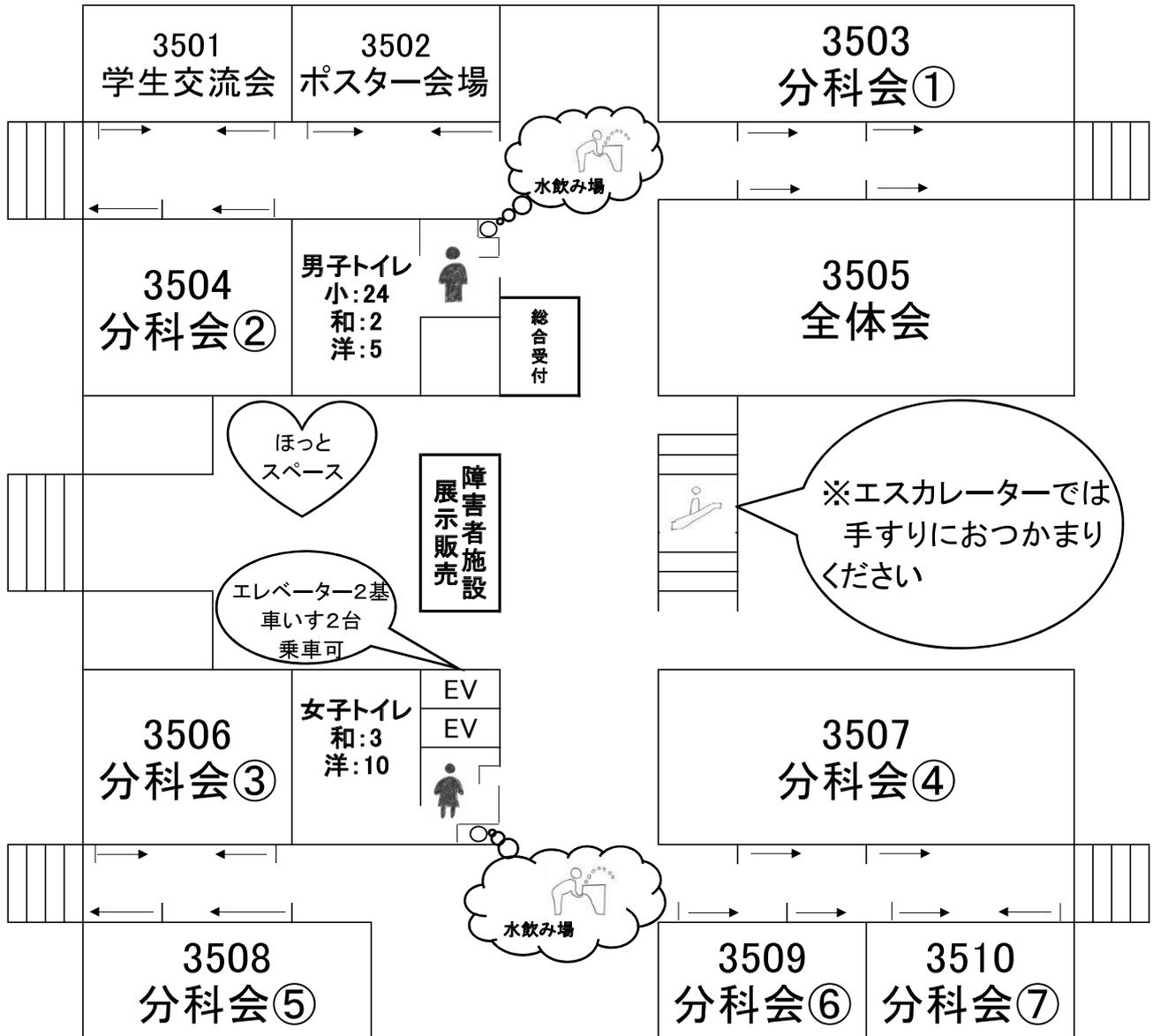


# 3号館4階



■ は授業をおこなっております。ご協力お願い致します。

# 3号館5階



※ごみのお持ち帰りにご協力お願いいたします。  
 ※車いす用トイレは1Fとなります。

# 全体会 I



## せたがや福社區民学会会長挨拶

せたがや福社區民学会会長 長谷川 幹

ただいまご紹介いただきました、せたがや福社區民学会会長の長谷川です。師走の土曜日のお忙しい中、お集まりいただき、本当にありがとうございます。

せたがや福社區民学会は2009年に設立され、福祉の職業の人を中心に、区民と一緒に、医療、保健、大学が一体となり学びあう学会です。私、全国に行く機会がありますが、非常にユニークな学会だと思っています。

大会では、大学の学生にボランティアに入ってもらい、世代間の交流も行われています。また、大学の先生方にも福祉の現場の生の声を聞いていただく機会にもなっており、様々な交流が生まれていると思っています。

大会のテーマは、「学びあい 広げよう せたがや福祉の輪」で、第11回のテーマは、「協働(みんな)でつくる住み続けたい世田谷(まち)」となっています。この大会では、日大大学文理学部の皆様や、せたがや福社區民学会理事の方々、60名以上の学生ボランティアに協力していただき、地に足の着いた交流ができと思っています。

とりわけ今回は、学生交流会として、輝水会の協力を得て、リハビリテーションスポーツを題材に、障害当事者と学生の交流を企画しました。

実は、正直、こういう仕事をしながら、申し訳ないけどびっくりしたのは、いわゆる片マヒです。片マヒの人が泳ぐのをビデオで見て、正直びっくりしました。片マヒの方がクロールで泳ぐとどうなるかと思いませんか。水の中でリラックスするので、マヒがどっちかなというぐらい、脚のマヒはわかりにくい。そういう挑戦をしている人がいらっしゃる。世田谷区でも、あちこちで障害のある人がスポーツをしているので、ぜひ、機会があれば見に行ってくださいと思います。障害の人たちは、福祉や支援の受け手というイメージをお持ちだと思いますが、実は、様々な役割を担う支え手でもあるということを知ってほしいと思います。障害の人たちがいろんな立場を体験することで、自信をつける機会にもなると考えています。

このような学会が少しずつ区外に伝達します。先ほどの総会では、区内の在勤、在住、在学生が基本的な会員ですが、少しずつ、区外にも伝達してるかなという感じがあります。このたび、学会総会で賛助会員として、趣旨に賛同されれば賛助会員を、区外の人たちにも認められるような規約の改正が行われました。ご報告いたします。少しずつ、いろんな形で世田谷区から発信しています。

最後になりますが、今日はビデオ撮影に5名の方がいらっしゃっています。立っている方、5名。この方たちは、元NHKで、「シルクロード」の撮影メンバーの方たちです。その方たちが協力していただいて、5名も来ていただき、本当に感謝申し上げます。ぜひ、これを機会に編集していただいて、DVDが作成できると思います。それをいい形で、広報活動にも使っていきたいと思います。どうもありがとうございます。

本大会が行われるということで、日大大学文理学部にも会場を提供いただき、感謝申し上げます。

以上で挨拶といたします。



## せたがや福社区民学会第 11 回大会 開催校挨拶

日本大学文理学部学長 紅野 謙介

皆さん、こんにちは。日本大学文理大学の学部長を務めております、紅野です。

私は国文学科に属し、日本の文学や国語教育を専門にしていますので、福祉自体には詳しいわけではありません。しかし、社会福祉学科の先生方とのお付き合い、そして、先ほど学会長の話を伺いながら、改めて、学問であり、同時に実践である、福祉という領域の重要性を認識してきました。

文理学部では、できる限り、大学の高い壁の中に閉じこもるのではなく、生活の現実の中に根ざした形で、自分たちの学問を鍛え上げることを目指しています。

プラグマティズムという言葉があります。これは、アメリカで生活の現実の中から知恵をみだしていく考え方です。これが、日本の学問にも非常に重要だと考えます。

福祉の問題には、障害の問題もあります。それから、人間が年齢を重ねるうちに、様々な困難な条件にぶつかることもあります。こうした、私たちを取り巻く現実の中で、何ができるのか、その実践とともに、我々自身の心、体、言葉、知性を1つ1つ、もう一度考え直していく。その可能性を押し広げていく、それを学問にもフィードバックできるものと考えています。

今回、このような学会を文理学部で開いていただき、誠にありがたく、感謝



申し上げますとともに、ぜひ、本日の会が実りあるものとなることを祈って、開催校の挨拶とさせていただきます。

皆さん、どうもありがとうございました。

## 世田谷区長 挨拶

世田谷区長 保坂 展人

本日は、第 11 回せたがや福社区民学会が熱気あふれ、盛大に開催されることを大変うれしく思います。

ご挨拶いただいた日本大学文理学部 紅野学部長様ほか、日本大学文理学部の教職員の方々をはじめ、多数の学生が参加して開催されることに、お礼を申し上げます。

区内の大学では、昭和女子大学、日本体育大学、東京都市大学、駒澤大学、東京医療保健大学、東京農業大学、それぞれの大学からの参加があります。大学を会場に、区民学会が回を重ねていることにも感謝いたします。

この福社区民学会は、福祉事業者、区の行政関係者、また障害当事者の方や家族の方など、様々な立場から、日ごろの立場を超えて語り合う場であり、本日は分科会が 7 つ、57 の研究事例があると聞いています。大変有意義なことと思います。

さて、来年 4 月 1 日から、世田谷区の福祉に大きな変化が生じます。世田谷区の児童相談所がいよいよ開設されることになっています。現在は、東京都の児童相談所が桜丘にあります。都から地域密着のネットワークを持つ区に児童相談所を移管するため、約 8 年前からいろいろな準備をしています。ある種の難しい協議もありましたが、子どもの虐待事件が相次いでいることもあり、児童相談所と行政の情報連絡の隙間に、子どもの命が落ちてしまうことも多々繰り返されていることから、児童相談所の設立に向かいます。職員は 120 名。区役所には 5300 名の職員がいますが、かなり多い職員をあて専門職の方に多数参加していただいて、一時保護所を作ります。

私が国会にいた 2000 年頃、小淵元総理が急逝された直後に、児童虐待防止法を作りました。議員提案の法律です。日本の社会的養護、いわば親に代わって社会がお子さんを養育する仕組みです。昭和 22 年、1947 年、児童憲章もなかったころに、戦災孤児を救出し、養育するために作られたのが児童相談所、一

時保護所でございます。現在は、子どもの権利条約も批准され、日本も加盟国になりました。ようやく先般の児童福祉改正で、児童の権利がうたわれてきています。

残念ながら、現状の親からの分離、一時保護の中で、全国を見渡すと、一時保護されたことで子どもが安心した、よかったと思うのとは逆に、捕まった、拘禁された、これなら早く脱走して家に帰りたいと、児童養護施設の出身の若者から、よく聞いてきました。社会的養護のバージョンアップ、区は大きな責任を担うことになります。

加えて、子ども家庭支援センターを世田谷区では5つ持っています。その職員は減らさず、むしろ強化します。200人を超える職員が、子どもの命や安全、そして健全な成育のために日々努力していきます。ぜひ、この学会でも、新しい仕組みがうまく動いているか検証をしていくことを、来年以降、お願いしたいです。

また、児童養護施設や里親の元を出た18歳以降の若者が不利な状況に置かれています。進学率も低く、大半が中退せざるをえない現実があり、本学の井上先生からも、本音の生の声を発信してもらっています。区で取り組んでいる「せたがや若者フェアスタート事業」は、返さなくていい奨学金ということで、区や区外からも多くの共感が集まり、3年間で1億円を超える寄付がありました。さらに力を入れて、来年の児童相談所の発足とともに全方位的に社会的養護をバージョンアップしていきたいです。

高齢福祉については、認知症の当事者が参画する条例づくりが佳境に入ろう



としているところです。今日は時間の関係で詳しく紹介できませんが、介護保険認定を受けている方のうち、認知症の症状がある方は約2万3000人、軽度を含むと約4万7000人となっており、世田谷区最大の課題です。みんなで作る住み続けたい世田谷にするには、

どうしたらいいか。(仮称)世田谷区認知症施策推進条例づくりにも、皆様のご  
関心、ご提言をいただければと思います。

本日の開催、この議論に大きく期待して、開催にご苦勞された皆さんに感謝  
したいと思います。

ありがとうございました。

## 基調講演

日本大学文理学部 諏訪 徹



皆さま、こんにちは。只今ご紹介いただきました、当大学社会福祉学科の諏訪と申します。この大会の実行委員長を務めています。

最初に少し、ご挨拶を申し上げます。このせたがや福祉区民学会は、会員大学の持ち回りで開催しております。この日本大学で行う

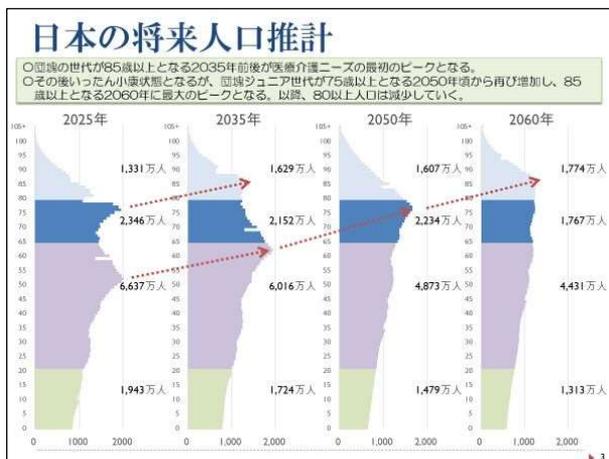
のは3回目です。3回目は、他の大学で初めてです。前は2015年の開催でした。

今年の大会は、長谷川会長がおっしゃったように、学生と当事者とのワークショップや分科会テーマも少し工夫をするなど、「協働<sup>みんな</sup>でつくる」というイメージを持てるように企画をしました。ぜひ、1日、有意義な学びをしていただきたいと思います。よろしくお願いします。

### ●世田谷というまちの特徴

最初に、世田谷というまちの特徴を踏まえ、「どんなまちをつくるか、みんな

でつくる時にどういうことをしたらいいか」について、お話をさせていただきます。このスライドは日本の将来人口推計です。もう日本は、人口減少局面に入っています。2025年まであと5年ですが、この年は何が大変かという、団塊の世代が75歳以上になる。75歳はみんな元気なので、本当に大変なのは30年以降、団塊の世代が80歳を超えて、そこから本当の介護ニーズのピークになります。



しかし実は、それでは終わらない。日本には人口の山が2つあり、団塊ジュニア世代がその後に控えていて、これが着々と高齢化をしていくので、本当に社会の変動が落ち着くのは2060年で、先は長いということになります。

では、世田谷はどうか。私は世田谷区に勤めて7年目ですが、世田谷区の将来人口推計（スライド）をまじまじと見たら、日本は減っているのに、世田谷区は増え続けていきます。

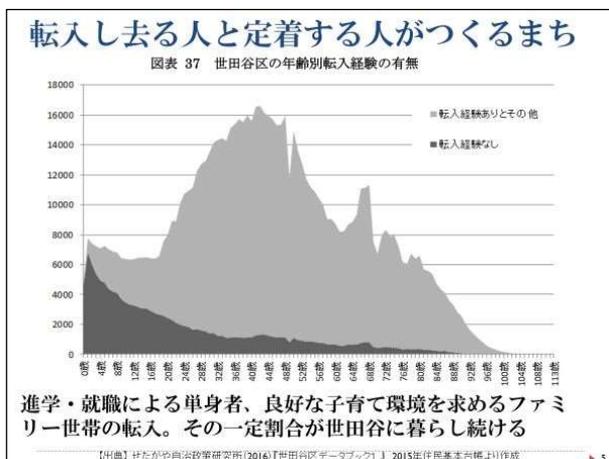


それから、世田谷は日本全体に比べ人口ピラミッドがユニークです。団塊ジュニアが圧倒的に多く、団塊世代が非常に少ない。なぜかという、1960年代の高度成長期のピーク時には田舎から出てきた人が東京に移り住んで、その後は東京は人口が減っている。特に都

心部は郊外化という形で、団塊の世代で上京した人が郊外に移り住んだために、世田谷は団塊の世代が少ないとわかりました。

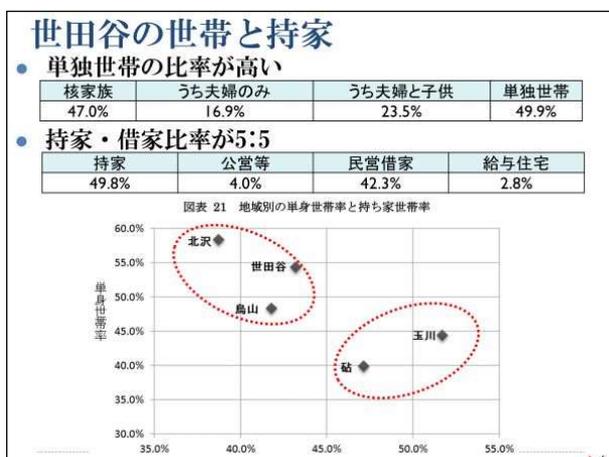
それと、将来推計を見ると、常に若い世代が入ってきている。これも非常にユニークな人口ピラミッドとなっています。日本の他の地域と同じように考えてはいけなと、よくわかったという感じです。常に若い世代の移住がある。つまり、世田谷は転居してくる人が、まず非常に多い。一定の年代で去って行く人もいるが、定着する人たちが、その後をつくっていく、そういうまちです。

2015年の住民基本台帳から作成した「転入し去る人と定着する人がつくるまち」という資料を見ると、3歳ぐらいから、ボンと他地域から流入した子どもが増えてきます。先ほど区長からありましたが、世田谷区は便利だから移住してくる人たちが相当いるということ。親世代の30~40代の人が入ってきて、子どもが増えて、小学2年生



ぐらいになると、3、4割が外から来た子となっている。それから、20歳、18歳ぐらいから人口が増えていく。これは大学の存在が結構大きいかなと思います。それから、働く世代の人たちが単身でも世田谷に相当入ってきています。子育てに力を入れている世田谷ということで、おかげで待機児童が日本一となっている。区の方に言わせると、これは正直にカウントしているからだ。確かに、新しくマンションが建ち続けています。

つまり進学や就職で単身の方が、まず来る。そして、良好な子育て環境があるので、ファミリー世帯が転入してくる。その中で一定割合の人が世田谷に残り続ける形で、地域をつくっていく。そういうまちだとわかりました。私は、埼玉県の郊外在住ですが、こんなピラミッドじゃないです。



世帯と持家についても、全国に比べるとユニークな特徴があります。全国的に見ると、単独世帯は4割ぐらいですが、世田谷は半分、49%ぐらいが単独世帯です。1つは単身者が外から来るということ、おそらく高齢化もあると思います。ご夫婦で暮らして、ど

ちらかが先にお亡くなりになるために単独世帯が増えているのも特徴となっています。また、持家、借家の比率も、日本の持家率は全国的に見ると6割ぐらいです。世田谷は半々ぐらい。これも、単身で来られる方が結構いることを反映していると思います。

世田谷の5つの地域でも、相当に特徴が違う。玉川や砧は持家世帯が多くて、単独世帯の比率が低い。持家で暮らしているところは、単独世帯もじわじわ上がる。これは、夫婦の方が1人になって、単独が増えている。また、都心に近いほど単身者が多くなる。地域の状況も随分違うと、改めて思いました。

### ● 世田谷の強み

世田谷の強みは何だろうか。やはり、若者や移住者が多いことです。私の住んでいる埼玉のまちは、ここから先あるかどうか分からない。うちの息子も、大学生になったら家を出たいと言っています。みんな世田谷を目指すのかなと。

多くの大学が立地して、若い人が来るのが世田谷の強みです。子育て世代が入ってくるのも、まちの持続性を考えると、とても重要なことです。

それから、区民力、地域力が豊か。1 つは、経済的に豊か、日本で最も豊かな 23 区の中でも相対的に豊かです。そして、地域活動の力です。本当に、職歴を聞いても一流の方が多し、豊かな地域活動があるし、世田谷はずっとまちづくりに取り組んでこられた。

高い行政力もあります。私は福祉分野しか知りませんが、そこでは先駆的な取り組みをされています。世田谷区の地域包括ケアシステム、どこを見ても、世田谷区の事例が出ています。最近では、まちづくりセンター、あんしんすこやかセンター、社協の三者協働の取り組みもあります。

児童相談所も 23 区の中でもいち早く取り組む。実際に、他の地区の行政の方と話しても、世田谷区はよくやっている、文章も上手だし、よくまとまっている。区民の力、高い行政力、事業所の力、この 3 つが組み合わせられると、他から見ると、うらやましいくらいです。

ただし、色々な問題はあるんじゃないか。豊かな人が多いその裏で、苦勞されている方は沈みがちになる。多くの若者が来る、豊かな人が多い。その中で苦しい立場の人の問題も潜在している。これだけ人口が多いと、目が行き届くかというとなかなか難しい。そういう問題もあると思います。世田谷区は、こういうまちだと、改めて勉強しました。

### ●住み続けたくなる<sup>まち</sup>世田谷とは

住み続けたくなるまちとは、どういうまちなのだろう。私は地域福祉を専門にしているので、その立場から普段考えていることを申し上げます。住み続けたくなるために、大切なこと。やはり仲間と一緒に何かをして、思い出がある、私たちの物語が大切だと思います。その思い出、物語があるから、まちがもっと好きになって住み続けたくなると思います。いくらお金があっても、何があっても、その地区に愛着がもてるのかというと、自分たちで何かをやった経験や、子どもと一緒に遊んだ公園など、自分の体験の中で刻まれたものがあるから、そのまちが好きになるのだと思います。住み続けるために、仲間と一緒に努力する。その時の資源が、自分を助けてくれ、住み続けられるようになる。

自分のことですが、父親は地域に関わらずに生きてきた人間です。最初はい

やいや、自治会活動に関わらざるを得なくて関わって、「この町の団地の将来が心配だ」という話をして、なぜか福祉のNPOを一緒につくった。助け合いの有償非営利の活動を団地で作った。そうしたらやっと友達ができ、今は体調が悪いので、友達が見舞いに来てくれる。「地域に帰って来いよ、みんな待っているよ」という関係ができた。たった、5年か10年の話です。

そういったものを見ても、何か、このまちを変えようと努力して、色々な企画をして、一緒にNPOをつくろうとすると、このまちから出ていきたくないと思うし、それが助けになるということです。そういう思いがあると心身の状況が低下したときも、粘れるということだと思います。

厚生労働省も地域包括ケアシステムで、自助、互助、共助、公助が大事だと言っています。最近では自助、家族の選択、本人の選択・心構えを強調していますが、ちょっと違うかなと私は思っています。自助といっても、1人だけで頑張れる人はあまりいないです。「みんなで頑張ろう、地域で暮らしていこう」とする仲間がいるかいないかが大きいと思います。仲間がいると、この地域で頑張ろうかなと。そうじゃなければ、どこかのサービス付高齢者住宅に行ったらいいのです。1人で生きていくのは大変ですからね。あの人が頑張っているから、何かの時に助けてと言える。そういうものがないと住み続けられない。半分、幻想で、半分は空元気みたいなところがありますが、そういう気持ちになれると思います。住み続けたいくなるまちとは、いくら世田谷の行政力が高いといっても、行政が与えてくれるわけではない。自分たちが一生懸命に努力して、仲間ができ、初めて、そういう気持ちになれるのかと思います。

住民の活動は、見ていると一つ一つはそれほど大したことはしていないわけです。サロンで月に1、2回集まって、おしゃべりしている。仲良くなって、どこかに出かける先をつくる。しかし、そういう関係があるから、自分が行かないときに声をかけてもらえる。それから、情報が得られることは大事です。地域のミニコミ誌はあまりなく、マスコミばかりです。インターネットで地域の情報を探るのは大変です。結局、地域の情報は、やはり友達や知り合いから得ています。住民の活動はやっていることはなんてことはないが、その中で、生活にハリができる、情報が手に入るか、気づいてもらえる。

それから、独り暮らしでも生きていける、そういう姿を仲間から学べるのも

大きい。これも私が住む地域の自治会で100歳の独り暮らしのおばあさんから話を聞こうと、町会で勉強会をされた方がいました。みんな、その方の話を聞いて、勇気もらったと、みんなで学び合ったわけです。そういう関係性がある地域をつくることです。ここで暮らせるかなという希望が持て、頑張ろうかなという気持ちになれるのだと思います。

では、世田谷バージョンでどんなまちをつくるか。さっきの非常に特徴的な人口移動があります。まず、よそ者・若者・ばか者が面白い地域。これは、まちづくりで言われることです。これだけ若い人が入ってくるので、その人たちが面白がれる、そういう活動が豊かな地域をつくっていくことが1つ。それから、子育て世代も結構入ってくる。世田谷にゆかりがなくても、外から来る人がいっぱいいるので、移住者を喜んで迎えられる地域。ある地区では、マンションの管理組合がウエルカムパーティーを開いたりしている。そういう形で、外から来た人がスムーズに地域に入れて、すぐ友達ができるような、そういうまちづくりの活動がいいかなと思います。

さっきの人口ピラミッドを見ると、外から世田谷に来て、単身者や働いている人は、なかなか地域には関われない。そうすると、地域レベルの最初の機会は、子どもを育ててるときが最初のポイントだと思います。この人たちもダブルで働いていたりするので、なかなか忙しい。言うのは簡単だけど、難しいとも思いますが、でも、そのときにいろいろ地域活動に溶け込めるようなプログラムがあるといいかなと思います。

主力は高齢世代なので、その世代がまちづくりに参加できるようにすることもポイントです。特にずっと仕事ばかりしていて、地域にずっと関わっていない、よく言われる男性の問題。これはどこの地区でも言われますが、そういう世代の人たちがまちに関われるようになるといいかなと思います。

都心に近いので、遊ぶ場所もたくさんあり、地域に関わる前に遊びたい人もいっぱいいるかもしれませんが、そうであっても、少し地域にデビューできるような機会があるといいのではないのでしょうか。75歳以上になると、遊ぶ仲間も減ります。地域に友達も欲しくなります。それに向けて、そういう準備ができるといいかなと思います。

最終的には、どんな人でも友だちがいて、出かける場があり、やることがあ

る。そういうのは、居場所があるという言い方もできます。そういう地域をつくることかなと思います。

世田谷の中でも苦しい立場の方もたくさんいらっしゃるだろう。そういう人たちがどういうふうに地域の居場所に出していくのかな、ということです。誘って行くのか。それもけっこう重要な課題だと思います。

それから、障害を持っている人。どうしても地区のいろいろな集まりを見ると、高齢や子どもの問題がメインです。そこに障害児を持つ親御さんなどが、どう関わっていくか。

これも私の地域の事例です。全国どこでも取り組みをしていますが、障害児を持つ親の会の人がお子さんを連れて地域のイベントに参加し、とても喜んでいました。これをぜひ、このまちの全地域でやってほしい。だんだん、そういう活動が広がってきています。今ある居場所に少しずつ仲間を増やしていく、そんな形でいいので、どんな世代の人でも、どんな条件の人でも、友達がいて、居場所がある地域をつくっていく。そういうことをしているうちに、私たちの物語や思い出ができて、だんだん地域のことを自慢したくなり、次の世代に引き継ぎたいと、考えるようになる。そんな形で、まちづくりが循環すると思います。

### ●みんなで取り組み、みんなで作る＝協働

最後に協働です。みんなで作る、みんなで取り組む。協働していく主体は誰かということ、1つは住民です。そして、この学会にもたくさん来ていただいている専門家です。これは極めて重要です。そして行政の力。ちょっと、大学を忘れてたな。大学も専門家の立場で関わるのかなと思います。

まず、住民の活動について。どこから取り組むか、何から取り組むかということ。根本的には、まちづくりの根本は住民の力になるので、住民が本気でやらなければいけないと思っています。何からやるかということ、あんまり難しいことをやろうとしなくていいと私はと思っています。何よりも、地域のことを考える場をたくさん、つくっていく。話し合う場ですね。そういうのを、できるだけ身近な地域でつくることが、結構大事かな。「〇〇まちのこれからを考える」「〇〇団地のこれからを考える」とか、そういう場をたくさんつくることが大事です。

次に、今ある活動を、少しだけ発展させること。介護保険の世界で、介護予防に力を入れて取り組まれています。もう1つは、サロンのような居場所づくりが取り組まれています。しかしいろんな地区を見ると、この2つが切り離されて考えられていることが多い。だけど、体操はみんな、週1回ぐらいやります。それに、ちょっとだけ来なかった人に声かけをしようとか、その後お茶をしようとする、立派な週1のサロンになります。というような形で、あまり無理する必要はない。今の活動にちょっと足すだけで、実は多機能型の助け合いの機能が付けられると考えてください。週1のサロンなんて、あまりないです。普通は月1です。そういう形でやるといいかなと思います。

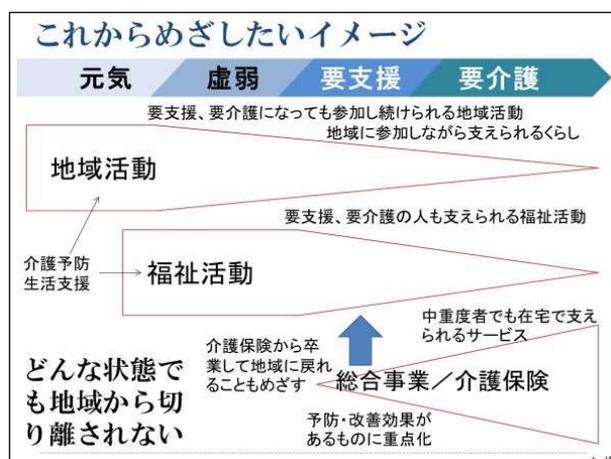
また、身近な暮らしの情報を届ける。別に住民が相互に助け合わなくても、行政サービスを利用しなくても、たくさんの民間サービスがあります。特に都会にはいっぱいある。だけど、知らない人は知らない、知ってる人は知ってるということになります。これも私のいくつか関わっている地区では、自治会が最初は自分たちで、何かサービスをやらなければと思って、住民と考えたけど、色々聞いてみたら、色々なサービスを使って上手に生きている。だったら、チラシを作ればいいと。配食業者のチラシを作って提供したり、そんなことを住民たちが、やり始めました。そんなような活動とかです。

住民の活動で大事なのは、自分たちを褒める、時々、自分たちで「よくやったよね」と。そう言ってくれる人たちを外から呼んで、いい気持ちになって次の活動にエネルギーを出すことが、とても大事だと思います。

ちょっと考えてもらいたいのは、住民の活動は、元気なうちはできる。元気がなくなると、やはり出にくくなって、遠慮がちになって、引退してしまう。そこがもったいないところです。

外出が難しくなった仲間を切り離さないように、ちょっと考えてもらおうと、いいかなと思います。

集まる1つの場所に来てサロンをやっていたが、そうではなくて、仲間内で足が悪くなって出てこれなくなかった人の家に、時々、み



んなで行ってみよう。これもサロンです。食事も、その家に持ち寄り、食事会をやる。すると、食事サービスにもなる。そういうような、少し弱くなった場合も、やれるようなことを考えてほしい。そういう活動をするにはあとで申し上げる専門職の力が重要です。住民が一步踏み出すためには、必要です。

住民がやっちゃいけないことがあります。大きなことをやろうとしてはいけない。今の活動を続けることに価値があると思います。あまり人を支えようと思わないほうがいい。自分たちのために、自分たちができることを、仲間と一緒にやると、割り切れればいい。事故のことを考えすぎてもよくない。個人情報も萎縮しない程度に上手にやらないといけない。行政の方はぜひ委縮させないような関わりをしてほしいです。この前も、ある区で台風19号のとき、「災害時要支援者名簿を出して」と言ったら行政がダメだということがあり、町会の人々が怒りまくっていましたが、そういうところはきちんと行政で考えてほしい。

参画しない人もいます。どこでも男は出てこない。困ったときに出てくるからほっておけばと。しかしそんなことを気に病みすぎても仕方ないので、楽しみながらすればいい。大事なことは、住民だけではなく、専門機関や行政に声をかける。そういうことができる専門機関であってほしいです。

専門職は、私も介護福祉士や社会福祉士養成にかかわっていますが、住民との協働の仕方がわからない人が多い。みんな真面目にサービスをしています。それはわかりますがサービスだけで支えようとする意識が強い。それと、住民の活動を知らないことが多いです。また、住民の活動を資源のように考えると、絶対、住民は相手をしてくれない。一方的にケアプランに入れようとしたらすると、「あんたの下請けじゃない」「ケアマネがなんで威張ってるんだ」と住民は怒る。そういういうことは、まず変えないといけない。

家族、友人、地域がしていることを、支援計画を考えるときには評価をしてほしい、情報を取ってほしい。住民が辛くてしょうがないことは専門職がカバーする。でも、つながりを切るようなことはしてはいけない。民生委員さんから、「頑張って支えていた方がデイサービスにつながってホッとした。だけど、その後、地域からいなくなっちゃった」と聞きます。こういう時はケアマネさんが気を利かせて、「この日はサービスを利用しているから来ていない、でもこの日には住民の方に来てほしい」など、連携をしてもらえるといい。

生活の中で、本人の役割をつくる。有名な「あおいけあ」という認知症の小規模多機能型の事業所が神奈川にある。ここは認知症の高齢者がボランティアをする地域のボランティアセンターで、たくさんの地域活動をしています。地域包括支援センターから介護予防体操の“さくら”が欲しいと言われたら、小規模多機能の高齢者が出て行くとか。ゆるやかな見守りや支援つきで活動できる人がいっぱいいる。そういう役割を住民と協力してつくっていくことをしてほしい。専門職がしっかり、困ったところは支えてくれると、住民は安心して活動しますから、「そんな人も支えられるの？」という力を発揮します。そういう協働ができる専門職になってほしいです。

介護保険の要支援や軽度の要介護の人は住民だけでは支えられない。そういうところに専門職の人がかかわる。ちょっと移動を手伝えれば、サロンに行ける。仲間が認知症になったときに、どう対応したらいいかわからないとき、専門職がその場に行って、見守りをできるようにするとか。あるいは事業所の隣に、そういう場をつくることを考えると、住民ができないことを支えることを、住民と相談しながら、やってほしいと思います。

世田谷は、子どものときから、外から来る人が多いことを考えると、区長の話にもあった、子どものための多様な居場所、学習支援の場を地域でつくることが重要な課題となります。その中では、暮らしが楽でない方もいる。子どもの時期を辛いものにしないことが大事です。

今までの児童福祉は、学齢前までが中心で、その先は、学校に渡してしまう。社会的養護の対象はごく一部ですが、子どもの貧困率が7人に1人だと支援からもれて、社会的養護の対象になったほうがまだ良かったと言われる人もたくさんいます。困難を抱える子育て世代は、社会的養護の対象よりもっと多いはずだと考えたほうがよい。今まで、ずっと社会的養護の問題を都道府県の仕事としてきたので、市町村の資源が不足しています。都内でも真っ先に児童相談所に取り組む世田谷区です。すでに、フェアスタートや居場所づくりは、色々な形で取り組まれています。これをさらに、児童館や学校などと連携して、多様な居場所や学習支援の環境づくりにも取り組んでほしい。そうすると、「世田谷で育てて良かった」ということになり、世田谷を支えてくれる、そういう経験をしてくれるといいなと思います。

こんなユニークな学会は、学会長もおっしゃったように、他にはないと思います。私たちの学生も、大変この学会には育てていただいています。今日もたくさん発表しますし、学生ワークショップには、前回大会にボランティアとして参加した学生が今度はファシリテーターとして参加します。その学生たちの中には世田谷区の職員や社協の職員になって、世田谷に住み続ける学生もいます。外から来た人間が世田谷の一員として、色々なことをしてる姿も実際に体感しています。そういう意味で、この学会の機会があることを教育する立場として、非常に感謝しています。

今回もまた、いろんな出会いがあるといいなと思います。

ご清聴ありがとうございました。



# 実践研究発表



## ポスター発表一覧

【掲示】12:00～16:25

【5階3502教室】

【コアタイム※】13:50～14:20

助言者 杉原 たまえ（東京農業大学国際食料情報学部国際農業開発学科教授）  
 根本 治代（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科准教授）  
 神田 裕子（東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科准教授）

	発表者	所属	タイトル
1	小泉 絵美 笠原 康右	世田谷区福祉人材育成・研修センター	テーマ1 住み続けたいまちづくり 「夏休み親子介護施設体験」 —身近な地域の施設について知ろう—
2	高山 都規子	在宅介護家族会かたよせ会	テーマ5 予防・健康・生きがいづくり 「介護されない、しない生活を目指す」
3	太田 好美	等々力の家デイホーム	テーマ5 予防・健康・生きがいづくり 歩行訓練プログラム—「遊歩倶楽部」取組み—
4	佐々木 克祥 高良 直子 芥川 裕美子 高橋 敬子	等々力の家居宅介護支援事業所	テーマ6 地域をつなぐネットワーク その人らしく暮らしていくために私達が地域でできること
5	横井 美代子	世田谷ボランティア協会	テーマ7 ケアにおける協働・連携 3年目の失語症カフェ —失語症会話パートナーを知っていますか—
6	久保田 久仁子	訪問看護ステーションけやき	テーマ8 ひとり一人に向きあった実践 訪問看護ステーションのリハビリテーションにおける「物」の活用 —手作り自助具から最新機器まで—
7	宮本 愛 渡辺 千鶴 田邊 晴 小西 敏郎 不破 珠美 細田 明美 光原 ゆき	東京医療保健大学	テーマ7 ケアにおける協働・連携 入院中の子どもに付き添う母親の食事に関する実態調査
8	磯崎 寿之	チーム三茶	テーマ7 ケアにおける協働・連携 チーム三茶による在宅版パスを通した本人主体の協働連携 —地域包括ケア多職種連携を当事者中心にする実践研究—

※コアタイムは、発表者が説明および質疑応答します。

ポスター会場は、12時～16時25分まで自由にご覧いただくことができます。

## 分科会(口頭)発表一覧

<b>第1分科会</b>		<b>【5階3503教室】</b>		
<b>テーマ1 住み続けたいまちづくり</b> <b>テーマ8 ひとり一人に向きあった実践</b>		<b>テーマ4 多世代による文化交流</b> <b>テーマ10 最後までその人らしく生きる</b>		
進行役・助言者		中原 ひとみ(世田谷区特別養護老人ホーム施設長会) 長岡 光春(世田谷区高齢福祉部長)		
	発表者	所属	タイトル	開始
1	国枝 知香 金沢 淳子 佐藤 彩子 塩崎 友美	松原あんしんすこやかセンター	テーマ1 高齢者が地域でいきいきと暮らせるために必要なこと ー「ふれあい松原」を通してあんしんすこやかセンターの役割を考えるー	13:30
2	門脇 泰成 本間 仁志 嶋田 あゆか 並木 理紗	日本大学文理学部社会福祉学科 日大パレット	テーマ4 「椎の木」 ー多世代を結び、懐かしのひと時をつくることー	13:55
3	原 ひろみ 三木 義一	世田谷区立身体障害者自立体験ホーム なかまっち	テーマ1 それぞれの自立を一緒につくる ー自立体験ホームなかまっちの20年と今後の展開ー	14:20
4	市村 和行 景山 香代 中村 幸子 秋森 かつ枝 多賀 正孝 伊藤 潤一 矢野 和子 鬼塚 正徳	世田谷お出かけサポーターズ	テーマ1 世田谷お出かけサポーターズの活動(中間報告) ー買い物困難者の為のバスを走らせる事による住みやすい世田谷の共生社会の実現ー	14:50
5	永井 富士子 荻野 邦子	訪問看護ステーションけやき	テーマ8 Aちゃんとの10年間を振り返って ーチームが可能性を広げるー	15:15
6	石井 琢也 杉本 義子 倉橋 俊介 渡邊 尚美 森川 敦子 齊藤 きみ子	世田谷ケアマネジャー連絡会 施設ケアマネジャー部会	テーマ10 高齢期の住まいについて考える ー自宅、施設、それとも?ー	15:40
7	中山 倫之 沢田 美佐子 馬場 恵美子	社会福祉協議会祖師谷地区事務局	テーマ1 祖師谷地区「公社けやきの会」の取り組みについて	16:05

<b>第2分科会</b>		<b>【5階3504教室】</b>		
<b>テーマ2 子ども、若者の輝く社会</b>		進行役・助言者 園田 巖(東京都市大学人間科学部児童学科准教授) 森田 規子(世田谷区教育委員会事務局教育相談専門指導員)		
	発表者	所属	タイトル	開始
1	田中 宏明 今井 菜緒 燕昇司 利胡 長村 藍子	東京都市大学人間科学部児童学科	現代の保護者の子どもとの関わりについて ースマートフォンを活用した育児からの考察ー	13:30
2	雨宮 絵理 榎本 文香 川上 美鈴	東京都市大学人間科学部児童学科	子どもが道具を自由に使えるために ープレーパークの役割ー	13:55
3	山根 亜希	子ども・若者応援団	「親カフェ」という居場所ー子どもの不登校や生きづらさで悩む保護者との出会いと安らぎの場ー	14:20
4	松岡 ゆう子 河北 香織	世田谷区社会福祉協議会 子育てサロン おきらくごきらく広場	人と情報につながる、妊婦さんへの機会づくり ー子育てサロンに参加するお母さんの声から生まれた、妊婦さんの集える場ー	14:50
5	佐藤 真由美 伊藤 真理子 坂田 朗	鎌田のびやか園	『子どもの心を育てるインクルーシブ保育2』	15:15
6	内田 朝代	若者の自立支援すみれブーケ	児童養護施設・里親を巣立った若者の再出発と自立を支える場としてのシェアハウス運営 ー安心して住むことの出来る居場所の必要性ー	15:40
7	梅田 弥子	烏山総合支所保健福祉センター 子ども家庭支援課 子ども家庭支援センター	母子実践プロジェクト ー母子生活支援施設での実践を通してー	16:05

第3分科会		【5階3506教室】		
<b>テーマ3 働く・社会に参加する</b> <b>テーマ9 やまいや障がいとともに豊かに生きる</b>		<b>テーマ5 予防・健康・生きがいづくり</b> <b>テーマ11 多様性をみとめあう共生社会づくり</b>		
進行役・助言者		北島 洋美(日本体育大学体育学部健康学科教授) 橋本 睦子(社会福祉法人大三島育徳会障害者支援局長)		
	発表者	所属	タイトル	開始
1	大森 猛 鈴木 美穂子 遠藤 慧	烏山地域社会福祉協議会事務所 上北沢地区社会福祉協議会	テーマ11 障害の有無を超えて繋がる居場所づくり ー上北沢縁側プロジェクトー	13:30
2	前田 美波 林 涼子 桑原 初音	日本大学文理学部社会福祉学科	テーマ9 障害分野でのボランティア活動ー福祉の現場において 学生ボランティアとしてできることー	13:55
3	鬼塚 正徳 石黒 真貴子 泉谷 一美	世田谷区福祉移動支援センター (そとでる)	テーマ11 「介護タクシー」と「移送NPO」の違いと使い分けの研究 ー誰もが自由におでかけできる世田谷を目指す「そとでる」の実務からー	14:20
4	川邊 循	世田谷ボランティア協会 パートナーセンター担当	テーマ11 パートナーセンターはじめました ー認知症がある人もまだない人も・障害のある人も ない人も水平に繋がるー	14:50
5	田中 浩伸 紀平 太郎	世田谷サービス公社	テーマ3 精神障害者が働き続けられる職場づくりについて ー(株)世田谷サービス公社の取り組み事例についてー	15:15
6	下坂 優孝 岡 基 渡邊 奈月	りはっぴい	テーマ9 外出リハビリ倶楽部のあゆみ	15:40
7	中嶋 嘉章 百武 攻 西村 進 貞清 佳子	世田谷区社会福祉協議会 太子堂地区事務局	テーマ5 太子堂ダンディクラブー退職後の男性の仲間づくり・ 地域参加へ向けてー	16:05

第4分科会		【5階3507教室】		
<b>テーマ6 地域をつなぐネットワーク</b>		<b>進行役・助言者</b> 村田 幸子(福祉ジャーナリスト) 渡邊 裕司(世田谷区社会福祉協議会地域福祉課長)		
	発表者	所属	タイトル	開始
1	許斐 侑加 高橋 彩 三浦 唯奈 神田 裕子	東京医療保健大学医療栄養学科	世田谷区における地域連携・貢献活動について	13:30
2	吉田 和弘	地域障害者相談支援センター ぼーときめた	お困りごとの相談窓口『ぼーときめた』の取り組み ーお困りごとはございませんか？ー	13:55
3	石渡 友美香 南 雪乃 宮田 大樹	日本大学文理学部社会福祉学科 日大さくらサロン	日大さくらサロン ー学生ならではの継続したネットワークづくりと 今後の展望ー	14:20
4	寺田 友明 小坂 美和子 山本 恵理	砧地域ご近所フォーラム2020実行委員会	「顔の見える関係」から次のステージへ ー砧地域ご近所フォーラムの取組みー	14:50
5	横溝 照子 中村 さく 宮野 友美袈	世田谷区社会福祉協議会 経堂地区事務局	ひきこもり家族会のとりのくみ ー地域でつながる つなげるー	15:15
6	坂口 千恵子 中尾 有紀子	世田谷区社会福祉協議会 下馬・野沢地区事務局	下馬・野沢からはじまる子育ての輪 ー下馬・野沢地区子育て関係団体の取組みー	15:40
7	齋 佐一 黒木 勉 池島 孝子	世田谷スポ・レクネット	「スポーツ・レクリエーション」それは楽しいを生み出す 原点ースポーツ・レクリエーションというツールを使って コミュニティー	16:05

第5分科会		【5階3508教室】		
テーマ6 地域をつなぐネットワーク		テーマ7 ケアにおける協働・連携		
進行役・助言者		久保田 純 (日本大学文理学部社会福祉学科助教) 高橋 裕子 (世田谷区砧総合支所 子ども家庭支援課長)		
	発表者	所属	タイトル	開始
1	内藤 麻里 水内 寿美子	奥沢あんしんすこやかセンター デイホーム奥沢	テーマ6 地域の力を活かせる場としてできること	13:30
2	大平 泰博 小林 伸光	世田谷区介護サービスネットワーク 北沢地域部会	テーマ6 雑居祭りに参加して ー北沢地域部会から発信する地域包括ケアシステムの実現ー	13:55
3	中村 碧 下山 香苗	特別養護老人ホーム久我山園	テーマ7 尿路感染症を防止するために陰部洗浄方法の統一を試みて	14:20
4	長見 亮太	世田谷区立下馬福祉工房	テーマ7 エピソードを通じて本人の気持ちに気づく ー知的障害がある方の気持ち、心情をどう捉えるかー	14:50
5	田島 和美	上町工房	テーマ7 特別支援学校介助員を通して学んだこと、感じたこと	15:15
6	岡田 真未子	児童養護施設福音寮	テーマ7 児童養護施設における多職種連携について ー医師、看護、心理職の働きからー	15:40

第6分科会		【5階3509教室】		
テーマ8 ひとり一人に向きあった実践				
進行役・助言者		大熊 由紀子(国際医療福祉大学大学院教授) 張 珉榮 (日本大学文理学部社会福祉学科助手)		
	発表者	所属	タイトル	開始
1	新井 里奈 穴戸 每名 川又 千弘 古家 雄太郎	日本大学 駒澤大学	せたがやゼミナールの実践	13:30
2	新澤 亜希 加藤 貞行	特別養護老人ホーム上北沢ホーム	ケアを受け入れてもらうためのアプローチ ー入浴ケアを通して介護職員が学んだことー	13:55
3	小熊 祐慈	おおらか学園	不安を強く抱きやすいAさんとの関わりについて	14:20
4	濱野 泰裕 保坂 和美	特別養護老人ホーム上北沢ホーム	食事を継続して召し上がって頂くために ー食事の提供時間ー	14:50
5	長谷川 裕和 才木 浩也 中澤 真美 河合 靖子	小規模多機能ホーム三宿	『おかえり、ただいま』と、声が響くホーム ー小規模多機能ホーム三宿での生活ー	15:15
6	梶 由香里	上町工房	気になりの多さからトラブルになりやすかったAさんとの関わりと変化	15:40
7	村本 真澄	世田谷区介護サービスネットワーク 介護ネット塾 みずたま介護ST自由が丘ケアプランセンター	行動 心理症状の改善を多職種で取り組み在宅生活継続を目指す ー妻と一緒に過ごすためにー	16:05

第7分科会

【5階3510教室】

テーマ11 多様性をみとめあう共生社会づくり

進行役・助言者 鴨澤 小織(日本大学文理学部社会福祉学科助教)  
木本 義彦(世田谷区北沢総合支所保健福祉センター所長)

	発表者	所属	タイトル	開始
1	瀧 楓花	日本大学文理学部社会福祉学科	キャンパスライフを通して考える共生社会 ー合理的配慮の視点を大切にー	13:30
2	露崎 愛	輝水会	スポーツを通じた地域連携作り ーボッチャを例としてー	13:55
3	金安 博明 山本 学	世田谷区社会福祉協議会	地域共生社会の実現に向けた個別支援と地域づくりの 一体的な展開ーコミュニティソーシャルワーク機能の 発揮を軸とした社協の取り組みー	14:20
4	斉藤 由子	上町工房	楽しさをベースに ー知的障害のある方の施設での取り組みを通してー	14:50
5	グスティ アユ フトウ メルタ エカ フトウリ ウエニ ワハユニ ネン スラニ シティ ランギ	特別養護老人ホーム等々力の家	「EPAインドネシア介護候補生」そのプロセス ーインドネシアでの教育、日本での高齢者ケアに ついてー	15:15
6	中島 勝 宮原 陽子 小杉 かおる 野々村 武志	世田谷区立烏山福祉作業所	音楽でひろがる・音楽でつながる夢のお話	15:40
7	山本 学 久保 彩子	世田谷区社会福祉協議会	地域住民が地域に参加するきっかけづくりとその効果 ー「地区サポーター制度」拡充の取り組みー	16:05

# ポスター発表

【5階3502教室】

## 助言者

杉原 たまえ（東京農業大学国際食料情報学部国際農業開発学科教授）

根本 治代（昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科准教授）

神田 裕子（東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科准教授）

	発表者	所属	タイトル
1	小泉 絵美 笠原 康右	世田谷区福祉人材育成・研修センター	「夏休み親子介護施設体験」 ー身近な地域の施設について知ろうー
2	高山 都規子	在宅介護家族会かたよせ会	「介護されない、しない生活を目指す」
3	太田 好美	等々力の家デイホーム	歩行訓練プログラム ー「遊歩倶楽部」取組みー
4	佐々木 克祥 高良 直子 芥川 裕美子 高橋 敬子	等々力の家居宅介護支援事業所	その人らしく暮らしていくために私達が 地域でできること
5	横井 美代子	世田谷ボランティア協会	3年目の失語症カフェ ー失語症会話パートナーを知っていますかー
6	久保田 久仁子	訪問看護ステーションけやき	訪問看護ステーションのリハビリテー ションにおける「物」の活用 ー手作り自助具から最新機器までー
7	宮本愛 渡辺千鶴 田邊晴 小西敏郎 不破珠美 細田明美 光原ゆき	東京医療保健大学	入院中の子どもに付き添う母親の食事 に関する実態調査
8	磯崎 寿之	チーム三茶	チーム三茶による在宅版パスを通した本 人主体の協働連携 ー地域包括ケア多職種連携を当事者中心 にする実践研究ー

※コアタイムは、発表者が説明および質疑応答します。

ポスター会場は、12時～16時25分まで自由にご覧いただくことができます。

**「夏休み親子介護施設体験」**  
— 身近な地域の施設について知ろう —

世田谷区福祉人材育成・研修センター

○小泉 絵美、笠原 康右

（介護施設体験 小学生 親子）

## 1. はじめに

次世代を担う小学生及びその保護者に介護施設や介護の仕事、高齢者の理解を深めてもらうことを目的として実施した「夏休み親子介護施設体験」について報告する。

## 2. 実施概要

- (1) 目的：次世代を担う小学生及びその保護者に、親子での介護施設体験をとおして、介護施設や福祉の仕事、高齢者への理解促進を図る。
- (2) 対象：区内小学3年生から小学6年生までの児童とその保護者
- (3) 定員：各施設5～20名（先着順） 計205名
- (4) 場所：区内特別養護老人ホーム20か所
- (5) 実施日：令和元年7月26日から8月24日までの各施設が指定する日
- (6) 内容：車いす、特殊浴槽、リフト、介護ロボットの体験や施設見学、高齢者との交流等

## 3. 参加者の状況

- (1) 申込者：児童119名、保護者87名 合計206名  
参加者：児童105名、保護者78名 合計183名

### (2) 参加者の声

参加者からは「施設について理解でき、イメージが変わった」「将来の役に立つ」「介護される側の気持ちがわかった」「車いすやリフトが楽しかった」「介護機器が進化し、利用者にも職員にもやさしい」「皆さんの笑顔が印象的」など好意的で、児童から「ここで働いてみたい」という声もいただいた。

また、夏休みの自由研究として学校に提出した、との報告もいただいた。

## 4. 今後の課題

少子高齢化が進展し、労働力人口が減少する中、福祉職場の人材確保は非常に厳しい状況にある。

その理由の一つには福祉の仕事へのマイナスイメージが先行し、介護施設についても「知らない」ことがあると考える。そのため、小学生親子にまず、施設について知ってもらう機会として、本事業を企画、施設の方とともに実施した。区内小学校にチラシを配付することで、定員以上の応募があり、多くの方に関心を持っていただけた。

まず「知ること」が大切で、体験を通して、小さい時から福祉について学ぶことは、子どもたちの成長過程においても大変貴重で、親子で学ぶことも大変重要でよい機会となったと考える。

今後も福祉についての理解が進むよう、関係者の方々とともに取り組んでいきたい。

<助言者コメント>

- このような活動は、福祉職場の人材確保というだけでなく、核家族が主流となった現在、家族の中に高齢者の存在がなくなった今日の日本においてとても大切なことです。小さなお子さんに早い段階で介護の実態について知ってもらうためにも貴重な機会だと思います。
- 見学する小学生とその保護者だけでなく、見学を受け入れた高齢者の皆さまにとっても、交流を通じた何らかの効用があるのではないかと、その点を次回、是非おうかがいしたいと思います。



**「介護されない、しない生活を目指す」**

在宅介護家族会かたよせ会

高山 都規子

( 明るい未来のために )

**1. 目的**

平成6年元気だった主人が突然、脳梗塞で倒れ、その時私は定年退職したばかり、急に介護をする身となる。娘時代父親を看病した経験はあったがとまどう事ばかりだった。その当時社会福祉協議会が介護をしている人を一泊旅行に連れて行ってくださる業務があり、その時知り合った12名で平成9年11月「かたよせ会」として立ち上げ、お互いの情報交換や癒しの時間を持つ事を目的としている。

**2. 実践内容**

- (1) 毎月1回第3木曜日10時から16時「上北沢ふれあいの家」32名参加  
年会費1500円参加時200円催事のみ300円
- (2) 音楽：毎年6月にラテングループ「ロス・コンパニユロス」のコンサートや、歌、ピアノなどの演奏会もしている
- (3) 認知症について：あんしんすこやかセンターより認知症の寸劇を上演
- (4) 認知症ケアの目標：保健センターより認知症予防の体操をしている。

**3. 結果**

イベント各種ありで、14回目のファッションショー、コンサート、落語、男の台所出前シェフ、フリーマーケット、新年会など色々あるので、会員の皆さんは楽しみに来ている。

**4. 今後の課題と考察**

現在介護現役の方々が少なく、看とられた人が多くなっているが、これから介護をする人達のために看護経験をしている方々の情報が沢山あるので頼りにされている。看とられた人達もこれから住み慣れた土地で元気に過ごせるよう「介護しない、されない」を目標に日々を送っている。私は現在「認知症カフェ」のボランティアをして認知症を理解するよう努力している。

<助言者コメント>

- ・人が老いていくことは、誰もが避けられないことであり、その中で介護する、介護されるということは、日常の営みのことだと思います。ただそれを支える家族のあり方が変化している中で、お互いに支えあうことを、家族を超えて行うことの重要性は増しているのです、このような活動を今後も継続していただき、地域の生活を支えていただきたいです。



## 歩行訓練プログラム

### —「遊歩倶楽部」取組み—

社会福祉法人奉優会 等々力の家デイホーム

○太田 好美

( 社会参加 認知症予防 リフレッシュ )

#### 1. 問題と目的

平成 21 年 3 月に歩行訓練プログラム「遊歩倶楽部」を立ち上げて 10 年目。

登録数役 85 名、一日数メートル歩くことを目指す方も、数キロを目標に歩いている方もいれば、歩き方がテーマの方もいらっしゃいます。参加目的は登録者一人一人さまざまですが、歩行訓練が在宅生活にどのように役立っているのかチームを作って取組み、「在宅生活サポートデイ」における歩行プログラムの可能性を考えました。

#### 2. 方法（対象と手続）

30 年度の試みとして下記のテーマに沿った訓練により在宅生活が継続できることを成果と仮定しました。

- (1) 施設の大きさを活かした個別歩行訓練
- (2) 作品作りプログラムを通じた利用者様の関わり
- (3) お買い物プログラムを通じた生活リハビリ訓練
- (4) 理学療法士という専門職を通じた個別訓練

★対 象 者：歩行訓練目的別テーマより研究対象者として選定。

★取 組 み の 手 順：目的の設定・訓練実施と記録・成果確認

★取 組 み 時 間 や 期 間：一回約 20～30 分、週 1 回～週 4 回（対象者により異なる）

★取組んだ職員数や構成：訓練は全職員（介護職 11 人、看護師 1 人、理学療法士 2 人）にて実施。効果検証はチームにて実施（チーム員、生活相談員 2、介護職 2、理学療法士 2）

★活動の成果を出すポイントになった点：

・歩行訓練継続の意欲向上施策 ⇒ 遊歩カード ⇒ 定期的な表彰式実施 ⇒ HP 活用

#### 3. 結果（経過）

- ・事例 1：娘の結婚式でヒールを履いて一緒に歩きたい。  
⇒無事結婚式終了。転倒することなく結婚式に参加出来た。
- ・事例 2：生活動作の中での歩行訓練実施。理学療法士との関わり。  
⇒1 人で出来なかったお買い物を継続して出来るようになった。

#### 4. 考察（まとめ、今後の課題）

この取組みにて活用した歩行訓練のテーマは研究対象者においては概ね達成したと考えます。今後は比較的重度のご利用者様にも同じような展開が出来、事業所として在宅生活サポートデイという大きな目標に向かって取組んでいます。

<助言者コメント>

- ・ 老化防止、介護予防に「歩行」は大変重要な関係があります。サルコペニア、フレイル、ロコモティブシンドロームにならない、させないためにも、今後（15、20年…）もこの取り組みを是非続けていただき、多くのデータをまとめ解析され、広く社会に発表してもらえるとより良いと思います。



## その人らしく暮らしていくために私達が地域でできること

社会福祉法人奉優会 等々力の家居宅介護支援事業所  
 ○佐々木 克祥、高良 直子、芥川 裕美子、高橋 敬子  
 ( 地域をともにつくる )

### 1. 目的

ケアマネジャーには、ソーシャルワークの領域で果たすべき役割と高い資質が求められてきている。利用者を介護サービスにつなぐだけでなく、地域の社会資源とどう結ぶか、さらに、さまざまな職種の人々と手を組み、地域に目を向け、社会資源の把握や開発・政策提言を担っていく、それがケアマネジメントではないかと考え地域のケアマネジメント力向上に寄与していくと共に事業所の取組みを通して居宅介護支援の現状や将来について提言する事を目的とした。

### 2. 実践内容

- (1) 地域資源の把握 (一昨年)
- (2) 「居場所づくり」と「料理教室」企画開催、考察を実施 (一昨年)
- (3) 地域課題の抽出
- (4) 個別援助を通し地域援助を展開
- (5) ミクロ・メゾ・マクロの実践確認と検証
- (6) ケアマネジメントの将来像を描く (取り組みから見えてきた試論)

※メデイカ出版：Nursing BUSINESS (ナーシングビジネス) 2017・11月号掲載

※長谷川和夫監修 Dementia Support2017 掲載 (エーザイ)

### 3. 結果

一昨年、利用者や家族からの一言がきっかけで“等々力の家 地域共生プロジェクト”が創設され「等々力の家料理教室」を開催し、「多世代が集って一緒に過ごす場を作っている」ことを体感した。試食後、地域の強みや困りごとについてインタビュー形式にてヒアリングを実施、各テーブルで聞き取りした情報を KJ 法で整理しさらに具現化し情報を整理、等々力・深沢地区における地域住民を 1.消費者、2.生活者、3.まちづくりの担い手としての当事者性という 3つの視点に分類することができた。当事業所含め等々力の家で取り組むべき今後のテーマを抽出し、昨年、地域に向けて、「ミクロ・メゾ・マクロの領域」を意識し積極的に取り組み、取組みを通して、地元人材の育成も含め、支援人材・拠点をネットワーク化する事が重要だと認識しケアマネジメントの将来像を描くことができた。

### 4. 考察と今後の課題

地域づくりの突破口として『わたしの手帳』を活用し、さらに「等々力の家料理教室」開催などを通して、地域住民の主体づくりを目標に、地域の介護事業者や行政機関らのネットワーク化と連絡強化を図り、地域包括ケアシステムの土台づくりを進めていくことが課題である。又、等々力の家や区内にある認知症カフェやサロンが有機的につながっていないと感じている。地域に点在する支援関係者や団体で手を組めば、地域を動かす大きな力になると考え、今後、認知症介護研究・研修東京センター：永田久美子研究部長、日本認知症本人ワーキンググループ、NPO法人地域生活サポートセンターと「本人ミーティング」や「地域連携セミナー」を共同開催する事を検討している。

<助言者コメント>

- ・ケアマネジャーは、介護と医療等の分野をまたぐ人達を取りまとめる大切な調整役です。特にターミナルケアの取り組みについては、地域包括ケアシステムの中でも重要な役割となる部分なので、今後も続けて経過などについて発表していただきたいです。また区内におけるパイオニア的な存在として、活動を続けて欲しいです。



### 3年目の失語症カフェ

#### — 失語症会話パートナーを知っていますか —

社会福祉法人世田谷ボランティア協会

横井 美代子

(在宅復帰 食事)

#### 1. 問題と目的（はじめに）

「失語症」は、脳卒中や脳外傷により脳の言語中枢が傷ついた時に発症する言語障害であり、高次脳機能障害の1つに数えられる。人間のコミュニケーション能力が奪われる重い障害だが、社会での認知度が低く、失語症者の社会復帰を阻んでいる。「失語症会話パートナー」は、失語症者のコミュニケーションを支援するボランティアとして、有志の言語聴覚士が2000年から養成を開始。世田谷区でも区が14年に亘り、140名余の失語症会話パートナーを養成した。また、梅丘ボランティアビューローでは、失語症に対する認知度を高め、失語症会話パートナーの活動の幅を広げることを目的として「失語症カフェ」を企画し、2017年度から2年間で6回開催した。2019年度は5回開催予定で、3回開催したところである。

#### 2. 方法（対象と手続き）

「失語症カフェ」は、世田谷ボランティア協会・梅丘ボランティアビューローの事業として、2017年度に3回、2018年度にも3回開催した。毎回、午後1時半～3時半、梅丘ビューローの集会室にて開催。2018年度は会場の都合で土曜日に開催したことがあった。すると、当事者の中で仕事を持ち、平日は参加できなかったという方がいた。この女性の要望から土曜日の自主グループを立ち上げたところ、同様の女性の参加が増え、さらに会話の場を求める男性も加わり、現在8人で毎月開催するようになった（豆柴の会）。支援する失語症会話パートナーは2人。

#### 3. 結果（経過）

2017年度の失語症カフェ参加人数は76人（第1～3回）。2018年度は48人（第4～6回）。開催に欠かせない失語症会話パートナーの参加が不安定なので、2019年度は定員を8人に絞って、開催回数を5回に増やすこととした。少人数のほうが当事者の方々に対して、きめ細かい配慮ができるというメリットもある。また、昨年、玉川でも失語症会話パートナー有志による失語症カフェが立ち上がり、春と秋の年2回開催を地道に実施している。

#### 4. 考察（まとめと課題）

「失語症カフェ」は、会話の場を求める当事者から徐々に支持を得て、定着してきているように思う。失語症カフェの開催を支えている「失語症会話パートナー」が、日頃、どのような活動をしているか紹介したい。また、ボランティアの「失語症会話パートナー」に対して、いわばプロの「失語症者向け意思疎通支援者」が今春、誕生したことにも触れる。

<助言者コメント>

- ・失語症のなかには高次脳機能障害によるものがあり、言語聴覚士（ST）他、当事者とかかわる医療職との連携も今後の課題となります。皆さんの活動は、地域で当事者同士でのコミュニケーションによる地域リハビリテーションの活動として大変重要です。



## 訪問看護ステーションのリハビリテーションにおける「物」の活用

—手作り自助具から最新機器まで—

社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団  
訪問看護ステーションけやき  
久保田 久仁子

( 訪問リハビリテーション 福祉用具 )

### 1. はじめに

訪問リハビリテーション（以下訪問リハビリ）について一般の方が抱くイメージは筋力強化、歩行練習等を行う事ではないだろうか。しかし実際の訪問リハビリの内容は対象者の自宅での暮らしを考慮し、上記のような機能訓練の他、食事・着替えなどの生活動作練習、福祉用具や住宅改修に関する提案、介護相談、住宅改修の提案、言語聴覚士による言語・嚥下機能の訓練など非常に多岐に渡る。当事業団訪問看護ステーションの理学療法士、作業療法士、言語聴覚士らによるリハビリ連絡会において「福祉用具」をより広い分野で使用される意味で「物」と定義しそれらについて情報交換を行った。最新の機器から手作りの自助具など、各職種が担当する対象者の状態を考慮して提供した「物」に皆の関心が集まった。今回はそれらの事例を紹介することで訪問リハビリが持つ多くの役割を知っていただきたいと考える。

### 2. 訪問リハビリで提供する「物」とは

訪問リハビリでは機能訓練の他に、環境調整の目的で対象者の日常生活動作が安全かつ容易に行うための「福祉用具」を提案、提供することが多い。ここでは「福祉用具」を前述のように「物」と定義した。「物」は対象者の移動をスムーズにするための自宅内の段差解消や手すりの設置などの住宅改修、電動ベッド・ポータブルトイレ・車椅子などの導入、また対象者が日常生活動作を容易に行えるように工夫した持ちやすい箸、靴下を履くための自助具など多種多様である。当事業団で提供した「物」の事例を紹介する。

### 3. 今回紹介する、訪問リハビリで提供している「物」の実際

- ・理学療法士
  - 小回りが利くコンパクトな6輪の車椅子
  - 寝たきりの対象者がテレビを見られるように工夫した機器
- ・作業療法士
  - 握りやすい箸 ○ 靴下を履く道具 ○ 長い耳かき
  - 耳に褥瘡ができない枕 ○ 小児用椅子
- ・言語聴覚士
  - 言語訓練用アプリ。

### 4. まとめ

訪問リハビリでは、一般的に知られている機能訓練以外に、環境への働きかけもその重要な目的である。今回、訪問リハビリで対象者が実生活の場面において安全に安心して生活できることを支援するために種々の機器、自助具の提案・提供をしていることを紹介した。本発表を通じて在宅医療における訪問リハビリが持つ多くの役割について理解を深めていただけることを期待する。

<助言者コメント>

- ・手作り自助具は、大変丁寧に作られていました。

在宅での生活状況、家族の介護度、本人の成長（発育）も含めて、「物」の改良、モニタリングが必要です。単なる福祉用具ではなく、物として定義することで、より本人を含む環境との接点でモニタリングしていく必要があります。



## 入院中の子どもに付き添う母親の食事に関する実態調査

東京医療保健大学

○宮本 愛、田邊 晴、不破 珠美、光原 ゆき

渡辺 千鶴、小西 敏郎、細田 明美

( 子どもの入院 付き添い者の栄養実態 食事支援 )

### 1. 背景と目的

小児における付き添い入院は、子どもの分離不安および親の不安を軽減すること、さらに親子の愛着形成を妨げないことに重要な意味を持つ。しかし、子どもの入院に付き添っている親（多くの場合は母親）は子どもが療養環境にいることに伴う負担を抱えており、睡眠、入浴、休憩、食事などに不便を感じている母親は多くいる。母親への支援を充実させるための看護師による看護援助に関する研究報告は多くあるものの、付き添いの母親の食事の実態に着目した研究はほとんど見られず、管理栄養士が介入した報告は見当たらない。また、これまで研究協力団体（NPO 法人キープ・ママ・スマイリング）はボランティアとして食事支援を実施し、温かい料理を提供し喫食者に喜ばれてはいるが、栄養が管理されたものではない。

そこで、本研究では、入院中の子どもに付き添う母親たちの食事の実態を調査し、その困り事やニーズを明らかにするとともに、管理栄養士としてどのような栄養管理のサポートができるのか、また食事支援においてどのような援助が具体的に必要なのかを考察することを目的とした。

### 2. 方法

2018年7月1日～8月31日にドナルド・マクドナルド・ハウス せたがやハウスを利用した患児の付き添い保護者で協力が得られた81名に対し質問紙によるアンケート調査を行い、単純集計による比較検討をした。（東京医療保健大学「ヒトに関する倫理委員会」の承認を受けて実施した（承認番号教30-4）

### 3. 結果

3食の食事については朝食の欠食率が最も多く、理由としては子どもの付き添いが優先されるといったものが多かった。野菜を食べることを意識している人は約86.4%、野菜の摂取不足を感じている人は約67.9%いた。3食のうちどの時間帯の食事提供があると嬉しいかの問いに対しては夕食が約77.9%と最多であった。

### 4. 考察と今後の課題

ハウス利用家族の患児の年齢は0～3歳が全体の41.3%を占め、手が離せない時間が多いと感じる保護者が多くいるということが推察された。野菜を食べることを意識している人の中にも野菜の摂取不足を感じている人は6割以上おり、野菜を多く取り入れた食事支援のニーズが高まっていると考えられる。また、ハウス利用回数は、全体の77.9%が複数回利用しており、生活リズムや栄養バランスが乱れる機会が1度だけではないため、継続した食事支援の重要性は高いと考えられる。

付き添い食の支援を今後考えていく中で、今回の実態調査を踏まえ、ニーズに合った食事支援を提供できることが重要と考える。希望に添った夕食提供はもちろん、朝食を摂取することの重要性を伝え、短時間で簡易に摂取できるような朝食提供を考えていくことも必要である。支援を長期的に続けていくこと、実態や活動を広め、ボランティア参加団体の増加やミールプログラムの頻度を増やしていくことも大切なのではないかと考える。

<助言者コメント>

- ・研究の着目点に新現性があり、入院中の子どもに付き添う母親の食事については、今後、重要になると思います。病院や医療職と連携することで、母親の食事に関する情報提供等の活動が進めやすくなると思います。



## チーム三茶による在宅版パスを通じた本人主体の協働連携

### —地域包括ケア多職種連携を当事者中心にする実践研究—

チーム三茶

磯崎 寿之

(在宅版連携パス 目標の共有 連携の可視化)

#### 1. 事業の目的とその背景

本チームは支援の現状、利用者がサービスを受けるという依存的な利用から、自らの目標を周囲の支援者も含めて主体的に進めることが求められており、在宅での関わりがお互いに可視化し活用できることを目的に作成した。そのことを踏まえ、地域活動の課題を整理し制度だけで解決するのではなく、地域活動の情報を共有化し、広く利用できる仕組みづくりが必要で、障害のある方の利用が抵抗感なくできるよう住民も含め支援者の意識の変革が求められる。そして、当事者、家族とともにかかわる支援者が主体的な生活を送れる一助となる必要を協議した。

#### 2. 方法（参加者の共有化と実践運用）

在宅にかかわる職種の内容を理解するなどの学習会を行い、本人の状態と周囲の支援者の関わりがどのように変わっていくか、現状の支援状況を踏まえ、支援の内容について経過を追いながら全職種で議論を行った。その上で活用に耐えうる在宅版クリニカルパスの作成を行い、その実践活用に向けた継続機会の場をもって、本来の目的である当事者や家族、支援者の連携を図ること。

当初は、関わりが始まった時からの各職種の支援内容を全部挙げ、学習会での課題を共有する中で、パスの作成を二年以上かけ行う（頸部骨折版と脳卒中版の2パターンを作成）。そして現在はパスの分量や文章のみの分かりにくさを解消すべく、簡易説明イラストやマトリックス的な資料を追加作成し、更なる使用感の集約に取り組む。その上で最終目的である当事者の支援を受けながら主体的に参加するための支援を図る。支える側の家族だけでない支援者全ての協働へ結び付けることを進めていくものとしている。

#### 3. 結果（現在経過）

本来の目的である自立のための支援に向けて、家族への支援を可視化する。これは支援者全てにおいて協働連携することの可視化にもつながる。そして利用開始から概ね1年後の目標を本人とイメージを共有し、進行状況と支援内容を振り返りつつ、当事者の意欲向上と確かなケア実践を行っていくものとする。

パスの正確な書式における難しさを指摘受けながら、より理解しやすい真の実践に向けた協議機会の場作りにも寄与出来得るものにしていく。その作業をもって現在多くの参加利用者への普及にも努めている。

#### 4. 今後の課題と考察

経過のように、出来得る諸条件を再考しながら、職種で使用する言葉の理解を本人にもわかりやすく共通にすることなど意識して作成した。今後は使用中での課題など再検討し、支援の内容が変わっていくとともに本人の意識も変わる一助となることを目指し、追加資料の作成など実践共有していく努力を重ねていくものとしている。

<助言者コメント>

- ・私自身、福祉分野ではなく、途上国の農村開発を専門にしておりますが、同じように当事者を置きざりにして、先進国が技術と金を専門家が描くプロジェクトに投入し、現地住民のニーズと不適合をおこしてきました。そこで、当事者を置きざりにしないよう、当事者が問題・目的・関係者分析をし、住民参加型のプロジェクトを立案、推進していくようになりました。当事者ファーストということは、この在宅パスの考え方に通ずるところだと思います。“当事者”の枠がさらに広がり、このような発想のパスが実用化されることを楽しみにしています。



ポスター発表 助言者



杉原 たまえ

(東京農業大学国際食料情報学部国際農業開発学科教授)



根本 治代

(昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科准教授)



神田 裕子

(東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科准教授)

# 分科会（口頭）発表 第1分科会

【5階3503教室】

進行役・助言者

中原 ひとみ（世田谷区特別養護老人ホーム施設長会）

長岡 光春（世田谷区高齢福祉部長）

	発表者	所属	タイトル
1	国枝 知香 金沢 淳子 佐藤 彩子 塩崎 友美	松原あんしんすこやかセンター	高齢者が地域でいきいきと暮らせるために必要なこと －「ふれあい松原」を通してあんしんすこやかセンターの役割を考える－
2	門脇 泰成 本間 仁志 嶋田 あゆか 並木 理紗	日本大学文理学部社会福祉学科 日大パレット	「椎の木」 －多世代を結び、懐かしのひと時をつくること－
3	原 ひろみ 三木 義一	世田谷区立身体障害者自立体験ホームなかまっち	それぞれの自立を一緒につくる －自立体験ホームなかまっちの20年と今後の展開－
4	市村和行 景山香代 中村幸子 秋森かつ枝 多賀正孝 伊藤潤一 矢野和子 鬼塚正徳	世田谷お出かけサポーターズ	世田谷お出かけサポーターズの活動（中間報告） －買い物困難者の為のバスを走らせる事による住みやすい世田谷の共生社会の実現－
5	永井 富士子 荻野 邦子	訪問看護ステーションけやき	Aちゃんとの10年を振り返って －チームが可能性を広げる－
6	石井琢也 杉本義子 倉橋俊介 渡邊尚美 森川敦子 齊藤きみ子	世田谷ケアマネジャー連絡会 施設ケアマネジャー部会	高齢期の住まいについて考える －自宅、施設、それとも？－
7	中山 倫之 沢田 美佐子 馬場 恵美子	社会福祉協議会 祖師谷地区事務局	祖師谷地区「公社けやきの会」の取り組みについて

**高齢者が地域でいきいきと暮らせるために必要なこと**  
—「ふれあい松原」を通してあんしんすこやかセンターの役割を考える—

松原あんしんすこやかセンター

○国枝 知香、金沢 淳子、佐藤 彩子、塩崎 友美

（つながり続ける）

## 1. 目的

松原あんしんすこやかセンターは、地域住民が住み慣れた地域でいきいきと暮らせるように、様々な支援を行うために世田谷区が設置した身近な相談窓口である。北沢地域にある松原地区を担当している。

松原地区には「ふれあい松原」という高齢者のための地域活動の場があり、私たち職員は出前相談窓口として、地区内4ヶ所にあるすべての「ふれあい松原」に毎回参加している。

地域の貴重な社会資源である「ふれあい松原」を通して、高齢者がいきいきと暮らせるために必要なことについて考察すると共に、松原あんしんすこやかセンターが果たしていききたい役割について述べる。

## 2. 内容

### (1) 松原あんしんすこやかセンターから見た「ふれあい松原」

「ふれあい松原」は、「松原地区ぐるみ支えあう会」の活動として、松原地区4つの町会・自治会すべてで行われている。町会会館、自治会館、ふれあいの家を拠点に毎月1～2回、およそ20年継続している。担い手は民生委員児童委員や町会・自治会役員などによる地域のボランティアで、高齢者が楽しく集える活動であると同時に、見守りなどの役割を担っている。まちづくりセンター、社会福祉協議会、あんしんすこやかセンターは夫々の立場から協力している。

### (2) 「ふれあい松原」を通して「まち」が見える

「ふれあい松原」は様々な地域資源とつながっている → 高齢者を取り巻く「まち」の縮図

### (3) 高齢者がいきいきと暮らせるために必要なキーワード

- 1) 「参加」 ～歩いていかれる身近な所に集える場がある
- 2) 「安心感」 ～気にかけてくれる人がいる
- 3) 「連続性」 ～元気なうちから介護が必要になっても参加できる
- 4) 「つながり・役割・支えあい」 ～ネットワークの一員である
- 5) 「楽しみ・張りあい・自信」 ～自分にもできることがある

### (4) あんしんすこやかセンターの役割

- ・高齢者個人に対して —— 個別相談支援、支援ネットワークづくり
- ・ネットワークに対して —— 高齢者に関する情報の集約、発信
- ・地域課題に対して —— まちづくりセンター、社会福祉協議会等との連携協働、区への提言

## 3. 課題

相談窓口として、「まち」のネットワークに入っていない人とどのように関わりを持つか  
“知らない人” “関心のない人” “参加できない人” …つながり続けるために…

### <質疑応答>

Q：「ふれあい松原」の活動を20年も続けることは、すごいと思いました。その活動を実際に運営しているスタッフやボランティアの方々は、どのような想いで続けられているのか、何を大事にしているか教えてください。

A：活動の中心になっておられるスタッフやボランティアの方々にお話しを伺ったところ、参加していただいている方々が楽しいと思える場であることが一番大事、そして見守りとしての役割もっていることを重視し活動しているとのことでした。独り暮らしの方に気楽に参加してもらえようように声かけをしたり、忘れる方もあると思うので前の日にお電話したり、自由参加にはしているけれど2回お休みしたら心配なのでお電話したり、参加後に次の会のチラシを配布したりしているそうです。

それから、一緒にお食事することも大事にしているそうです。やはり歩いて行けるところに安心できる居場所があることが大事であり、その言葉はとても印象的で、私たちも共感したところです。長く活動を続けていくコツは、民生委員や自治会、社協等の方々と一体となってやっていくことだと思っています。

### <助言者コメント>

- ・高齢者がいきいきと暮らせるために必要なキーワードの中の「楽しみ」という点では、高齢者が集い話すことでもっと広がっていくと思います。
- ・同じ地区で、20年継続できることはとてもすばらしいと思います。是非これからも続けていっていただきたいと思います。



## 「椎の木」

### —多世代を結び、懐かしのひと時をつくること—

日本大学文理学部社会福祉学科 日大パレット

○門脇 泰成、本間 仁志、嶋田 あゆか、並木 理紗

(多世代 季節 懐かしい)

#### 1. 目的

「地域共生のいえ」で活動を行なっている「椎の木」の目的は、特別養護老人ホームの利用者を古民家に招き、季節の行事を通して利用者をはじめ学生やサポーター、施設職員といった参加者全員で日本の四季を感じることである。それと同時に、利用者に昔を思い出していただき、懐かしいひと時を味わっていただくことを目的としている。さらに施設生活において、体験が難しい内容を学生と共に行うことで、その場でしか感じることでできない温かな雰囲気をも多世代で味わうことができている。そして、この実践を通して、利用者のQOLを少しでも高めることができれば良いと思っている。

#### 2. 実践内容

椎の木：月1回（毎月第4木曜日） 時間 14：00～15：00

参加者：特別養護老人ホームの利用者、ホーム職員、日本大学の学生、椎の木サポーター

活動内容：地域の民家に利用者を招待し、午後のひと時を参加者全員で楽しむ活動。「鯉のぼり」や「クリスマス」、「ひな祭り」などといった季節の行事を通して日本の季節を感じる。4月には日本大学での桜散策を行っている。

#### 3. 結果（経過）

- (1) 四季の行事を通して利用者さんの笑顔が多く見られる。また、利用者が昔の思い出話をする場面も多く見られ、利用者と学生間でのコミュニケーションをとることができている。
- (2) 活動で学生と利用者が協同で作成した作品を、ホームにお持ち帰りいただくことによって、他の利用者にも四季を感じていただけている。
- (3) 学生側も利用者との活動を通して、利用者が培ってきた日本の文化について直接教えていただくことができる多世代交流の場となっている。学生自身、日本の文化や植物について多くのことを学べていることから、この活動でしか体験できない貴重な取り組みをさせていただいている。

#### 4. 考察（まとめ、今後の課題）

本来は利用者にアンケートを実施し、活動の質の向上を図っていきたいが、認知症のため具体的な意見を利用者から聞くことが難しいとも言える。そこで、普段から利用者に関わりがあり、専門職であるホームの職員にアンケート調査を行いたいと検討中である。企画の質の維持・向上、活動の継続をしていくために、学生間での話し合いはもちろんのこと、ホーム職員、椎の木サポーター協働で取り組んでいきたい。

<質疑応答>

Q：施設の利用者だけでなく、地域の方にも開かれた活動を是非お願いしたいと思う。

A：今後実現できるかどうかはまだまだわからないが、色々な企画を考えたいと思う。

Q：この活動は、民間の方の家をお借りして行っているのですか。

A：はい、そうです。

Q：日大パレットさんは、日大のサークルなのですか、ゼミですか、またどういふ方々が集まっているのですか。

A：日大の文理学部のボランティアサークルのひとつで、メンバーは社会福祉学科の学生です。

Q：何人所属しているのですか。

A：16人です。

Q：現場の方々と若い学生の交流があることは、大変素晴らしいことだと思う。今回は、上北沢ホームの利用者の方々との交流ですが、それ以外の施設とはあるのですか。

A：「椎の木」として活動は、上北沢ホームの利用者の方々だけですが、夏祭りなどの季節の行事の際は、地域の方々にも参加いただいています。

<助言者コメント>

- ・素晴らしい活動だと思う。若い世代が、多くの地域の方々と交流をもっていただきたいと思う。
- ・このあと卒業し就職されると思いますが、今回のような経験を活かしていってもらいたいと思います。



## それぞれの自立を一緒につくる

## －自立体験ホームなかまっちの20年と今後の展開－

世田谷区立身体障害者自立体験ホーム なかまっち

○原 ひろみ、三木 義一

(かわり目 つなぎ目 むすび目)

## 1. はじめに

平成11年世田谷区立身体障害者自立体験ホームが開所して、丸20年が経過した。世田谷区の独自事業として展開してきた「自立体験室」には、これまで一般利用（期間は1ヶ月～1年）を62名の方が利用し、地域生活に移行している。また、自立体験室の他に、短期入所、緊急利用、日中ショートステイ、相談支援と、その時々ニーズに応えた事業を展開し、地域福祉の拠点としての機能を持つに至っている。このなかまっちにおける自立体験事業の20年間の実績をまとめ、その果たす役割と今後の展開について考察する。

## 2. 調査…様々な「自立」を捉える

自立体験室（一般利用）を1999年から2018年9月まで終了した62名について、入居事由、入居時の状況、利用の目的、利用状況、退所後の生活についてまとめ、とりわけ入居に至った要因と、利用を経て退所後どのような生活に至ったかを分析する。また、自立体験室（短期利用）の実績といくつかのケースを追いながら、自立に向けてどのように支援したかをまとめる。

## 3. 経過…生活がどのように変化したのか

利用に至った要因	割合	退所後の生活	割合
家族の高齢・疾病・死去・就労等により介護困難	40.3%	アパートで一人暮らし	45.2%
自立への意欲・体験	19.4%	自宅で一人暮らし	4.8%
本人の病気発症・進行により生活困難	12.9%	家庭内自立（ヘルパーと生活）	30.6%
家族からの虐待・関係悪化	11.3%	グループホーム入居	8.1%
長期入院からの退院促進	9.7%	施設入所	6.5%
住宅改修、改築	6.4%	入院	4.8%

※個別事例については発表で報告

## 4. 考察…見えてきたこと、目指すもの

利用事由はそれぞれ様々であるが、家族や本人の状況の変化の中で介護困難や生活困難によるものが全体の7割以上を占めている。そうした方々も、退所後は全体の5割がアパートや自宅で一人暮らしに移行、家庭にヘルパーを入れ家族との生活を継続している方も3割に及んでいる。また、自立体験には短期利用もあり、短期利用を積み重ねながら自立の意欲を高め、一般利用に繋げたケースもある。それぞれの「自立」は多彩であり、その体験プログラムも多様である。予め準備されたプログラムがある訳ではなく、それぞれの生活体験（自分で困る・考える・決める、人とかかわる、失敗と成功等々）を繰り返す中で、生活する力がつき、退所後の生活をイメージできるようになる。こうした体験機能こそ、「自立」には欠かせないものであり、今後の事業展開に生かしていきたい。

### <質疑応答>

Q：区の保健センターで障害を担当させてもらっています。このような自立に向けての施設が、地域にあることが重要と考えますが、どのように考えられますか。

A：本人が地域の中で「体験すること」がとても大切だと思います。例えば、自立生活をするために、できないところをヘルパーに手伝ってもらっても、ヘルパーとの付き合い方がわからず頼めないこともあります。最終的には本人が生活を作っていくことが目標ですが、生活を体験しながら、一緒に悩んで、一緒に考えて、そして本人が決めるという体験ができる施設が地域にあることが重要と考えます。

### <助言者コメント>

- ・事業活動の統計もとられていて、わかりやすく報告されていて良かったです。
- ・利用状況のなかで、1999年から2008年は50～60代の方が圧倒的に多く、2014年から2018年は60代がいなくて40代から50代の方が多い。2000年に介護保険が始まり利用が重なっているのかと思いますが、その理由が分かるといいなあと思いました。統計をきちんととられていて、これをもとに何か次のことが考えられたいいなあと思いました。とても有意義な発表だったと思います。



## 世田谷おでかけサポーターズの活動（中間報告）

－買い物困難者の為のバスを走らせる事による住みやすい世田谷の共生社会の実現－

世田谷お出かけサポーターズ

○市村 和行、景山 香代、秋森 かつ枝、中村 幸子  
多賀 正孝、伊藤 潤一、矢野 和子、鬼塚 正徳

（無理ないボランティア活動 共生社会）

### 1. 目的

一人で買い物が困難な方に自分でお店に行って商品を見て、触って、確かめて戴く事で買い物の楽しさを提供し閉じこもり防止、健康寿命延伸と福祉施設、店、社協、区役所、町会、自治会、ボランティア、区民の共生による住みやすい社会の実現を目指す。

### 2. 計画

一番重要な事は地域で買い物困難者の為の対策にバス運行を中心にしている地域のベンチマーク調査をする事によって、その実施継続の要因を調査して、分析診断し、進捗をメンバーで共有して、自分たちの活動の方向性を都度確認して行く計画を立てることである。

- (1) 川崎区宮前区での買い物困難者の為のバス運行の開始理由と過去、現在、将来について説明を受け、現場を知る。（喜多見、野毛、菊名地区の事例と現場を知る）
- (2) 毎月1回のプロジェクト会議の実施（一か月の活動内容報連相と方向性共有）

### 3. 途中経過

- (1) 7月24日 川崎市宮前区社会福祉協議会の買い物支援サービスの成立ちから現状 将来課題問題についてバス運行協力の福祉施設セイワ鷲ヶ峰を訪問して説明を受け運行にも同乗して現場を知る、わかる。（ベンチマーク、詳細資料有）
- (2) 8月14日喜多見買い物バス現場体験、5月8日野毛買い物バス現場体験
- (3) 5月18日、6月8日、29日、7月13日、8月10日、24日  
9月7日、10月19日（プロジェクト会議実施）
- (4) 9月6日 世田谷区としての外出困難者対策の確認（世田谷区交通政策課訪問）
- (5) 9月13日、10月17日 野毛地区お出かけサポート事業検討会（社協主催）へ参画

### 4. 今後の課題

川崎市宮前区、喜多見地区、野毛地区、菊名地区以外の買い物困難者バス運行の現状を把握する事で様々な課題問題を解決できる手が打てる可能性が高い事がわかってきた。今後 野毛のお出かけサポート事業をファンドも活用しながら協力していきたいがサポーターズとしての実行委員会の立上げの可能性も検討する必要がある。

<質疑応答>

Q：サポーターズの費用は。

A：手弁当です。

<助言者コメント>

- ・私、喜多見地区に住んでいます。商店街を歩くと、要支援と思われる高齢者がやっとなで歩いている感じで、砧や祖師谷地域でも買い物困難者をどうやって地域でサポートしていくかが、あんしんすこやかセンターの課題でもあったと思います。
- ・また地域に戻って、次に繋げられたらいいなと思います。昨年も発表されて、さらに今年発展させ、しかもみなさん手弁当で行っておられる、是非これからもよろしく願いいたします。



## Aちゃんとの10年間を振り返って

－チームが可能性を広げる－

世田谷区社会福祉事業団 訪問看護ステーションけやき

○永井 富士子、荻野 邦子

( チーム 発達の可能性 )

## 1. はじめに

Aちゃんは13トリソミーという染色体の異常をもって生まれた女の子です。生後2か月の時に心肺停止となり一命はとりとめましたが脳死に近い状態と診断され人工呼吸器管理となりました。Aちゃんが生まれた平成19年は人工呼吸器を装着した小児の在宅療養はまだ少なく、私たち看護師としても不安な中で在宅訪問をスタートしました。生後11か月で退院してから11歳3か月までの約10年間の訪問でたくさんのことを学びました。Aちゃんやそのご家族、他機関との連携から学んだこと感じたこと、それらの経験を地域で支える多くの人と情報共有していきたいと思い、発表させていただきます。

## 2. 実践内容

- (1) 経験のない重症児の訪問で大切にしたこと
- (2) 体調管理やケア方法で工夫したこと
- (3) 成長発達の可能性を信じた関わり
- (4) 家族を支えること
- (5) チームで関わること

## 3. 私たちが学んだこと

- (1) 知りたいと思う姿勢がご家族との信頼を深めるきっかけになる
- (2) ご家族や他機関と情報共有し体調管理やケア方法を工夫する
- (3) いろいろな分野の多くの人に関わることで可能性が広がり成長発達につながる
- (4) 24時間医療的な管理を家族が担う在宅療養において、なんでも相談できたり、安心してケアを任せられたり、成長発達と一緒に喜び合える存在である
- (5) 成長に伴いチームメンバーは着実に増え、年1回ではあるが課題を共有できたことは、Aちゃんやご家族、サービス提供者にとっても安心、安全につながる

## 4. 考察と今後の課題

成長発達の可能性を信じ、表現を的確にキャッチしようと観察のアンテナを張ることで、わずかな口や舌、手足の動きや表情で感情を表現していることに気づくことができました。Aちゃんの五感を刺激することで更なる感情の表現につながるのではないかとチームメンバーが認識、実感したことが、支援する側の喜びになり、私たちの可能性も広がりました。この経験を伝えることで、重症心身障害児を支援する訪問看護師やヘルパーさん、ボランティアさんが増えたらいいなと思います。また頑張っているご家族の休養を目的とした在宅レスパイト訪問のような支援も充実していくことを願っています。

<助言者コメント>

- ・平成 19 年度、人工呼吸器を装着して在宅療養されるお子さんはまだまだ少なかったとのことですが、その後の 10 年間の振り返る発表でした。なかなか現場の話聞く機会はないのですが、Aちゃんとの 10 年間の振り返りのお話を、映像を交えながらとても具体的に聞くことができ、たいへん貴重な時間でした。看護師のみなさま方が、丁寧にAちゃんのサインをよみとって、丁寧にケアを行なうことによって、チームでケアする可能性が広がっていったのだと感じました。是非この経験されたことを、今後に活かして行って欲しいと思います。

<発表者から>

- ・実は本日、Aちゃんのママがこの発表を聞きに来てくださっているのでご紹介いたします。

<Aちゃんのママから>

- ・訪問看護ステーションけやきの看護師の方々には、NICU を退院した後から 10 年以上にわたってずっと見ていただきました。今日話を聞きながら、これまでのことを思い出してもうれしく、どれだけ娘が豊かな時間を過ごすことができたのか振り返ることができました。とてもとても家族だけでは、こんなことは達成することはできませんでした。看護師のみなさんは、娘の可能性を信じ、とても高い職業意識というのでしょうか、仕事としての向き合い方もプロフェッショナルのうえに、何よりも娘に対して愛情をもって接してくださったのが親として大変ありがたく、私を母親にしてくださいと感じております。どんな言葉でも語りつくせないくらいの、感謝の気持ちをもちまして、またこの話を聞いてくださった方が何かを感じて、次の仕事につないでいただければ、娘もまだまだ生き続けると思っております。



## 高齢期の住まいについて考える

### －自宅、施設、それとも？－

世田谷ケアマネジャー連絡会施設ケアマネジャー部会

○石井 琢也、倉橋 俊介、斉藤 きみ子

杉本 義子、渡邊 尚美、森川 敦子

( 高齢者施設 施設ケアマネジャー 自分らしく )

## 1. はじめに

少子高齢社会の進展とともに高齢者施設の需要も高まり、世田谷区では施設の種類と量の両面からの充実が進んでいる。一方、区民からは「施設の種類と量が多く、どのように選んだらよいかわからない」などの声が聞こえてくる。

私たち区内高齢者施設に勤める施設ケアマネジャー有志による「施設ケアマネジャー部会」では、これら区民の疑問や不安に直接応える機会として、「せたがやの高齢者施設お役立ちガイド」の作成や、地域の協力を得ながら自主グループ等に出向き、「出前講座」や「個別相談」などを行っている。

発表では、これら講座等の参加者に実施したアンケートの集計結果を報告する。また、高齢期の住まいとして高齢者施設はどのような活用が求められるか、施設ケアマネジャーの立場から考察する。

## 2. 内容

### (1) アンケート結果の報告

平成30年度から令和元年8月までに実施した「出前講座」及び「個別相談」の際に行った参加者アンケートについて、特に次の3つに絞って報告する。

- 1) 高齢者施設に関する認知度
- 2) 高齢者施設について、区民が知りたいこと、関心のあること
- 3) 自分や家族の高齢期の住まいに対するイメージ

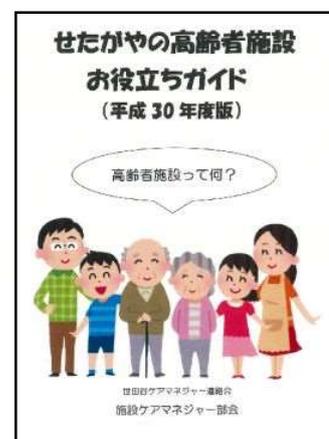
### (2) 考察

- 1) 区民の高齢者施設へのニーズについて
- 2) 求められる高齢者施設の活用について

## 3. 課題と目標

高齢者施設への区民ニーズに対して施設ケアマネジャーができること

- 1) 出前講座等による施設に関する情報提供
- 2) きめ細かく丁寧な個別相談支援
- 3) 「自宅」か「施設」かの二者択一以外の、個々のニーズに合わせた高齢者施設活用策の検討



### 「世田谷ケアマネジャー連絡会 施設ケアマネジャー部会」について

世田谷区内ケアマネジャーの職能団体である「世田谷ケアマネジャー連絡会」の部会の一つです。2011年夏から月1回、区内の高齢者施設で働く施設ケアマネジャーが集まり、勉強会や情報交換、出前講座や区行事への参加などに、楽しみながら取り組んでいます。

## <質疑応答>

Q：私は現在、障害者の方の支援を行っております。考察の2)の求められる高齢者施設の活用について質問します。自宅か施設かというところで、施設の専門ケアが必要なときを見逃さずに、再々施設を利用し、自宅での暮らしを続けられる選択肢の提案とありますが、具体的にはどのような提案があるのでしょうか。

A：私は、グループホームの管理者をしております。ショートステイという使い方があげられます。具体的には、高齢のご夫婦で生活されていて、介護されている方がお疲れになって、少し介護から離れたいという時に、認知症専門のケアが提供できるグループホームのショートステイを提案させていただいています。入所ではなく短期間の滞在という形で（1週間でも2週間でも3週間でも）ご利用いただいて、介護する方が元気になって介護できるようになったら、また在宅に戻ってもらって継続していただくという例があります。

Q：ショートステイは、緊急でも使えますか。

A：ショートステイには定員があるので、当然満室であれば利用できませんが、空いていれば利用はできます。また認知症の対応型ですので、認知症の診断があれば、一応受け入れることはできます。ただし現実的な問題として言えば、今から2時間後に利用したいと言っても、ケアスタッフに全く情報がおいてないので受け入れることができませんが、そのあたりがクリアできれば、最短で翌日でしたら、実際に受け入れたことがあります。

## <助言者コメント>

- ・私は、特別養護老人ホームの施設長をしております。特別養護老人ホームでも、区と契約して、緊急のショートステイも受け入れる施設となっております。介護されているご家族が急変したり等で緊急の依頼があり、当然ですがベッドが空いていれば、区の高齢福祉課等から連絡がきて、対応がスムーズにできるようになっております。その点は、安心かなと思います。たまに、行方不明の認知症の方が夜間徘徊していて警察で預かっていて行き先がなく、区の方から緊急に受け入れて欲しいと連絡が入るといことも、年何回か実際にございます。
- ・この発表は、自宅、施設、それとも・・・ということで、高齢期の住まいについてよくまとまったださっていると思います。アンケートで統計をとったり、「せたがやの高齢者施設お役立ちガイド」という冊子を作ったださっていますが、施設のことについて一番知りたい内容をまとめてくださっていると思います。希望・条件整理シート、入所のための資金計画が書かれていて、費用は施設ごとにかかなり違いますのでその費用の目安も書かれてあって、とてもよくできていると思います。



**祖師谷地区「公社けやきの会」の取り組みについて**

社会福祉協議会 祖師谷地区事務局

○中山 倫之、沢田 美佐子、馬場 恵美子

( 地域で取組む 孤立防止 生活支援 )

**1. はじめに**

祖師谷地区は、小田急線祖師ヶ谷大蔵駅北側に位置し、12の町会・自治会と東西南北約2kmにわたるウルトラマン商店街から構成されている。区内でも高齢化率が非常に高く、特に地区のおよそ中心に位置する祖師谷2丁目の公社祖師谷住宅は、昭和30年代からあるエレベーターのない約1千戸の集合住宅で、子どもが独立したあとの高齢住民が多く居住し、高齢化率が非常に高い。そのため、高齢住民が孤立しやすく、自治会やサロンなどの互助的機能が低下しており、高齢に伴う身体機能の低下や認知症から生じる生活課題が孤立によりさらに深刻化されやすい状況となり問題となっている。

**2. 取り組み**

平成29年度、同住宅の高齢者の相談を多く受ける祖師谷あんしんすこやかセンターやまちづくりセンター、社協による三者連携会議主催により、同住宅自治会と在宅総合ケアセンター成城の理学療法士など専門職の協力を得て、「運動サロン」を試行実施した。

平成30年度、「公社祖師谷住宅における高齢者の生活課題と支えあい、について考える会（公社けやきの会）」として改組し、運動サロンの再開や「公社祖師谷住宅における高齢者の生活課題を把握するサンプル調査」を実施した。調査結果からは「孤独・孤立を和らげる」「外出や買い物を支援する」「孤立ならないための体力維持(体操)」の三つの取り組み方針が絞り込まれた。その結果運動サロンは、在宅総合ケアセンター成城の理学療法士による指導のもと、11月から3月まで再開し、次年度からはふれあい・いきいきサロンとして自主化を目指し、高齢者の孤立につながらないように、暮らしに関する専門職を招き身近な相談会を併設した。エレベーターがないことによる買い物の不自由については、買い物ツアーや商店街の出張宅配などをまとめた買物支援マップの作成を目指した。

**3. 現在**

令和元年度に入り、(株)JA東京中央セレモニーセンターより社会貢献として協力をいただき買物ツアーを不定期に3回実施し、12月に4回目実施を準備し、買物支援マップは祖師谷地区の2商店街振興組合の協力を得てアンケートを実施し現在集計している。また「公社けやきの会」を定期的に関催し、運動サロンの支え手の募集や住民の理解とボランティアの勧誘を目指し活動報告会を行なった。

**4. 今後**

「公社けやきの会」での検討が深まることで、現在買物支援については、商店街のお休み処を活用して買物付添い(荷物持ち)ボランティアの詰所設立に向け準備をすすめている。また、ゴミだしに困っている住民が多いという見立てに沿い、あんしんすこやかセンターの協力によりゴミ出しに困る高齢者の実態とニーズ調査を行なう予定である。しかし、同住宅内での住民による参画が少ないため、今後はより多くの住宅住民を募り当事者住民による一層の主体的活動を目指している。

### <質疑応答>

Q：祖師谷の商店街をよく歩いていた区民です。たしかに長く同じところで住まわれることで、人間関係等がこう着してしまうとか、高齢化が進んでいってしまっているというのは、これは大変な問題だと思いました。同時にお子さんがいたことで、子はかすがいいとありますがつながっていた時期も確かにあったと思います。子どもがいなくなってしまった今、逆に地域の幼稚園のみなさんや小学校のお子さん呼び込むことで、新しいつながりをつくったりはできないのかと思いました。そういう取り組みはされているのでしょうか。

A：公社祖師谷住宅だけでなく、大蔵や希望丘や喜多見住宅という大きな団地でも、それぞれに保育園があって、保育園の先生とも何かの機会に園児が顔を出せたらいいねと話し合いがすすんでおりまして、月2回の体操の企画の中で参加してもらえたらと思っています。ゆっくりゆっくりではありますが、何か刺激になればいいなと思っていますところですよ。

### <助言者コメント>

・祖師谷あんしんすこやかセンターを運営している法人のものです。祖師谷住宅では高齢化率60%を超えていて、毎日だれかが祖師谷住宅の方に行かなければならない状況が続いております。3年後位に建て替えの予定がありますが、住んでいる人たちも引越し等でコミュニティが壊れてしまうような不安をもっておられる方もあると思います。あんしんすこやかセンターやまちづくりセンター、社協とともに協力しあって取り組んでいきたいと思っています。先ほどの松原あんしんすこやかセンターの発表にもあったような、会食のサービスも以前はあったのですが、建物が古くてエレベーターもなく、来たくてもなかなか来られない状況にあります。もし、また復活すれば地域住民の交流が増えるのではないかと、社会貢献も含めて考えていかなければならないかなと思いました。成城や祖師谷の地域には他の法人もございますので、その方々とより連携をもって、地域住民が安心して暮らせるようにしていかなければならないと、この発表を聞いて思いました。



## 口頭発表 第1分科会 進行役・助言者



中原 ひとみ  
(世田谷区特別養護老人ホーム施設長会)



長岡 光春  
(世田谷区高齢福祉部長)

# 分科会（口頭）発表 第2分科会

【5階3504教室】

進行役・助言者

園田 巖（東京都市大学人間科学部児童学科准教授）

森田 規子（世田谷区教育委員会事務局教育相談専門指導員）

	発表者	所属	タイトル
1	田中 宏明 今井 菜緒 燕昇司 利胡 長村 藍子	東京都市大学人間科学部児童学科	現代の保護者の子どもとの関わりについて ースマートフォンを活用した育児からの考察ー
2	雨宮 絵理 榎本 文香 川上 美鈴	東京都市大学人間科学部児童学科	子どもが道具を自由に使えるために ープレーパークの役割ー
3	山根 亜希	子ども・若者応援団	「親カフェ」という居場所 ー子どもの不登校や生きづらさで悩む保護者との出会いと安らぎの場ー
4	松岡 ゆう子 河北 香織	世田谷区社会福祉協議会 子育てサロン おきらくごきらく 広場	人と情報につながる、妊婦さんへの機会づくり ー子育てサロンに参加するお母さんの声から 生まれた、妊婦さんの集える場ー
5	佐藤 真由美 伊藤 真理子 坂田 朗	鎌田のびやか園	『子どもの心を育てるインクルーシブ保育2』
6	内田 朝代	若者の自立支援すみれブーケ	児童養護施設・里親を巣立った若者の再出発と 自立を支える場としてのシェアハウス運営 ー安心して住むことの出来る居場所の必要性ー
7	梅田 弥子	烏山総合支所保健福祉センター 子ども家庭支援課 子ども家庭支 援センター	母子実践プロジェクト ー母子生活支援施設での実践を通してー

**現代の保護者の子どもとの関わりについて****－スマートフォンを活用した育児からの考察－**

東京都市大学人間科学部児童学科

○田中 宏明、今井 菜緒、燕昇司 利胡、長村 藍子

(スマートフォン 育児 学生視点)

**1. 背景と目的**

大学が運営している子育て支援センター内で実習を行った時に、保護者の方から、あやす時などにスマートフォンを活用することが多いということを知る機会があった。特に、子どもと出かける時の電車や車での移動時に使用することが多いのであるが、その一方でスマートフォンを育児に利用することに関しては抵抗があるという。さらに、保護者からは、スマホ以外の子どもをあやす方法について質問されるということがあった。

以上の事例から、私たちは保育士を志す学生という立場から、“現代の育児とスマートフォンについて”というテーマで、現在の子育てについての悩み等を調査するとともにスマホの代替案について考え、提案する。

また、スマホと育児に関する現状を知ることにより、育児に関する悩みを理解し、子育て支援に関する専門性を高めていきたい。

**2. 方法・分析**

子育て支援センター等、子育て支援を専門的に実施している事業所を利用している保護者を対象にアンケートを実施し、現代の母親の悩みや対処法をまとめ、量的および質的分析を行う。

**3. 考察**

スマートフォンの育児への活用が、子どもの発達に何らかの影響を及ぼすのではないかという情報が社会の様々な場面で取り交わされている。その影響により、スマートフォンを育児に活用することに何らかの抵抗を感じる保護者の数は多いのではないかと印象があるが、その一方で実際に活用している保護者が一定数いることも事実である。抵抗を感じながらも使用するといった矛盾した意識をもつ理由としては、子育てに対して何らかの負担感を強く感じているなどの理由が考えられる。

以上のことから、アンケートの結果をもとに現代の保護者のニーズを把握するとともに、スマートフォンに替わる有益な育児方法やスマートフォンを有効に使うための考え方についての具体的な提案を行いながら考察を進める。

### <意見・感想>

- ・区内施設の医療ソーシャルワーカーで、児童虐待防止委員会にも属しています。育児の時にスマホの情報に依存的な母親が多く、子どもが泣いているのにずっとスマホをいじっている。病院側から考えるとネグレクトとまではいかないが、子ども家庭支援センターに報告して、保健師の初期訪問をお願いすることがあります。ですので、今回の学生の発表を興味深く聞かせていただきました。是非今後もこのような発表を続けていただき、次はさらに視野を広げ「何を目的に母親達がスマホをつかっているのか」など考察していただきたいと思います。専門的な相談をする機関が少ないと同時に、最近自分自身の母親にも相談できない人が増えてきている状況にありますので、そういうことも踏まえながら、今後もアンケートをとりながら、分析し考察してもらえたらいいと思いました。いい発表でした。これからも頑張ってください。
- ・親と子がそれぞれスマホを眺めているという光景が、街中にあちらこちらに見られるようになって、私としてもハラハラするところがあります。しかし、スマホの何が子育てにだめなのか具体的なエビデンスが難しい。ただエビデンスがなくとも、例えば山の中の電波がないところや電波が悪いところで、子どもがぐずったときに、一般の保護者がどう子どもと接するかと提案し、考える余地はあると考えます。来年も続けていただき、是非発表を聞きたいと思っております。

### <助言者コメント>

- ・私は臨床心理の方で、発達障害など教育療育でいろいろ関わっていますが、特に目について、視力はあるのですが目を上手く使えていないお子さんが非常に増えています。その原因が、発達障害なのか、目の問題なのか、他に何かあるのか、教育現場はとても苦戦しています。スマホの使い過ぎも影響しているのではないかと思います。やはりエビデンスがないのでそこまでは言えないのです。しかし、目の使い方が上手いかわからない方が増えているのは事実です。ですので、今回のように丁寧にアンケートをとり、色んな意見が集まってくることは、大変貴重な発表だと思います。



## 子どもが道具を自由に使えるために

### - プレーパークの役割 -

東京都市大学 人間科学部 児童学科

○雨宮 絵理、榎本 文香、川上 美鈴

(道具 遊び 経験)

#### 1. 研究の動機

研究室の活動で、青少年野外活動センターでピザ作りをする機会があった。その中でメタルマッチを使って火をつけたりナイフで薪を細く割ったりと普段しない経験をした。後日、自分達ですらナイフなどを使う機会が少ない中で、今の子どもたちはもっと道具を使う機会が少ないのではないかという話になった。実際に、自然教室を運営している知人から”最近の子どもは道具を使う経験を余りしていない”という話を聞き、もっと子どもたちの現状を把握したいと考えたのがこの研究の動機である。

#### 2. 目的

文明が発展し、便利な機器が飽和状態にある現代において、様々な道具を使う機会が特に若年層を中心に減少しているように思われる。道具は便利な機器に比べて手間がかかるだけでなく、コツ（使いこなすために一定の技術）を要するものやさらに危険を伴うものもある。しかし一方で、道具は誰でも簡単に取り扱える安易な機器にはない貴重な経験を私たちに与えてくれる。この研究の目的は、保育者を目指す立場として、子どもたちが、自由かつ安全に道具を使用しながら、様々な経験を積むことができる環境をどのように用意するべきかについて明らかにすることである。

#### 3. 方法

子どもたちが自由に道具も使って遊べる場として設置されている、「駒沢はらっぱプレーパーク」を訪問し、現地の様子を詳細に観察するとともに、そこで活動するプレーワーカー(プレーリーダー)にインタビュー調査を実施する。なお、インタビューの調査項目は以下のとおり。

(1) プレーワーカーの業務内容

(2) プレーワーカーとして意識していること

1) 安全面

2) 子どもが楽しむために

3) 子どもの成長のために(身体面)

4) 子どもの成長のために(精神面)

5) 保護者との関わり

6) プレーワーカー同士の連携

7) 他機関との連携

8) 地域との関わり

(3) 体験事例

1) 困ったこと

2) 良かったこと

(4) プレーワーカーとして伝えたいこと

1) 子どもたちへ

2) 保護者へ

3) 地域へ

#### 4. 考察

保育に関わる立場として、子どもたちが自由に道具を使って遊ぶための方法や環境整備について理解を深める。具体的には、調査項目にある、「安全面」や「子どもに対する関わり方」、「保護者との関わり方」、「連携の取り方」、「地域との関わり」などの調査結果から、多角的に考察していく。

### <質疑応答>

Q：火起こしなどの感想をお願いします。

A：ナイフで木を切るのは初めてで、危ないし使えるか不安でしたが、実際やってみたら簡単でやりやすかったです。子どもたちはやらされている感覚ではなく、どうしたらいいのか主体的に疑問をもち、積極性がみられました。仲間と相談、協力して火がつけられたので、達成感を得られたと思います。

### <意見・感想>

・大人が純粹に遊びの楽しみを忘れていていると思います。保護者が、子どもの遊びの環境を嘆いていないことを痛感します。子どもが道具を使いこなすことで、親にもいい影響があることを知ってもらい、子どもだけに注目するのではなく、親も含め考えることで、相互の良い関係が築くことができると思いました。是非、今後も研究を続けてください。

### <助言者コメント>

・火でお風呂を沸かすとか、部屋をほうきで掃くとか、道具を使うとどうやったらうまく出来るかを考える力がつくと思います。人の進化を考えると、道具が便利になるまでの過程を知る必要があると思いました。とても興味深く聞かせていただきました。



## 「親カフェ」という居場所

－子どもの不登校や生きづらさで悩む保護者との出会いと安らぎの場－

一般社団法人子ども・若者応援団

山根 亜希

（葛藤の共有 「ちょうど」を模索 地域を繋ぐネットワーク）

### 1. 親カフェを運営する寺子屋について

2016年4月に発足した「寺子屋みらい in 善宗寺」(以下、寺子屋みらい)では、週に一回、玉川地域の小学生から高校生までを対象に、高校卒業を視野に入れた学習支援の場所を提供してきた。寺子屋みらいでは、ソーシャルワーカーや元教員経験者のスタッフが常駐し、16人程度の生徒が集うなか、子どものレベルに合った学習をカスタマイズして支援している。

子どものなかには、過去に不登校や引きこもり、集団への不適応などを経験したケースもあり、自己肯定感や他者への信頼感に自信を得にくい時期も経てきた。寺子屋みらいの居場所は、子どもを真ん中にした「ちょうど」を模索し、同世代と異世代がゆるく繋がれる心地よいコミュニティーを目指している。

### 2. 親カフェの活動内容

一方で、寺子屋みらいでは2017年4月から、月一回、保護者を対象にした「親カフェ」をスタートしてきた。同カフェでは、コーヒーやお茶菓子を楽しむリラックスした空間のなかで、子育てをめぐる幅広い悩みや不安、葛藤に寄り沿う居場所を提供している。

私事で恐縮だが、私自身は寺子屋のスタッフであると同時に、小学生の男児を育てる一児の母でもある。親カフェでは、スタッフである私自身も、当事者として子育ての悩みを吐露し、参加した先輩ママから色々なアドバイスをもらうことで、孤独に陥らずに支えられてきた実感がある。

主催者にはソーシャルワーカーや元教員関係者も出席するため、「福祉と教育」の両面から実践的な情報が得られる環境にある。保護者同士が互いの悩みやヒントを共有することで、リフレッシュしたり、子育ての自信を回復できる安らぎの居場所として機能している。また、親カフェでは、保護者に向けたアンケートも実施した。親自身の「ちょうど」にもマッチしたイベントの開催（親バー：親カフェの後にお酒と食事を楽しむ懇親会）にも繋げている。

### 3. 今後の課題

日々の子育てに試行錯誤している保護者にとって、親カフェがもたらす横の繋がりや居場所としての意義は大きい。とはいえ、現状、親カフェの認知度は限定的なものがあり、地域に十分に浸透されているとは言えない。

今後は、本当にサポートを必要としている地域の保護者に向けて、活動の存在を普及させるための広報活動が求められる。具体的には、ホームページの拡充や区役所などの関係機関にチラシを配布し協力して頂けるように努めていきたい。

### <質疑応答>

Q：親子関係にはどのような支援をしていますか。

A：親カフェの様子を見てみると、最初親は不登校に対して「なんで学校に行かないのか」と責める気持ちになっていたのが、ソーシャルワーカーや、サポートしてくれる人たちの話を聞くうちに、だんだん「ああ、そういうこともあるか」と肩の荷がおりていくような、風穴があいていくような感じになって、親子ともに表情も変わっていきます。親も自身を客観的にみられるようになると感じます。私たちはボランティアなので、専門的なことはソーシャルワーカーにお願いします。お子さんを一緒に支援しましょうと、塾長自らがアウトリーチ（家庭訪問）して、親子間での話を聞いて、つながっていくこともしております。それが、地域の他の活動にもつながっていったらいいと思います。

Q：親カフェを行ったことで、親同士の関係はどうなっていますか、具体的に教えてください。

A：親カフェだけでなく、親バーもあるので、「親同士で一杯やりながら、ちょっとリラックスしましょうよ」と時にはアルコールの力も借りることもあります。毎月1回、悩みを聞きながら回を重ねることで、息づまっていたお母さんが、吹っ切れたなあ、光がみえてきているかなあ、よくなっているとお互いの変化を感じることがあります。毎月会う、このメンバー同士で頑張りましょうという気持ちになります。

### <助言者コメント>

- ・印象に残った言葉に、「居場所作り」があります。孤立していることが、悪化につながる場合があります。居場所があり、情報交換できることで、ケアサポートできる関係が築けているのではないのでしょうか。親のエンパワメントにもつながっていると思います。不登校対応は、どこのソーシャルワーカーも大変であると思いますので解決していけるよう、これからも活動を続けていって欲しいと思います。



## 人と情報につながる、妊婦さんへの機会づくり

－子育てサロンに参加するお母さんの声から生まれた、妊婦さんの集える場－

世田谷区社会福祉協議会 子育てサロン おきらくごきらく広場

○松岡 ゆう子、河北 香織

(妊婦 子育て支援 母子保健)

## 1. はじめに 子育てサロン「おきらくごきらく広場」について

「おきらくごきらく広場」は2016年6月に太子堂2丁目で立ち上がった。

当時、太子堂周辺には‘徒歩圏内で、子連れで、大きな道を越えないで、予約は不要で、上の子ども連れて行かれる場所で、おしゃべりが自由にできて、地域の人と会える場所’は限られていた。

ないのであれば、そんな場所を自分達で作りたい’という思いを共有していた、数人の育児中ママ達によって立ち上がり、その後、地域のボランティアの協力なども得ながら、活動を継続し現在4年目に至っている。

## 2. 「おきらくごきらく広場」の活動内容

(1) 日 時：毎月第2・第4金曜日 午前中（その他、不定期開催）

(2) 会 場：三軒茶屋区民集会所（太子堂2丁目）

(3) 対象者：子育て中の親子、妊婦さん、その他子育てに関心のある方

(4) 内 容：お茶とおしゃべり・ミニイベント

※当初は、おしゃべり・情報交換の場として開催していたが、約半年間、参加者は少なかった。

その後、ミニイベントをとり入れながら、徐々に参加者が増え、現在は回により20～50名程度。

## 3. 「ゆっくり広場」の立ち上げ

サロンに参加される方から「もっと早くからこのような場所を知りたかった」「産後は子育てで余裕もなく、このような場に参加する勇気がでない」という声を聞くことも多く、産後、情報と人に繋がるには妊婦の時から足を運び、スタッフに会う、場の雰囲気を知る、ということが大切ではないかと考え、関係機関と協議の場を持った。

世田谷区でも妊娠期から産後まで切れ目のない支援として「ネウボラ」に取り組む中、子育て中の当事者の立場から、‘妊婦さんが人と情報につながる機会づくりの場’として、2019年10月より「ゆっくり広場」を開催することとなった。以降、毎月1回（主に金曜日）開催予定。

## 4. 今後に向けて

初めての方に気軽に足を運んでもらえるよう定期開催とし、できるだけ多くの妊婦の方に人や情報に繋がってもらえるよう地域への呼びかけを継続していきたい。

また参加者の声を聞きながら、よりよい支援に向けて、活動・プログラムの充実を図っていききたい。

### <質疑応答>

Q：男性は来ないのですか。

A：子育てサロンが子育て中の母親やプレママの方同士の交流・情報交換の場ということもあり、数は少ないですが、男性も時折参加されています。平日に夫婦で来る人や、土日のピクニックなどのイベントの際に親子で来られます。平日に来られないことが課題だと思っています。

Q：良かったことや、やりがいについて教えてください。

A：良かったことは、お母さん方が安心して過ごせる姿を見られること、「おきらくごきらく広場で仲良くなれたんです」という言葉もらったこと、繰り返し楽しみにされている様子を見ること、最初は緊張して来られたお母さんが笑顔で帰られることなどです。やりがいになっていることは、ママ友達と一緒に同じ想いで活動できることです。

課題については、限られた時間と費用での準備がやはり難しいことです。全員がボランティアでやっておりますので、仕事をされている方々、上の子どもの面倒を見ながらやっている方々がおりますので、毎回当日に集まる人数も違います。ですので、急に多くの方が来られても対応できないことが課題です。

### <助言者コメント>

- ・“こうあらねばならない”ではなくて、自然に参加者が増えてきたことは良かったと思います。
- ・切れ目のない支援は、福祉分野のテーマとなっています。その中で周産期の切れ目のなさは、大切なポイントだと思います。1万人近くの新生児がいる中で保健師が限られていて、なかなか手が回らない所があると思います。公的な支援が追いつかない部分を、民間のさまざまな支援で隙間を埋めていただき、切れ目のない支援につないでいただきたいと思います。引き続きどうぞよろしくお願い致します。



## 『子どもの心を育てるインクルーシブ保育2』

社会福祉法人嬉泉 鎌田のびやか園

○佐藤 真由美、伊藤 真理子、坂田 朗

( 子ども 若者 )

## 1. 目的

昨今、保育所において配慮を必要とする児童の入園が増えていると言える。その中で、鎌田のびやか園では、法人（社会福祉法人 嬉泉）の理念に則り、インクルーシブ保育（包括的保育）を積極的に展開しているところであり、昨年度当会において配慮を必要とする児童の視点に立ったインクルーシブ保育の内容を発表したところである。

今回は、配慮を必要とする双生児 A くん・B くん（5 歳）の入園（2019.4 月入園）によって生じる様々なドラマを通して、互いに影響し合い、育ち合う・学び合う様子をお伝えすると共に、保育者として経験したこと、考えたこと、学んだことを報告する機会とさせていただく。

## 2. 実践内容

A くん・B くん「保育園を好きになってもらう」という目標を主軸に置き、保育者・在園児それぞれの価値観を尊重しつつ、A くん・B くんとのやりとりを重ねていった。

- (1) 保育者は、A くん・B くんの出る言動の元となる思考や気持ちを考察する。
- (2) A くん・B くんに関わる在園児にも、一緒に考える機会を作る。
- (3) 更に、保育者や子ども達が考えた内容をその他の子ども達にも具体的に説明し共有を図る。

## 3. 結果

リーダー格を示していた R くん、2 人を支える S ちゃん、自己肯定感を高めていくきっかけをもらった H くん、M くん等、子ども達が互いに刺激し合い成長していく姿が見られると共に、今まで在園児の中で生み出されてきた人間関係も、2 人の加入による影響から様々な形へと姿を変え、その都度子ども達自身に「人との関わり方」「人と協働する意味や楽しさ」等を考えさせる機会となったのだと言える。従来人間関係が混沌とした後に、より対等な関係性が生み出されることとなったのである。

## 4. 今後の課題と考察

「友だち」「仲間」という存在が更なる成長の助けとなる年長児の保育において、「友だち」「仲間」と日々の生活は自分と他人の違いを意識し考える機会にもなる。

今回の取り組みを通して、お互いの考えが交差する中「そういう考え方もあるね」「そう感じたのだね」と結果的に 1 人 1 人が否定されずに、認めてもらう経験を得ながら、子ども同士のやり取りの中にもその流れや風潮が波及し、互いに育ち合う・学び合う関係を築けていったのだと言える。

自分自身の価値観を模索しながら、自分とは異なる存在を受け入れようとしていくその瞬間を保育者は逃さずにこれからも支援していきたい。

<質疑応答>

Q：鎌田のびやか園の全体の情報を教えてください。

A：民間の保育園でして、0～5歳の子どもがいます。0歳6人、1歳12人、2歳14人、3.4.5歳が各17人の計83名。0歳は生後57日からお預かりしています。

Q：インクルーシブ保育ということで、子どもが子どもの中で育っていくということがよくわかりました。Aくん・Bくんが入った際に偏食傾向があることに対して、保育士は食事の形態を変えた以外に、保育士が関わり方や環境を整えたことはありましたか。

A：子どもたちで年間行事を決める子ども会議を行うときに、大人の会議のように机を囲ったが、それだとAくんBくんはじっとしていられずに目立ってしまった。そこで次から、好きなところで聞いていいようにし、興味があるときに参加するスタイルをとったところ、目立つことはなくなりました。

<助言者コメント>

- ・とても興味深く聞かせていただきました。椅子を外して、好きなところに座るようなスタイルに変えるのは、素晴らしいと思いました。発表を聞いて、保育士の姿勢が子どもに影響を与えることを強く感じました。先生方が何を大事にされているか、子どもにちゃんと伝わる。できる・できないだけではなく、子ども一人ひとりの行動に意味があって、それを保育士が気づこうと工夫していることがよくわかりました。この子どもたちが、次は小学校でまわりの子に伝えていくと、学校のインクルーシブにもつながると思いました。



## 児童養護施設・里親を巣立った若者の再出発と自立を支える場としての シェアハウス運営

－安心して住むことの出来る居場所の必要性－

特定非営利活動法人若者の自立支援すみれブーケ理事長

内田 朝代

（生きづらさを抱える若者の自立 社会的養護 若者の居場所）

### 1. 問題と目的（はじめに）

一八歳になり児童養護施設から退所した若者は、その後の支援が少ないなか過ぎさなくてはなりません。様々な困難に立ち向かう若者たちの「実家となる居場所をつくりたい」という思いでNPO法人を立ち上げました。さらに多くの若者の居場所を設けるために平成29年3月世田谷区桜上水に新たなシェアハウス「すみれハウス」を開設致しました。施設や里親、ひとり親家庭などを巣立った若者が帰ってこられる場、休息や相談に訪ねられる場、就労のための準備ができる場、そうした実家としての居場所シェアハウスを提供することで、彼らの社会的自立と再スタートを支援しております。

### 2. 方法（対象と手続き）

「家庭的なサポートと専門家によるサポート」

コーディネーターふたりを配置し、何かあったときには相談でき、「一人ではない」と思ってもらえるよう家庭的な寄り添いを行っています。若者たちが住む「すみれハウス」に若者たちの笑顔にすみれブーケの活動の意義を感じています。家庭的なサポートと合わせて生活面だけでなく精神面支援なども行い、また学識経験者や児童養護施設長など専門家による支援委員会を設けサポートを行っており、若者や同居する社会人等への助言等を通じて、自立へのサポートを厚くしております。

### 3. 結果（経過）

開設以来若者の再スタートを支える場としてのすみれハウスから3名の若者が自立することが出来、彼らにとって自立後に遊びにまた休息しに帰ってこられる実家となる場所が出来ました。若者たちの巣立ち（自立）があったため定員に空きが生じたので、利用する若者の募集を開始し、現在2名の若者の受入れ準備中です。

### 4. 考察（まとめ、今後の課題）

当団体は制度外の試みのため公の補助金等は無く、会員様の会費や寄付金で事業を行っております。また、地域の行事に参加した際には多くの方々からたくさんのご支援と応援をいただいております。シェアハウス運営のための資金を調達しなければなりません。行政等の制度としての若者支援は整えられてはきていますが、まだ支援は不十分と考えられます。

<質疑応答>

Q：入所者はどんなきっかけでアポイントをとるのでしょうか。

A：自立援助ホームと児童養護施設など、世田谷の56か所に案内を出しています。

Q：自立に向けてということですが、自立するまでの期間はどの位ですか。期間は決まっていますか。

A：本人が好きだけいていい、期間は決まっていません。長い人で、5年居ます。すみれブーケからは、いつまでとは言わないです。出ていきたくなった時に、背中を押しています。

Q：家賃、生活費はいくらくらいですか。

A：3万円プラス公共料金で計4万円か、5万円プラス公共料金で計6万円か、「すみれハウス」を退所することが決まった若者には、6万円プラス公共料金で計7万円、そして今後後輩の支援も行うということで、法人からいくらかの補助もいたします。

Q：女の子に限っているのか。

A：女の子限定です。

Q：資金面が大変だと思いますが、どうですか。

A：大変です。世田谷の一戸建て、30坪を越える1軒家ですので、それなりのお金を支払わなければなりませんので厳しいです。

<助言者コメント>

- ・制度と制度の狭間で、制度外の活動であり、その状況のなか“切れ目のない支援”を行うことは、とても重要な仕事だと思います。ただ、個人的に行うには限界もありますので、このようなケースが整えられるような支援ができるように、私も含め社会にアピールすることが大事だと思います。素敵な取り組みの継続をお願いしたいです。重要な発表をありがとうございました。



**母子実践プロジェクト**

—母子生活支援施設での実践を通して—

鳥山総合支所保健福祉センター

子ども家庭支援課 子ども家庭支援センター

梅田 弥子

(当事者主体の支援)

**1. はじめに**

このプロジェクトは、平成25年度から平成29年度の5年間、東洋大学福祉社会開発研究センターの「地域で暮らす母子家庭の貧困からの自立に向けた生活保護と子ども・子育て支援の連携に関する研究」の一環として世田谷区と共同研究に取り組んだ中で、私に関わった母子生活支援施設での実践についてまとめたものである。

**2. 実践内容**

- ① シートの作成：東洋大学福祉社会研究センター開発の「当事者の現状整理し、課題解決に向けて支援者と一緒に考えるためのツール」をもとに、私たちが母子生活支援施設での面接で有効に使うためのシートの検討。
- ② 実践：母子生活支援施設での定期面接でシートを利用。実践検討会（振り返り）にてシートから読み取れること、シートを有効に活用するための手法についてスーパーバイズを受ける。

**3. 経過**

シート利用を開始した当初は、利用者も支援者も戸惑う部分が多くあったが、スーパーバイズを受けながら繰り返し利用・検討を重ねていく中で、スムーズに利用できるようになり、世帯について何が課題となっているのか、利用者・施設・支援者三者で共通に理解できるようになってきたと感じた。

**4. 考察**

母子生活支援施設で定期面接を実施し、一定の期間で施設から退所を目指すための検討はこれまでも実施してきた。このプロジェクトを通して「当事者主体の相談支援」ということを意識することで支援者の想いだけでなく、客観的に状況を把握し、利用者が何に困っていて今後どうしていきたいのかということ、三者で共有し支援につなげることができた。

このプロジェクトが始まる時に、「新人ケースワーカーからベテランケースワーカーまで共通にアセスメントができるツールを作ろう」という話があった。東洋大学の先生方はじめ、区内多くの関係機関のみなさんにご協力いただいて出来上がったこのシートを有効に使っていきたい。

## <質疑応答>

Q：母子生活支援施設に入所のきっかけは。

A：住むところがない人やDVで生活の立て直しを行う人に入ってもらっています。

Q：当事者と感じ合えたと思うことは。

A：不登校の双子の中学生を担当していた時、最初は母親と私たちの認識がずれていましたが、母親と話すことで徐々に認識のずれが改善してきて、現在2人とも高校に進学し、元気に行っていることを聞いてすごく嬉しく思いました。

Q：なかなか支援は難しい側面がたくさんある中で、色々なケースワーカーが力をつけていくところで、どうしてもマニュアルだけでは落としきれないようなところがあります。一人ひとりのケースワーカーがどちらかというとな人芸になってしまうような、それぞれが蓄積してきた経験による支援を、こういう形にすることによって、名人芸ではなくて、だれもが一定の力をつけながらやってみるかという点では、とても有意義な実践内容だと思います。これをはじめの前と行った後で、何か変化やみえるものがあれば教えていただきたい。

A：シートを使う前は“今日はこの話をしよう”と自分の中で決めていたのですが、そうではなくて全体の話ができる、部分的な所ではなく全体のところを見なければならぬと、みんなで共通して理解できたと思います。

Q：資料の保管はどうしていますか。

A：子ども家庭支援センターと支援施設の両方で保管している。次の面接の時に、課題も含めて前回の比較に使用しています。

Q：子どもの話は、施設のスタッフの方が主に受け止めるのですか。

A：子ども家庭支援センターの方で直接話すこともあります、施設のスタッフの方が主に面接してください。

## <助言者コメント>

- ・当事者たちを中心に考えられていると感銘いたしました。福祉の分野では支援とニーズのギャップがあつて、そのギャップがあるとどうしても支援者側には不満足感があつて、どこに行つた方がよいか分からないということが起きてしまうことがあります。危惧することとしては、支援の継続が絶たれるということ。シートのことですが、シートを有効に活用するためにも継続して使用することが大事だと思います。また保育園でも行っているとのことですが、有効な取り組みだと思いますので、是非引き続き行っていただきたいと思います。



## 口頭発表 第2分科会 進行役・助言者



園田 巖  
(東京都市大学人間科学部児童学科准教授)



森田 規子  
(世田谷区教育委員会事務局教育相談専門指導員)

## 分科会（口頭）発表 第3分科会

【5階3506教室】

進行役・助言者

北島 洋美（日本体育大学体育学部健康学科教授）

橋本 睦子（社会福祉法人大三島育徳会障害者支援局長）

	発表者	所属	タイトル
1	大森 猛 鈴木 美穂子 遠藤 慧	烏山地域社会福祉協議会事務所 上北沢地区社会福祉協議会	障害の有無を超えて繋がる居場所づくり ー上北沢縁側プロジェクトー
2	前田 美波 林 涼子 桑原 初音	日本大学文理学部社会福祉学科	障害分野でのボランティア活動 ー福祉の現場において学生ボランティアとしてできることー
3	鬼塚 正徳 石黒 真貴子 泉谷 一美	世田谷区福祉移動支援センター (そとでる)	「介護タクシー」と「移送NPO」の違いと 使い分けの研究 ー誰もが自由におでかけできる世田谷を 目指す「そとでる」の実務からー
4	川邊 循	世田谷ボランティア協会 パートナーセンター担当	パートナーセンターはじめました ー認知症がある人もまだない人も・障害の ある人もない人も水平に繋がるー
5	田中 浩伸 紀平 太郎	世田谷サービス公社	精神障害者が働き続けられる職場づくりについて ー(株)世田谷サービス公社の取り組み事例についてー
6	下坂 優孝 岡 基 渡邊 奈月	りはっぴい	外出リハビリ倶楽部のあゆみ
7	中嶋 嘉章 百武 攻 西村 進 貞清 佳子	世田谷区社会福祉協議会 太子堂地区事務局	太子堂ダンディクラブ ー退職後の男性の仲間づくり・地域参加へ 向けてー

## 障害の有無を超えて繋がる居場所づくり

### －上北沢縁側プロジェクト－

烏山地域社会福祉協議会事務所 上北沢地区社会福祉協議会

○大森 猛、鈴木 美穂子、遠藤 慧

(誰でも参加できる みんなでつくる)

#### 1. 目的 (はじめに)

上北沢・八幡山エリア周辺には、松沢病院や中部総合精神保健福祉センターがあることから、多くの精神障害のある方が暮らしている一方、障害の有無に関わらず地域住民同士が交流する機会は少なく、「地域の中に当事者が安心して過ごせる場は少ない」という支援施設・事業所職員からの声がある。

そこで、上北沢地区社会福祉協議会（以下、上北沢地区社協）では、精神障害のある方にとって、安心して過ごせる居場所となり得る場づくりを行うと共に、障害の有無に関わらず、一人暮らしの高齢者や子育て中の方など、誰でも集える場づくりを行うため、“上北沢縁側プロジェクト”を発足した。

#### 2. 実践内容

- (1) 検討会・研修会：2017年度・2018年・2019年度 計8回 ※2019年11月時点
- (2) 居場所に関するアンケート調査(近隣の精神障害者の支援施設・事業所の利用者63名より回答)
- (3) プレ開催：2018年12月6日(木) カフェ、昼食(カレーライス) 参加費：無料
- (4) 本格実施：(年度内 計3回開催予定) 第1回：2019年10月3日(木) 10時～14時  
内容：カフェ、昼食(炊き込みご飯、お吸い物) 参加費実費：カフェ：100円、昼食：200円)
- (5) 検討会および運営メンバー  
住民：上北沢地区社協地域福祉推進員、サロンスタッフ、地区サポーター、障害当事者家族  
専門機関：喫茶室パイン(就労支援B型)、SUストリート(〃)、相談支援事業所マーベラス、ぽーとからすやま、上北沢あんしんすこやかセンター、上北沢まちづくりセンター

#### 3. 結果・経過

10月3日の第1回には、運営に参加している専門機関を利用している精神障害当事者をはじめ、一人暮らし高齢者等約20名の参加があった。親しみやすいよう、居場所の名称を“上北沢縁側プロジェクト”から“上北沢えんがわカフェ”に変更し、年度内はあと2回(12月/2月)実施する予定。

スタッフは、負担軽減のため地区社協の地域福祉推進員のほか、地区住民や専門職の協力を得て、3つのグループを作り、各回の担当を振り分けた。

#### 4. 考察と今後に向けて

精神障害のある方のみならず、一人暮らしの高齢者等の参加もあり、障害の有無に関わらず交流する場づくりという目的の緒に就いた。また、精神障害者支援の専門職が常駐する体制を得たことで、当事者と接する機会が少なかった住民スタッフも安心して運営に携わることができた。

今後は、月1回の開催を目指すと共に、参加者が運営側として携わる仕組みづくりを行いながら、「誰でも参加できる」「みんなでつくる」居場所として、“えんがわカフェ”の発展を目指していく。

#### <質疑応答>

Q：今まで3回開催していますが、アンケートはとりましたか。

A：1回目はやって、2回目はこれから集計していく予定です。1回目の結果は、発表していませんがとってあります。本人だけでは難しいので、施設の方にも協力を得ながらアンケートをとっております。

Q：12名が参加したとありましたが、参加者を集めるにはどのような方法で行っていますか。

A：どなたでも来ていいと言っても、誰もがすぐに来られるわけではないので、準備段階から専門職の方にプロジェクトに入ってもらい協力してもらっています。そして、その専門職の方から、参加いただける方の背中を押してもらったり、施設の事業所の方に連れて来てもらったりなどして、参加いただきました。

Q：精神疾患の方や精神障害のある方が参加されているのでしょうか。

A：精神疾患の方に視点を当てたのは事実ですが、精神疾患だけでなく認知症のご夫婦なども来て下さり、障害の有無に関わらず世代を超えて参加していただいています。

#### <助言者コメント>

- ・様々な活動が活発に行われ、見守りや交流などの役割分担が行われていると思いました。これからも、地域の人で力を合わせて協力して活動してください。



## 障害分野でのボランティア活動

### ー福祉の現場において学生ボランティアとしてできることー

日本大学文理学部社会福祉学科

○前田 美波、林 涼子、桑原 初音

（ 障害 地域 学生ボランティア ）

#### 1. 目的

学外において、実際に障害分野で活動している2つの組織で業務のサポートやヘルパーの仕事をしながら、利用者や職員とのかかわりを持ち現場を体験すること、3人の実践を通して、大学生から見た現状を考察し、実践内容を大学内での発表の機会を通して同世代に発信することを目的とした。

#### 2. 実践内容

- (1) 社会福祉法人むそう：2017年12月から月に1回程度、学生ボランティアとして活動に参加、学生ヘルパーとして業務のサポート、利用者に対しての支援、季節のイベントの企画及び運営を実施。
- (2) NPO法人えるぶ：2019年6月から月に4回程度、インターンシップとして活動に参加、業務のサポート、主に発達障害を持つ人たちと大学生との運動会に参加、音楽や料理などの活動を利用者とともに実施。
- (3) 上記の内容を活動報告として授業内で発表し学生同士で情報を共有。

#### 3. 結果

社会福祉法人むそうではボランティアやヘルパーとして医療的ケアが必要な児童と直接かかわり、支援をすることで、実際の業務の進め方を体感し、現場ではどのような支援が必要とされているのかを学んだ。その学びを生かし、季節ごとにひな祭りやお花見などのイベントを企画し、イベントの運営を行った。NPO法人えるぶではインターンシップ生として、職員から業務内容の指導を受け、日々の活動及び月に1度のイベントのサポートを行った。

それぞれの活動の場で障害のある人が地域で暮らしていくために学生としての立場からできることを考え実践し、社会福祉学科の授業内で他の学生と共有をした。

#### 4. 考察

学生がボランティアとして活動に参加することで、他の学生へ情報を発信し共有することができた。また、継続的にボランティア活動を実施することによって、新たな繋がりが生まれ、それを後輩たちに引き継ぐことで大学生が地域に参加する機会を増やすことができると感じた。これらの活動を通して、机上だけでは学べない現場での実践を知り、それを大学内での学びと融合させることで福祉の諸問題についてより多角的に捉えることができるようになった。今回の活動を通し感じたことを卒業後に地域に暮らす住人の一人として生かしていくことが重要である。

### <質疑応答>

Q：学内のボランティアは多いのですか。

A：社会福祉学科は、ボランティアとして積極的に関わっている人は多いです。もともと日本大学の社会福祉学科は、サークルのような形で運営しているボランティア活動があります。1年生からそこに所属する学生もいれば、教授からすすめられて入った学生もいます。活動や実習先を通して知り合った学生が多いようです。

Q：学生の皆さんが、事業所の現場の様子や職員をみて感じることや現場の課題は何かありますか。

A：私がボランティアをさせてもらっている施設では、ヘルパーと利用者が一対一で対応しているのですが、それ故に受け入れられる人数が非常に少ないのが現状です。一対一での対応は非常に大事だとは思っているのですが、単に利用者が増えて欲しいのではなく、個々に合わせて対応出来る1対1のクオリティはしっかりと保ったまま、その質のサービスを利用出来る方が増えることが望ましい、といったニュアンスです。現場の大変さやその難しさも理解しておりますが、私の理想とするところです。

### <意見・感想>

・学生の皆さんが、とても良い活動をされていると思いました。専門職になると、仕事に慣れてしまう部分もあり、気づきが薄れてきます。学生として活動することは、たくさんの気づきがあり、それは学生ならではの気づきだと思います。これからも、もっともっと多くの学生にこのような活動に参加してもらいたいと思います。気づいたことを、なかなか外に発信するということができずに事業所や施設の職員や先輩に聞いたら悪いのではないかと恐れがちですが、そんなことは何ひとつありません。是非、その気づきを学生間で共有し、発信して行って欲しいと思います。またできれば卒業後も、その気づきを現場に活かしてもらえたらと思います。

### <助言者コメント>

・学生の力は、施設にも良い影響があります。人材不足が問題になっていますが、本日ここに参加された方々も是非活動に参加していただき、みんなで地域をつくって行って欲しいと思います。すばらしい発表でした。



## 「介護タクシー」と「移送NPO」の違いと使い分けの研究

－誰もが自由におでかけできる世田谷を目指す「そとでる」の実務から－

世田谷区福祉移動支援センター（そとでる）

○鬼塚 正徳、石黒 真貴子、泉谷 一美

（くらしの足を守り育てる市民活動）

### 1. はじめに

移動に困難を抱える方々が日頃利用する「介護タクシー」と「移送NPO」の違いは、利用者や、ケアマネージャーさんに、十分認識されていないように思います。この違いを理解して、うまく使い分ければ、利用者のお出かけの機会を増やせると考えます。

### 2. 「介護タクシー」と「移送NPO」は何が違うのか

基本的に「営利」と「非営利」の違いで、「サービス」と「助け合い活動」の違いでもあります。そとでるのデータなどをもとに、いくつかの違いを比較します。

- (1) 「そとでる」における「介護タクシー」と「移送NPO」の利用
  - ・2018年度配車受付3,467件（介護タクシー2,903件、移送NPO 252件、キャンセル312件）
  - ・そとでるが移送NPOに主に依頼しているのは、透析など回数の多いものやイベント送迎など。
- (2) 「介護タクシー」と「移送NPO」のこれまでの経過
  - ・1970年代後半に福祉車両による送迎ボランティア活動が始まり、現在、世田谷では7つの「移送NPO」団体が活動中
  - ・2002年の規制緩和で介護タクシーが増え始めました。
- (3) 「介護タクシー」と「移送NPO」の事業にかかわる制度や法律
  - ・「介護タクシー」と「移送NPO」はともに、道路運送法の規定で事業を実施しています。
  - ・両方とも一人では一般公共交通機関の利用が困難な方々（障害者手帳の所持や介護保険の認定者）を対象としていて、「移送NPO」はその団体の「会員」を対象とすることが規定されています。
- (4) 営利のサービス提供と非営利のボランティアの助け合いの違い
  - 1) プロとアマの違い？
  - 2) 事業主の体制の違い
  - 3) 移送サービス内容と料金（「サービスの対価」と「助け合い活動の実費」）

### 3. まとめ（どう利用すればよいのか）

そとでるでは、利用者からの配車依頼や相談を受けたとき、当日や翌日の急な配車依頼は介護タクシーが担い、透析などの回数の多い定期送迎や遠方の送迎や、費用が掛からない送迎を依頼する利用者には「移送NPO」を紹介しています。

### 4. 「介護タクシー」と「移送NPO」以外の担い手について

世田谷区内では、「障害者手帳の所持や介護保険の認定者」以外にも、一般公共交通機関の利用が困難な方々が増えていて、「介護タクシー」と「移送NPO」だけでは対応が困難になっています。この方々のおでかけニーズに対応する新しい担い手やしくみも求められています。

### <質疑応答>

Q：キャンセルが多いようだが、原因は利用者の体調不良ですか。

A：年間 3000 件以上受付はありますが、そのうち 15%ほど 300 件以上のキャンセルがあります。原因の大半は利用者が体調不良だったり、他のタクシーを予約したなどのバッティングです。15%もあるキャンセルを減らす方法を探しています。大学の先生や学生さんに研究して欲しいと思っています。

Q：市民活動である移送NPOの 40 年の歴史を語っていただき、現在の移送NPOの団体数は 7 団体ということですが、次の担い手の確保という点ではいかがでしょうか。

A：どこの団体も、運転者の確保に苦労しています。でもシニアの社会参加が期待されていて、区内にも多くの社会参加の窓口があり、そこから引っ張ってくる仕組みづくりがまだ完全ではありません。移送NPOの運転などの活動は社会貢献のひとつとして、シニアの生きることのモチベーションを維持するにもおもしろいのですが。

### <助言者コメント>

・「そとでる」さんでは、送迎サービスの質を高める研修をやったり、担い手確保のための区民に向けてのアピールもされています。この区民学会に集う方々にもご参加してもらえようアピールしていただき、今後も広めていただければと思います。



## パートナーセンターはじめました

－認知症がある人もまだない人も・障害のある人もない人も水平に繋がる－

社会福祉法人世田谷ボランティア協会 パートナーセンター担当

川邊 循

(認知症 障害 パートナー)

### 1. 目的

私たち世田谷ボランティア協会では2016年から3年間、世田谷区委託事業として「認知症当事者のための社会参加型プログラム開発事業」を実施した。そこで出会った多くの当事者の方々から学んだことの中心は、認知症・障害当事者（以下「当事者」とする）の方々を持っている「力（チカラ）」である。この「力（チカラ）」は、区民である当事者がパートナーと出会うことで何倍にも発揮することができ、一人一人が望む暮らし方を手に入れながらも、地域への活動と生活を広げることができる。そして、水平な関係の障害のないパートナーにとっても豊かな時間が共有できるという、双方向の事業として展開することを目的とした。

### 2. 活動内容

- (1) 当事者とパートナーをコーディネートする「やりたいことを実現する」活動
- (2) 地域の中の当事者の活動の場の創生及び地域資源と「繋ぐ」活動
- (3) 当事者の抱える様々な事柄についての相談を受け、支援機関や地域資源と連携してアドバイス等を行う「相談する」活動
- (4) 当事者が活躍している地域の活動を区民や関連機関へ啓発する「語る」活動

### 3. 活動経過：私たちの今

2019年6月から始まった「パートナーセンター」。当事者等と賛同する区民が事務局員となり毎週事務局会議を開催している。みんなで集まる中、障害の有無に関わらずそれぞれが思っていること・考えていたことを言葉にし合う中で次々とアイデアが飛び出し、時に語る人生に共感をし、「パートナーセンター」の基礎作りを現在も行っている。

<具体化された主な活動>

- ・パートナーセンター立ち上げの会（当事者を含む40名を超える人たちが集まった）
- ・「高尾山へ行くぞ！ツアー」パートナーに誘われ、車いすの人もごちゃまぜで実施した
- ・みんなに知ってもらおう「パートナーセンターのこと当事者のこと語り合います・・・DISCOで?!」
- ・パンフレットを片手に街へ

### 4. これから

予想を超えて、語り合うとアイデアが飛び出す。どれほど互いにまだまだやりたいことがあるのか。当事者が一人ではできないが、パートナーとならできることがたくさんある。双方向に「楽しさ」をわかちあいながら共に「パートナーセンター」の活動を広げて深めていく中で、限りなく水平な展開を明日も続けて行く。

<質疑応答>

Q：パートナーの方は、いつも同一人物でしょうか。毎回違う方なのでしょうか、色々な方とパートナーを組むのでしょうか。

A：私たちもまだ手探りの状況でやっていますが、基本的にはパートナーは同一人物です。しかし、やりたいことや活躍できる相手と、その都度組むこともできます。

Q：当事者（発表者）の方は、何か言い足りないことはありませんか。

A：障害者というのは、孤独になりやすい。だから、「やりたい」「できるかな」「できないかな」ではなくて、自分が何かしたい、こうしたいという意識をもつことを手助けしていただけたらと感じております。

<助言者コメント>

- ・今、当事者の方が言われたように、「何かやりたいこと、どうぞ」と言われても、やれそうな環境がなければ思うことすらできない、やれる環境があって初めてやりたいと思う気持ちが生まれると思います。やれそうな環境づくりの第一歩として、この活動は素晴らしい活動だと思いました。このパンフレットの文言に“すべての人が水平に”とありますが、当事者のことをきめ細かく考えておられると感じました。どうぞこれからも、活動を広めていって欲しいと思います。



## 精神障害者が働き続けられる職場づくりについて

### －(株)世田谷サービス公社の取り組み事例について－

(株) 世田谷サービス公社 第二事業部共働推進課共働支援係  
田中 浩伸  
(株) 世田谷サービス公社 松沢まちづくりセンター事務局長  
紀平 太郎  
( 就労支援 障害者雇用 )

### 1. はじめに

株式会社世田谷サービス公社は、昭和60年(1985年)に世田谷区唯一の地方公社として設立され、現在、区内約60箇所の区民利用施設の運営を受託し、地域社会の発展と区民福祉の向上を目指し、企業活動を展開しています。高齢者、女性と共に、障害者雇用を重点課題の一つに掲げ現在は100名以上の障害者を雇用しており、法定雇用率は26.22%(算定基準日:平成31年6月1日)で、障害者の経済的自立と社会参加の促進に取り組んでいます。

平成28年度より精神障害者の雇用を開始し、順次、雇用事業所数を拡大している状況です。

### 2. 取り組み

#### ○ 精神障害者雇用の取り組み

弊社では、障害理解を深めるため、全社員を対象に研修を実施しています。特に障害者の就労を支える就労支援員、各施設の監督者(局長)については、定期的に専門性の高い研修を実施し、スキルの向上を図っています。

就労障害者の職場定着支援では、就労支援機関と協力するとともに、専門員が定期的に職場を訪問し、生活面も含めた相談に応じるなど就労継続に配慮しています。

#### ○ モデル事業所の取り組み事例

平成28年度から「松沢まちづくりセンター」を当社の精神障害者雇用のモデル施設とし、健常の清掃員に替えて、現在、精神障害者雇用枠で採用した社員が4名配置されています。施設監督者、一般清掃員、就労指導員、本社専門員・担当者、就労支援機関の担当者など関係者が事前の打ち合わせを重ね、働きやすい職場環境の実現に取り組んでいます。

就労開始にあたり、同センター独自の以下の「励行」を実施し、精神障害者に対してきめ細かい配慮を行い、就労継続に勤めています。①朝礼 ②朝の健康体操 ③1年を通した「うがいと手洗い」 ④急な体調不良時の対応 ⑤OJT ⑥自主性の尊重 ⑦職業生活指導

### 3. 成果

松沢まちづくりセンターでは、関係者全員で就労障害者へのきめ細かい支援を実施し、現在では、精神障害者と共に、高次機能障害者が一緒に就労をしています。また、精神障害者雇用職場を新たに開設する際には、同センターで就業していた経験豊かな就労障害者を配置するなど、円滑な業務の遂行を図っています。

当社の清掃業務では通常、就労障害者には就労支援員を配置しますが、清掃能力が高い障害者については、就労支援員がいない自立職場へ配属するなど、健常の施設スタッフと共に就労しています。

2019年度現在、日常清掃業務では、5事業所で12名の精神障害者の方が就労しています。

### 4. まとめ

今後の課題として、①健常者だけが働いている就労施設へ障害者を配属するなど、更なる「共働」を実践推進していきます。②現在は日常清掃業務が主ですが、障害特性に合った多様な働き方を拡大していきます。③世田谷サービス公社に蓄積した障害者雇用のノウハウを活かし、障害者雇用に取り組む区内企業を対象に教育研修活動を展開していくこと。なども考えていきます。

<質疑応答>

Q：採用はどのように行っているのですか。

A：支援機関から情報を得ており、各現場で実習してもらい、双方の希望が合えば採用となっております。

Q：就労移行支援施設とは、パイプ役の強いところからの紹介なのでしょうか。

A：主にハローワークを通じ、支援機関などからの紹介。

<助言者>

- ・障害がある方々が、団体の戦力として安定して仕事を続けるには、これまでのノウハウ、特に日常的に気をつけなければならないノウハウ、そして研修の場、その双方が必要だと思えます。そのノウハウを社会に広めていって欲しいと思えます。



**外出リハビリ倶楽部のあゆみ**

(株)りはっぴい

○下坂 優孝、岡 基、渡邊 奈月

( 外出 活動 挑戦 )

**1. 目的**

株式会社りはっぴいでは、理念である、「生活の自律と人生の安心」に基づき、ご利用者様に、自分自身の意思により行動して頂くことを目的に、介護保険外サービスとして【外出リハビリ倶楽部（旧おでかけ倶楽部）】を実施している。開催に至る経緯は、他者交流を設けて欲しいというご利用者様からの声であった。現在、リハビリ特化型デイサービス桜新町・自立支援サロンりはっぴい用賀・りはっぴいの訪問看護の様々な疾患の方が参加している。同じ疾患同士、又は疾患を超えて交流する良い機会となっている。

**2. 実施内容**

- (1) 開催頻度：年3回
  - (2) 時間：午前または午後の4時間前後
  - (3) 内容：外出体験・四季を感じる食事を堪能・趣味活動 等
- ※注意点：外出時の保険の加入

**3. 結果**

開始してから6年間で全13回実施しており、継続開催することで、いくつかの変化が出てきた。一つ目は、参加者の方のQOLに変化が出てきたことである。自立度の高い方が、ボランティアスタッフの様に活動・参加することで、日常生活でも外出に積極的になってきたこと。二つ目は参加の有無に関わらず、ご利用者様が興味を持ち、次回開催内容を考えていることである。

**4. 考察と今後**

参加者の方々は、普段の生活の中で経験する機会が少ないことに挑戦することとなる。安心・安全を考えた場合、外出倶楽部に参加しないことも選択肢の一つである。しかし参加された方の多くは、「転倒するリスクもあるが、外を一人で歩いて良かった」「自分自身の考え以上に、車いすでも外出出来た」「公共機関を利用出来て良かった(脳梗塞後)」等、出来ないと思っていたことに挑戦し、達成できたことに大きな喜びを感じていた。

今後は、りはっぴいに関わる利用者様に向けてだけでなく、地域で同じような悩みを抱えた人にも、発信出来たらと考えている。地域の方が、出来ない事に悩み、活動が制限されるのではなく、積極的に外出出来る環境作りに、取り組んでいきたい。私達は頭を使い悩み続けることで、知恵をしばり、地域に関わりたいと考える。

<質疑応答>

Q：ボランティアはいますか。

A：基本ボランティアは募集していません。会社のスタッフが有償ボランティアとして参加している。

Q：外出リハビリ倶楽部は、外出リハビリがメインですか。

A：元々はリハビリを売りにするデイサービスで、10年前に始まっております。機械、器具を用いて行うリハビリは多いと思いますが、理学療法士や作業療法士が常勤常駐しており、リハビリに特化しています。一人ひとりの体力・筋力に合わせたプログラムを提供するデイサービスとなっています。だれひとりとして同じプログラムはありません。その中で、リハビリの効果をみるための外出リハビリとなっています。

Q：有償ボランティア代はどのような内容でしょうか。

A：交通費、お食事をする際のスタッフのお茶代などお気持ち程度などです。

<助言者コメント>

- ・介護保険外のサービスだからこそ、自分からやることができている。サービスを受けるだけでなく、主体的に自分で動くことで行動範囲も広がるでしょうし、人間関係も広がっていくと思います。主体的に自分の居場所をつくっていくことで、生活の楽しみとなるのではないかと。これからも活動を続けていただいて、地域のみなさんの楽しみということで貢献していただきたい。



## 太子堂ダンディクラブ

### － 退職後の男性の仲間づくり・地域参加へ向けて－

世田谷区社会福祉協議会 太子堂地区事務局

○中嶋 嘉章、百武 攻、西村 進、貞清 佳子

（男性の仲間づくり 地域参加）

#### 1. 問題と目的

太子堂地区にある、主に退職後の男性を対象とした仲間づくり・社会参加のきっかけづくり。

太子堂・三軒茶屋周辺には、気軽に集える地域の居場所として「ふれあい・いきいきサロン」や自主活動団体などがあるが、参加メンバーは女性が多く、男性が参加しづらい環境もあり、初めての男性でも気後れすることなく気軽に参加できる場の創出が求められていた。

H29年3月から、地域住民（民生委員や商店街関係者）や民間事業所等と共に打合せを重ね、男性が参加しやすいプログラムとしてエクササイズを主な内容とし、地域の民間事業所の協力（有料老人ホームによるスペース提供・整骨院等による体操指導等）のもと、取り組みが始まった。

#### 2. 現在の実践内容

「太子堂ダンディクラブ」の活動

- (1) 日 時： 毎月1回（主に第3金曜日） 15時～16時半
- (2) 会 場： 全東栄信用組合 世田谷支店 2階会議室
- (3) 参加費： 300円
- (4) 内 容： 主に体操・エクササイズ（体幹・筋力維持）
- (5) 講 師： 五健鍼灸整骨院 他

#### 3. 結果（経過）

H29年9月立ち上げ当初は、メディカルホーム グランダ三軒茶屋（シアタールーム）にて開催していたが、参加者数と会場スペースの関係から、他の会場を検討していたところ、商店街（茶沢通り）にある全東栄信用組合 世田谷支店から会議室を提供してもらえることとなり、会場を変更し現在に至っている。

また会場変更に伴い、会場設営・受付・エクササイズ後の懇談タイム等の運営は参加メンバーが担っている。ダンディクラブの参加をきっかけに、「地域での顔なじみが増えた」「話ができるのが楽しい」などの声も聞かれ、会場内では地域で行なっている他のイベント案内なども行ない、ダンディクラブ以外の地域参加のきっかけづくりの場にもなっている。

#### 4. 今後に向けて（考察・課題など）

3年目を迎え、参加者メンバーがある程度固定化してきたところもある。今後も初めての方が気軽に参加できるよう定期開催とし、新たな参加者の開拓へ向けて地域への呼びかけを継続すると共に、活動の充実を図っていきたい。

### <質疑応答>

Q：場所を見つける方法と、参加費はいくらか教えてください。

A：太子堂地区見守りネットワーク会議にて、他地区での男性対象の取り組みを知る機会があり、太子堂地区でも信用組合があることに気づき、2階の会議室が空いていることを知っておりました。地域の信用組合で総代をやっていることもあり、そこで相談したところ、気持ちよくお引き受けくださいました。一方、問題もありまして、そこは会場が2階であるということです。ダンディクラブといいましても、かなりの高齢の方がいたり、半身麻痺が残り、階段の昇降が難しく参加したくてもできない、という声もありまして、問題も出てきております。また参加費は、1回300円です。

Q：参加費の使い道を教えてください。

A：保険代として、また今後、継続するにあたり、他のダンディエクササイズグループのケースも参考にして、今後は講師料も発生する場合もあるだろうと、参加メンバーとの話し合いの場を持ち、金額を決めました。今、現在は講師の先生方の好意で行ってくださっていますが、今後他の講師に依頼したりする場合などにも備えて参加費をいただくことにしました。

### <意見・感想>

- ・深沢地域にも男性限定の活動があります。他では女性が8~9割なので、男性限定だと打ち解けやすく、意味ある場所だと思います。

### <助言者コメント>

- ・男性が地域の活動に出てこないのは、全国的な課題です。そういった意味では、男性が活動する成功事例だと思います。私も奥沢の男性だけのクラブを見学させてもらったことがあります。男性だけだと、みなさんよくしゃべります。こんなにしゃべるのかと思い、良い交流をされているのだと思いました。同年代の男性同士ということで気楽さもあるし、また、そこからライバル心も芽生えてくるのではないかと思います。奥沢は奥沢のやり方があって、太子堂の場合は地域の場所ですとか、講師ですとか、社会資源を使っていくことで太子堂らしさが出てきて、色々な活動が広まってきたのだと思います。是非、太子堂を軸にダンディな男性が溢れかえるように、期待しておりますので、これからも頑張ってください。



## 口頭発表 第3分科会 進行役・助言者



北島 洋美  
(日本体育大学体育学部健康学科教授)



橋本 睦子  
(社会福祉法人大三島育徳会障害者支援局長)

# 分科会（口頭）発表 第4分科会

【5階3507教室】

進行役・助言者

村田 幸子（福祉ジャーナリスト）

渡邊 裕司（世田谷区社会福祉協議会地域福祉課長）

	発表者	所属	タイトル
1	許斐 侑加 高橋 彩 三浦 唯奈 神田 裕子	東京医療保健大学医療栄養学科	世田谷区における地域連携・貢献活動について
2	吉田 和弘	地域障害者相談支援センター ぼーときぬた	お困りごとの相談窓口『ぼーときぬた』の取り組み ーお困りごとはございませんか？ー
3	石渡 友美香 南 雪乃 宮田 大樹	日本大学文理学部社会福祉学科 日大さくらサロン	日大さくらサロン ー学生ならではの継続したネットワークづくりと今後の展望ー
4	寺田 友明 小坂 美和子 山本 恵理	砧地域ご近所フォーラム 2020 実行委員会	「顔の見える関係」から次のステージへ ー砧地域ご近所フォーラムの取り組みー
5	横溝 照子 中村 さく 宮野 友美袈	世田谷区社会福祉協議会 経堂地区事務局	ひきこもり家族会のとりのくみ ー地域でつながる つなげるー
6	坂口 千恵子 中尾 有紀子	世田谷区社会福祉協議会 下馬・野沢地区事務局	下馬・野沢からはじまる子育ての輪 ー下馬・野沢地区子育て関係団体の 取り組みー
7	齋 佐一 黒木 勉 池島 孝子	世田谷スポ・レクネット	「スポーツ・レクリエーション」それは 楽しいを生み出す原点ースポーツ・レクリエーションというツールを使ってコミュニティー

**世田谷区における地域連携・貢献活動について**

東京医療保健大学 医療栄養学科

○許斐 侑加、高橋 彩、三浦 唯奈、神田 裕子

( 地域貢献 子供食堂 食教育活動 )

**1. 目的**

世田谷区に所在する大学の地域貢献活動の一環として、世田谷区が企画運営する地域活動に参加して、食に関する情報やメニューを提供し、調理を担当するなどして、大学の授業では体験できない学習を行う。

**2. 実践内容**

## (1) 上町ふれあいカフェ

2019年6月11日上町ふれあいの家で実施。

ここでは、私たちの研究のテーマである「大豆の摂取と女性の健康」に関連して、大豆を使用した「黒ゴマプリン」を作成・提供した。

## (2) 子供食堂

2019年9月20日、上馬塩田ふれあいの家で実施。

参加した子供は8歳から15歳までの9名。ここでは、子供たちに実際に食材に触れてもらい、一緒に調理をした。併せて、配膳の方法等をプリントしたランチョンペーパーを用いて、配膳の仕方を学ぶ機会とした。

謝辞：共同した世田谷区社会福祉協議会の関係者の皆様に感謝申し上げます。

**3. 結果（経過）**

- (1) 上町ふれあいカフェでは、大豆及び大豆製品の栄養について知ったので、積極的に大豆製品を食べようとする参加者があったのでやりがいを感じた。
- (2) 子供食堂では、子供たちから「大学生と一緒に食事を作って楽しかった。ごはんが出来上がるまでの工程を初めてみた。嫌いな食べ物を食べられた。」などの発言があった。また、区の担当者からは、「学生さんが熱心に取り組んでくれて、子供たちが食に関心を持った機会を持てたことに感謝する」との発言があり、参加してよかったと思った。

**4. 考察・今後の課題**

子供食堂では、安全面を配慮して包丁を持たせたり、火を使わせることを行わなかったが、次回からは、高学年の子供には実際に包丁を持たせ、火を使って調理を体験させることを検討したい。大学で学んだことが直接地域貢献活動に生かせる喜びと、幅広い参加者に関わることで、伝えることの難しさ、大切さを学ぶことができた。将来、管理栄養士として活躍していくために、ここでの学びを活かしていきたい。

### <質疑応答>

Q：ボランティアや学生の方々がご参加されているようですが、万が一、事故や食中毒が発生した場合は、どのような対応をされるのか教えていただきたい。

A：本学は、管理栄養士の国家資格をとるための大学ですので、大学としても対応しておりますが、まずは来てくださっている利用者の方や関係者の方に、何かが起こることを一番避けなければいけない。万が一にもそのようなことが発生しないよう、非常に厳しく事前に社協の方や関係者の方々と綿密な相談をして実施しました。当日は手の消毒や手袋、マスクなどしていただき、衛生面に配慮したうえで実施し、今後についても当然継続してまいります。

Q：子ども食堂では、安全面を配慮して包丁を持たせたり、火を使わせることを行わなかったとありましたが、そのあたりが気になるという事なのでしょうか。今後の課題なのでしょうか。

A：今回は、初めての場所でやらせてもらうことだったので、日頃のお子さん方の様子がわからないということもありました。日頃からお子さんが包丁を持ったり、火を使う機会がないということでしたが、限られた時間の中で初めてやることは、やはりハードルが高かったと思います。次回以降、また社協の方々とも相談して、体験できたらと考えております。

Q：あんまり安全第一主義でもつまらないのではないか。

A：個人的には、やってみて失敗から学ぶ部分もあると思いますが、現代の世情もあり、迷惑をかけてもいけませんので、最新の注意を払いながら初回は実施したというのが、実状です。

### <意見・感想>

- ・子どもたちに手洗いやマスクの着用など、衛生面が大事であることを教えるきっかけにもなると思います。一緒に作業することで、伝えられるいい機会だと思います。子どもは、「ぼく、ハンバーグ作ったんだよ」と、ただ丸めただけなのですが、とても嬉しそうでした。当日は、出されたものを残す子どもはなく、全員完食で、作る場所から関わることの大切さを、子どもたちから学んだと思います。いい経験をさせていただきました。

### <助言者コメント>

- ・食事の楽しさと大切さを、バランスよく、子どもたちに提供ができた機会だったと思いました。福祉喫茶等でも活用できないかと考えます。



## お困りごとの相談窓口『ぽーときぬた』の取り組み

－お困りごとはございませんか？－

社会福祉法人せたがや檜の木会 地域障害者相談支援センター「ぽーときぬた」

吉田 和弘

( 砧地域 障害者支援 相談支援 )

### 1. はじめに

世田谷区内のお困りごとの相談窓口の一つ、地域障害者相談支援センター「ぽーときぬた」の取り組みについて報告する。

当センターは、今年度より社会福祉法人せたがや檜の木会が世田谷区より受託し運営することとなった。基本相談支援として、相談者からのお困りごとをお聞きして、情報提供や地域のサービス利用につなげるネットワークとしてお手伝いをする。また相談者本人に必要な社会資源がない場合は、必要に応じて社会資源の改善及び開発を行い相談者の支援を行う。

その他の業務内容としてエリア自立支援協議会の事務局、地域包括ケアシステムの推進に向けた各種機関との連携、権利擁護のための支援などがある。

### 2. 『ぽーときぬた』の取り組み

#### (1) 医療的ケア

砧エリア内に「国立成育医療研究センター」があり医療的ケアが必要な相談者が増えてきている。退院後、どのような福祉サービスが使えるかなど、地域の事業者と連携しながら進めていく。また、医療的には成人期移行の問題もあり、砧エリア自立支援協議会で成人グループのテーマとしても取り上げている。

#### (2) 障害高齢者

障害福祉サービスから介護保険サービスへの移行する上で、相談支援専門員と介護支援専門員の連携体制構築に向けて、事業者向けの研修等を行っている。

#### (3) 8050 問題

あんしんすこやかセンターと連携し、高齢者世帯で暮らす「困りごとや課題を抱えた家族(子供)」への相談等を行っている。

#### (4) 精神障害を持つ方への支援

世田谷区には松沢病院、烏山病院など、大きな精神科の病院がある。そのため、基本相談支援の7割ほどは精神障害や発達障害を持つ方への支援である。障害を持つ方のストレングスを十分に活かし、問題解決が図れるような支援を行う。

### 3. おわりに

『ぽーときぬた』では年齢、病気、障害、手帳の有無に関わらず、なんらかの生きづらさを抱えて困っている方の相談場所として機能している。なんとなく不安とか、どこに相談すればいいのか分からないなど、漠然とした困りごとにも相談者と一緒に考えながら解決するためのお手伝いを行う。

砧エリアで何かお困りごとがあれば、『ぽーときぬた』までご相談ください。

## <質疑応答>

Q：相談窓口の仕組みはかなりわかりましたが、来所された方の相談をどんなふうに関係機関につなぎ、連携し問題解決に至ったか、1例でご説明いただけますでしょうか。

A：病院のソーシャルワークからご連絡いただいた事例で、これから退院する予定だけれど、これまで全く地域につながっておらず、どんな資源がありますか、どういうところに通うことができますかと、電話で問い合わせがきました。そこで、こちらから病院に出向き、その患者さんに「どうすることがしたいですか」と聞き取りをしました。その方は、「日中、どこか通いたい」「ちょっと働く場所みたいのがないかな」とおっしゃいました。そこで、病院の方と相談し外出許可をとり、一緒に施設見学に行きました。そして、そこで働きたいという希望がありました。受給者証など全くありませんので、区のワーカーに連絡して一緒に行ってもらい、その後、受給者等の手続きをし、退院後に通所につないだという1事例があります。

Q：月に何件位の相談があるのですか。

A：延べ400件から500件の相談を受けています。

Q：すごいですね。そのうち、解決に至るのは、どのくらいあるのですか。

A：何をもちょう解決とするのかということもありますが、先ほどの事例で言えば、確実に地域の事業所につなげて解決することもあります。多くの場合は関係機関等につないでも、そこでまた何か問題が発生し戻ってくるケースも多いので、線引きが難しい。統計は、現時点では出していません。

Q：相談員は、おひとりでやっているのですか。

A：人員的には5.5人で、実質6人でやっております。

Q：8050問題についての質問です。あんしんすこやかセンターや行政と連携しているとありますが、具体的にどのように連携をとって仕事されているのか教えてください。

A：8050問題は、ほとんどあんしんすこやかセンターの方やケアマネジャーの方が発見して、こちらに相談が入ってきます。その時は、区の方も同行して訪問することが多いです。その後、ケース会議に呼ばれ、一緒に相談してまいります。障害のお子さんをこちらが担当して、高齢のご本人をあんすこが担当するなど、連携しながらも役割分担することもあります。

Q：幅広く対応されていますが、家計や収入に関しても相談にのっているのですか。

A：生活保護の方や、自立支援援助が必要な方もいるので、区と連携して連絡をとり合っています。

Q：区の受託を受けて活動されていますが、個人情報管理はどのようにされているのですか。

A：区の委託機関となっておりますので、情報をとる場合は、区の方にも情報を提供することに同意してもらい、きちんと管理しております。



## 日大さくらサロン

### —学生ならではの継続したネットワークづくりと今後の展望—

日本大学文理学部社会福祉学科 日大さくらサロン

○石渡 友美香、南 雪乃、宮田 大樹

共同研究者：樋口 わかな、吉田 彩花、河上 真奈、栗田 有紀、清川 千彩、田中 祐衣、井出 あいり、  
奥田 あかり、加藤 遙、加藤 響、金井 隆典、鈴木 彩絵、太幡 友、中路 明日香、田谷 百花、原田 若奈  
(学生・サロン)

#### 1. はじめに

「日大さくらサロン」は日本大学文理学部キャンパスを拠点に、大学周辺にお住まいの方々と学生が相互に交流できるサロンを学生自ら企画し、運営する学生ボランティア団体です。

#### 2. 活動内容

2～3ヶ月に1回のペースで大学に地域の方をお招きし、サロンを開催しています。企画からサロンの運営まで学生主催のサロンを開催するため、週に1度の定例会にてサロン企画の話し合いを行っています。また、開催に向けた告知ポスターの製作や招待状の送付、メールの送信、公式Twitterでの案内等、様々な情報手段を活用しながら、学生自ら広報活動に積極的に取り組んでおります。

#### 3. サロン企画内容

- ・桜麗祭ツアー：大学内を地域の方に案内し、学祭の雰囲気を感じていただくツアー企画
- ・学食ランチ：学食で地域の方と一緒に食事をしながらおしゃべりを楽しむ企画
- ・ゼミナール体験：議題に対して、大学の授業形式を活用しながら地域の方と議論する企画
- ・脳トレ・クイズ大会：脳トレを応用した体操やクイズ・ゲームを地域の方と楽しむ企画

#### 4. 新たな取り組み

- ・参加経験者の意見を踏まえ、継続参加を促す試み

学食ランチが特に年齢や性別、障害の有無を問わず好評なため、次回以降のサロンでは学食ランチは毎回実施し、その中で様々なレクリエーションをすることを考えています。参加者の声を取り入れサロンへ積極的に参加していただくきっかけ作りを行っています。

既に行われていたサロン参加毎にスタンプを貯めることができるスタンプカードの取り組みに加えて、1枚分のスタンプが貯まった方に景品をお渡しする取り組みを始めました。1枚目の景品は手作りのメッセージカード、2枚目以降の景品はまた違うものをお渡しすることで継続的に参加する楽しみを生み、参加意欲を高める要因の一つを作り出しています。

#### 5. 課題と今後の展望

今後は、これまで受け継いできた活動目的や意義を再確認しながら活動を見直し、更なる向上を目指していきたいと考えています。新たなサロンを企画したりアンケート等の既存の物を分かりやすいように変更したりと、学生ならではの視点で地域の方に寄り添い共に作り上げるサロンを目指します。

## <質疑応答>

Q：活動の費用はどうしていますか。

A：いつもぎりぎりです。大学の学園祭で学科ごとに行うボランティアサークルに配当されるお金でやっています。その他、他の学科の卒論の研究等で協力してもらったお金でやっております。

Q：地域に門戸を開いている学校の反応はどうか。了解をもらう等、大変なことはありませんか。

A：これまで先輩方がつないでくれた広報の中でやっているので、特に問題はありませんでした。

Q：参加される方が固定していることを課題としてあげていましたが、参加人数はどのくらいですか。

A：イベントによってまちまちです。平均20人位です。

Q：「日大さくらサロン」のメンバーは何人位いらっしゃるのですか。

A：現在20名で活動しています。

Q：地域の方への案内は、どのような方法で行っているのか教えてください。

A：アンケート欄に住所やメールアドレスを記入してもらって、案内状を送付したり、メールを送ったりしています。また、広報では、あんすこ等にポスターを貼ったり、チラシを置いています。

Q：会場はどこですか。サロン実施後の、お掃除等はどうしていますか。

A：会場は大学の食堂や教室で行っています。お掃除等はさくらサロンのメンバーでやっています。

Q：「さくらサロン」の開催時期は3か月に1回とありますが、これに何か意味がありますか。

A：テストもあり、メンバーができるだけ参加できるようにすると、3か月に1回が限度になります。

Q：SNSの活用は、学生らしいと思いましたが、そこからの集客や新規の方はどうか。

A：SNSを見てくれている方は、学生や大学のOBやOG等若い人が多いです。他のサークルの方との情報交換にも活用しています。

## <意見・感想>

- ・地域の方は、いろんな財産をもっているのだから、学生の皆さんがやる側、地域の方が受ける側だけでなく、双方向で一緒に作り、お互いに学び合うことがいいかもしれない。例えば、高齢の方に戦争体験の話や、季節に応じたテーマで話をしてもらうなどです。

## <助言者コメント>

- ・高齢者の健康増進や健康寿命の延伸の観点では、食事・栄養、運動、社会参加の3つが重要と言われており、今後高齢者の検診の項目にも含まれると報道されています。この活動をうまく組み合わせると、まさにマッチした高齢者の方の健康づくりとして地域の活動に位置づけられるのではないかと感じました。それともうひとつ、学生の活動を通して地域の方との交流が深まったかなど、その点も聞きながらこの活動の効果を図ったらどうかと思いました。



## 「顔の見える関係」から次のステージへ

### 一砧地域ご近所フォーラムの取組み

砧地域ご近所フォーラム2020 実行委員会

○寺田 友明、小坂 美和子、山本 恵理

(地域づくり 顔の見える関係 コラボレーション)

### 1. はじめに

砧地域ご近所フォーラムは、いつまでも安心して暮らせる砧地域を目指して顔の見える関係づくりを進めていこうと、平成22年に始まった。フォーラムを主催する実行委員会は、医師・歯科医師・薬剤師などの医療関係者、高齢・障害・子育ての支援者、大学、行政、その他砧地域で活動している多彩な人材で構成され、総勢50名を超える。

これまでの砧地域ご近所フォーラムの実践と進化、そして10年目の節目に目指そうとしている新たなステージについて発表する。

### 2. 実践内容

砧地域ご近所フォーラムは、当初は高齢者のみを対象としていたが、今では世代や背景を超えてつながることができる場になっている。今年3月16日(土)に開催された第9回は「アートでつながる心(ハート)のわ」をテーマに開催し425名の参加があったが、高齢者や障害者、子育て家庭、外国人などさまざまな立場の人々が地域で活躍していることを共有できた。

内容は「アート×人＝ハート(心)」に関連したパネル展示、取り組み発表や参加者と一緒に実演など、地域の各団体が趣向を凝らした。また、様々なハンディを乗り越えて何かを突き詰めようとしている方をアーティストととらえ、参加者がアーティストの話を聞いて自分たちが地域でどのような応援ができるのか、繋がるのかを考える(地域をデザインする)企画をおこなった。

### 3. 考察及び今後について

参加者からは「人と人をつなげて語り合い笑う事、議論する事が大事だと思った」「1人の力は小さくても大勢の力が集まれば、大きな事ができると実感した」などの意見が寄せられた。アートを通じて地域の人と人がハートを通わせ、交流の和・輪が広がった。また繋がることの楽しさと心強さを体感できるフォーラムとなった。

令和2年3月14日に開催予定の第10回砧地域ご近所フォーラムは、開始から10年の節目となる。

10年間の歴史を踏襲しつつ新しい取り組みにも挑戦するというコンセプトのもとに、いままでに取り上げられた地域での活動が現在ではどのように発展したか、そして、地域で新たに展開されている活動を取り上げることとなった。テーマは「明日(あす)をはぐくむ10年のわ ～顔の見える関係からコラボレーションへ～」である。

この10年、砧地域ご近所フォーラムでは、まず顔の見える関係づくりが必要だと考え、多くの人々の輪をつないできた。今後はつながった者同士でコラボレーションして、新たな取り組みを創出していきたい。



### <質疑応答>

Q：10年間もの長い期間、骨太にしっかりと地域に根付いた取り組みができた、最も大きな理由は何ですか。

A：私はこの実行委員会の役員になって3年になるのですが、福祉に関わる人達の意見交換から始まって、第1回は小泉先生が委員長を務められたそうです。この地域では他の職種の人同士とつながりたい、もっともっと良くしたいというパワーが強いように思います。その取り組みに共感する人が増え、このように大きくなったと思います。最初に立ち上げてくださった方の熱意のおかげと、周りの地域性が原動力かと思います。10年目を迎え、ひとつの節目だと思います。これから先、本当にこのまま続けていけるのかということ、続けていかなければということ、どうかたちで続けていけばいいのか、いくのかというのが正念場だと思っています。それと、他の地域でもこれと同じような取り組みをしているところがあり、他の地域とも一緒にやっていたらいいと思っています。そういう点で、自分たちはなにかプラスすることを発信できているのかという反省も含めて、勉強会もやれたらいいのではないかと思います。来年の10回目に向け頑張っていきたいと思います。

### <助言者コメント>

- ・他の地域に住む同じ世田谷区の区民のひとりとしては、うらやましく思います。他の地域にもあったらいいと思います。



## ひきこもり家族会のとりのくみ

—地域でつながる つなげる—

世田谷区社会福祉協議会 経堂地区事務局

○横溝 照子、中村 さく、宮野 友美袈

( 孤立を防ぐ 地域でつながる )

## 1. ひきこもり家族会＝世田谷はなみずきの会の目的

ひきこもりなどの生きづらさを抱えているお子さんのいる家族の居場所となり、地域でつながることで孤立を防ぐ。悩みを共有し、共に語り学びあうことで家族が少しでも楽になり元気になることを目的として、親も子も豊かに生きていけるよう自主的な活動をする。

## 2. 活動内容

○家族懇談会：月に一回開催 主に宮坂区民センター小会議室 13：30～16：30

事前申し込み不要、途中参加退室可。その場にいるだけ、また参加者の話を聞くだけでも可。

○講師やカウンセラーを交えた懇談会：年に数回懇談会に参加。ひきこもりの我が子の生きづらさへの親の理解を深め対応を学ぶ。専門家から今できることのアドバイスをもらう。

## 3. 結果（経過）

ひきこもり状態にある家族がいることで、家族間だけで行き詰まり、地域や社会との関係が離れてしまった親御さんや、兄弟姉妹の方の参加があった。皆さんから「誰かに話を聞いてもらいたい、でも何処に行けばいいのか分からなかった。」と話され、その方々の参加動機は「自分が住んでいる区内で、近くに引きこもり家族会ができたことで足を運ぶ気持ちになった。」ということだった。この動機は家族会に参加される大部分の方に共通していることから、『世田谷はなみずきの会』が、地域につながった『ひきこもり家族会』であるという存在意義を持つことができた。

家族懇談会の回を重ねるごとに、同一の参加者が増え、ひきこもり状態の子のいる家族にとって安心できる居場所になってきている。ひきこもっている子や一緒に暮らす家族の様子、どう接したらよいか悩んでいること、日々の暮らしの様子、自分の悩み、健康維持や、気持ちを切り替える秘訣、趣味の話など、参加者同士で活発な話し合いが行われるようになり、笑い声も聞かれるようになった。このことは、思いや考えを分かち合う中で、気付きやヒントにつながり、家族に視野を広げられるようになってきているのではないかと考える。そして世田谷区社会福祉協議会とつながることで、地域活動や地域福祉関係者とのネットワークが広がり、会に参加した孤立しているひきこもり状態の子がいる家族を支援機関につなげることができた。

## 4. 今後の課題

ひきこもり状態の子のいる家族の孤立を防ぎ、その家族同士がさらにつながっていくため、広報活動を強化しながら、より多くのひきこもりを抱える家族、地域関係者、支援機関に知ってもらう。また、各支援機関や都内ひきこもり家族会と連携し、支援対策の情報や講演会などに出席して学んだことを家族会参加者に還元していく。そしてひきこもり家族会が世田谷区社会福祉協議会、地域の方々とのつながりや交流をより深めながら、互いに協力しあい、地域で安心して暮らしていけるよう課題に取り組んでいく。

### <質疑応答>

Q：『世田谷はなみずきの会』は、いつできたのですか。

A：世田谷区内の家族会の活動は、昨年10月からです。活動して1年が経過しました。

Q：全国的には、「ひきこもりの家族会」は結構あるのですか。

A：全国的には、KHJ全国ひきこもり家族会等15年前位からあります。

Q：世田谷区は、昨年からの活動がようやく始まったということは、これまでみなさんは、ご自分で苦労されて、個人でどうしていいかわからない状況のなか、やっておられたのでしょうか。

A：都内にいくつか家族連合会があり、そこを拠点に活動していました。

Q：世田谷区でも家族会が発足して情報がとれるようになり、発信というのか、一段階あがったという状況と言えるのでしょうか。

A：これまでは、全国組織で家族連合会がありましたが、この1、2年は市や区単位で家族会がたくさん立ちあがってきており、自分たちで発信して地域のみなさんとつながりながら活動するようになってきました。現在、世田谷区も含めて都内で17、18くらいが立ちあがってきています。

### <助言者コメント>

- ・日本は、色々な課題を解決してきました。例えば認知症の問題のこと、高次脳機能障害のある方々の問題のこと、これまでの歴史の中で、国の制度から置き忘れられた人達のこともずいぶん解決してきました。今の社会情勢を考えると、引きこもっている方々の支援は、数が多いにもかかわらず取り残されている問題のように感じます。

認知症や高次脳機能障害のある方々の問題を解決にするにあたっては、国の施策もあるとは思いますが、当事者自身が社会に発信し、家族会を発足して全国組織にして実態を知らせ、理解してもらう努力をし、まだまだ偏見や差別が残っているかもしれませんが、問題解決にあたってきました。

- ・新たな家族会がたちあがり、それがひとつのうねりとなって、連絡会のような横のつながりができ、さらに社会に向けた発信も強くなってくると思います。それから、さらにすすんでやはり当事者自身が社会に発信していくことができるとさらに理解が深まると思います。ようするに、世の中は無知なのだと思えます。無知が誤解を生んで、差別につながってしまうということがあるので、やはりご家族や当事者の発信ということが、世の中を変えていく力になると思います。
- ・『世田谷はなみずきの会』はまだまだ始まったばかりの会です。みなさまにご理解をいただきたいです。手をたずさえて、支援の輪がひろがることを願っています。応援しています。



**下馬・野沢からはじまる子育ての輪**  
**—下馬・野沢地区子育て関係団体の取組み—**

世田谷区社会福祉協議会 下馬・野沢地区事務局

○坂口 千恵子、中尾 有紀子

（地域をつなぐネットワーク）

### 1. 問題と目的

下馬・野沢地区では、子育て関係の活動団体として児童館、おでかけひろば、子育てサロン、地区社会福祉協議会があり、個々では活発な活動を展開しているが、団体間の情報共有や連携が十分ではなかった。

地域のつながりの脆弱化と、それに伴う親子の孤立が社会問題となる中、「団体間の顔の見える関係づくり」が必要であると、各団体から意見が挙がっていた。

このような状況を踏まえ、子育ての関係団体がゆるやかにつながり、顔の見える関係を構築し、情報交換や課題の持ち寄りと共有等を図るため、平成30年に「下馬・野沢地区子育て関係団体ネットワーク」を立ち上げた。

### 2. 実践内容

「下馬・野沢地区子育て関係団体」の活動

構成団体：野沢児童館、のぞわテットーひろば、ひよっこりひろば、おおきな栗の木の下で  
 Kodomo Club、COROCORO CLUB、まちかど文庫ポニー、夜のお茶会★きらきら星  
 離乳食パン焼き会、子ども食堂 せたがや子どもバル 虹、下馬地区社協、野沢地区社協

活動内容：交流会（年1回）：年度初めに開催し、担当者同士の顔合わせや取組みの紹介  
 作業部会（年2回）：協働イベント等についての具体的な話し合い

広報「下馬・野沢地区 子育てマップ」作成・配布

協働イベント（年1回）「親子の活動力アップ講演会」※区健康づくり課と共催

### 3. 結果

第1回目の交流会では各団体の活動紹介に加え、活動をする中での困りごと、協力できることについて情報交換を行った。

各団体が抱える困りごとでは、参加促進に繋がる広報PRが課題としてあり、広報のツールとして、団体の紹介や活動場所を掲載した「下馬・野沢地区 子育てマップ」を作成した。このマップを近隣の図書館・健診会場等への設置や子育てイベント・地区社協事業などで配布し、参加促進に繋がっている。また、今年11月には、健康づくり課との共催による「親子の活動力アップ講演会」を実施し、各団体と協働によるイベントを開催した。

### 4. 考察と今後の課題

関係団体とのネットワークを起点として、引き続き個々の団体では出来なかった取組みを団体間の協働により、問題解決に繋げていく。今後は地区課題に取り組めるよう活動の充実を図っていききたい。

## <質疑応答>

Q：広報の「子育てマップ」はイラストが得意な方が作っておられるようですが、こういうネットワークをつくる上で工夫している点は、何かありますかでしょうか。

A：ネットワークを立ち上げたきっかけになりますが、社会福祉協議会の地区担当が、各団体や施設を訪問し、ニーズ調査などで活動する方々の声をひろう中で一番多かったのが、顔の見える関係づくり、横のつながりをもちたいという声でした。そして、その方々にお声をかけたところ、多くの方に集っていただきました。この「子育てマップ」は、地区内のイラストレーターの方など地区内のいろいろな方の持ち味を活かして、出来上がった宝物となっております。

Q：ひとつの団体でできないことも、一緒になってやることで大きな力となり問題を解決するということがあります。しかし、団体がネットワークを組むことで団体間の利害関係が生じ、争いとまではいけないものの、なかなかまとまらないということはないのですか。

A：今のところは、そのような利害関係が生じるようなことはないです。上手くできています。

Q：連絡会などネットワークをつくる場合は、いつもうまくいくもののでしょうか。

A：団体はそれぞれに目的をもっておりますので、ひとつの輪になるよう調整することが難しい場面もあると思います。しかし、一定程度みなさんがネットワークをつくろうと集まってきてくださっていますので、運営しやすいと思います。

Q：今回の発表にもあった子ども食堂のことですが、乳幼児期のお子さんのグループが多いので、ネットワークをつくることで子ども食堂の利用にもつながっていきそうでしょうか。

A：子ども食堂に関しては、親子で行っていい場所という認識があまりなく、子どもだけがいくところとされていて、大人も行っていくことをシェアできると、「じゃ私も行ってみたい」と広がっていくように思います。

## <助言者コメント>

- ・これからも新しい資源、サービスと連携しながら、有意義にゆっくり向かっていってください。



## 「スポーツ・レクリエーション」それは楽しいを生み出す原点

ースポーツ・レクリエーションというツールを使ってコミュニティー

世田谷スポ・レクネット

○齋 佐一、黒木 勉、池島 孝子

(スポーツ・レクリエーション 主人公 交流)

### 1. はじめに

現代社会で人気を博す「SNS コミュニケーションツール」の発展は、人間の「人と人との結びつき」を求める欲求を浮き彫りにしている。そのようなツールの発達背景からは、現代社会での人と人を繋げるコミュニティの不足が伺える。世田谷スポ・レクネットは地域という枠組みから、スポーツ・レクリエーションというツールを使ってコミュニティを提供するものである。本稿ではその活動から得た実績を述べる事とする。

### 2. 実践内容

2015年より深沢地域を中心に障がいのあるなし、年齢を問わず、だれもが気持ちよく身体を動かすことのできるスポーツ・レクリエーション（レクリエーションとしてスポーツを行う）活動を行っている。

- 年間8回程のスポーツ・レクリエーションイベントを主催している。主なものとして、ボウリング大会、宿泊イベント、ポッチャ交流大会、餅つき大会など。
- 専門講師によるセミナー、勉強会の実施。（ふうせんバレー、車イスの指導、アイスブレイクについての指導、ホスピタリティについて、スポーツチャンバラ、卓球バレー、テニス）
- 毎月1回実施のポッチャ交流会。（2018年度）
- 今期から地域社協と共催事業としてスポーツ・レクリエーションイベントを行う。
- 地域の団体主催のイベントにボランティアスタッフとして参加や出店協力。また、地域社協主催の事業に協力。

### 3. 結果

スポーツ・レクリエーションは障がいのあるなし、年齢を問わず、だれもが体を動かすという人間の本源的な欲求に応えるとともに、楽しいを生み出す原点である。

活動では参加者一人ひとりに主人公となってもらい、その楽しさをみんなと共有して貰うことができた。参加者、スタッフには「お互いの多様性を理解すること、それを基に交流を生み出すことの重要性」を広められたと感じる。

### 4. 考察

いままで実施したイベントから、だれにでも受け入れられるスポーツ・レクリエーション種目というものはない。その時々参加者に合わせてゲームの方法、ルールを共に創りあげていくことが重要なことと考察する。これからも私たちの活動を地域におけるコミュニティとして広く地域住民に周知していきたい。

## <質疑応答>

Q：たくさんのスポーツを提供されていますが、教えてくれる人はいるのですか。

A：日本体育大学等から講師を招いたり、既に（障がい者スポーツの経験者）行っている方々から教えられています。はじめは学びながら楽しみ、そして自分たちでアレンジしたり工夫してさらに楽しむようにしています。

Q：地域のコミュニティの価値を付加する工夫などありますか。スポーツを楽しむことで自然に生まれてくるものなのでしょうか。

A：このような活動をしていると地域に障がいのある方や、地域のどこに住んでいるかわからない人達も参加され、参加者が少しずつ増えてきています。ただ、参加者が急に増えても、その方々を補佐できないので、積極的な宣伝はしていません。どちらかという、サポートして下さる方を募集している段階です。

Q：スポレクネットとは、どんな団体なのですか。

A：世田谷スポ・レクネットは任意団体です。平成25年から3年間文部科学省の推進事業「障がいのある人ない人のスポーツ・レクリエーション交流事業」がありました。当時全国で20数か所の会場で行った文部科学省の推進事業でしたが、その中で世田谷の会場の参加者有志がこの事業終了後も引き続き、この活動を地域に根付かせたいと考え、全国の会場の中で唯一任意団体として立ち上げて、現在に至っています。今後は、NPO法人格を取得し、活動をさらに広めていくよう準備をすすめています。

Q：活動のお金は、どこから出ているのですか。

A：区の補助金と、参加される方々から参加費で運営しております。

Q：みなさんは、手弁当でやっておられるのですか。

A：そういうことです。会員は50名くらい登録していますが、実際、実行委員スタッフとして運営しているのは、12名から13名です。

## <助言者のコメント>

- ・地域づくりにスポーツが入ってきたというのは、新しい視点だと思います。健康づくりは、今、多くの方の関心ですので、これが根付いていけばいいと思います。ご活躍を期待しております。



## 口頭発表 第4分科会 進行役・助言者



村田 幸子  
(福祉ジャーナリスト)



渡邊 裕司  
(世田谷区社会福祉協議会地域福祉課長)

# 分科会（口頭）発表 第5分科会

【5階3508教室】

進行役・助言者

久保田 純（日本大学文理学部社会福祉学科助教）

高橋 裕子（世田谷区砧総合支所 子ども家庭支援課長）

	発表者	所属	タイトル
1	内藤 麻里 水内 寿美子	奥沢あんしんすこやかセンター デイホーム奥沢	地域の力を活かせる場としてできること
2	大平 泰博 小林 伸光	世田谷区介護サービスネットワーク 北沢地域部会	雑居祭りに参加して －北沢地域部会から発信する地域包括ケア システムの実現－
3	中村 碧 下山 香苗	特別養護老人ホーム久我山園	尿路感染症を防止するために陰部洗浄方法 の統一を試みて
4	長見 亮太	世田谷区立下馬福祉工房	エピソードを通じて本人の気持ちに気づく －知的障害がある方の気持ち、心情を どう捉えるか－
5	田島 和美	上町工房	特別支援学校介助員を通して学んだこと、 感じたこと
6	岡田 真未子	児童養護施設福音寮	児童養護施設における多職種連携について －医師、看護、心理職の働きから－

## 地域の力を活かせる場としてできること

奥沢あんしんすこやかセンター

内藤 麻里

デイホーム奥沢

○水内 寿美子

（居場所作り 地域の力 コミュニティカフェ）

### 1. はじめに

デイホーム奥沢は緑豊かな閑静な住宅街にたたずむ3階建ての建物です。2階、3階はデイホーム奥沢、1階には、福祉の相談窓口・奥沢あんしんすこやかセンターと、要介護の方のケアプランを作成する奥沢居宅介護支援事業所があり、地域の方々を総合的にサポートしています。

14年前、この建物を建設する際、地域の方からの要望で、地域の方々が集える喫茶スペースを作りました。この喫茶スペースを地域の拠点として、地域の方々とともに活動してきた経過とその成果、今後の展望について報告します。

### 2. 実践内容

- ・「喫茶さぎ草」、「オレンジカフェさぎ草」の活動紹介
- ・デイホーム奥沢で活躍してくださっている地域のボランティアの方々の紹介
- ・地域開放事業、ボランティア交流会について
- ・今までの活動の振り返りと、今後の活動に向けた地域の声

### 3. 結果

来年3月に奥沢あんしんすこやかセンターが移転となることもあり、今後の活動に向けて、ボランティアの方との話し合いや、ボランティア交流会での「声」の収集、「喫茶さぎ草」利用者へのアンケートなどを通して、今までの活動の意義と今後の活動に向けての取り組みをまとめることができました。デイホーム奥沢と奥沢あんしんすこやかセンター、奥沢居宅介護支援センターと連携し地域の方の居場所作りを続けて参ります。

### 4. 今後の課題

担い手の方の高齢化、奥沢あんしんすこやかセンターの移転後のフォロー体制などの課題があり、奥沢地区の課題として、社会福祉協議会やまちづくりセンターとも連携して、地域の力を継続できるような取り組みをしていきたいと思っております。今後、高齢者だけでなく、障害者・子育て親子などさまざまな人が気軽に来れる居場所として、新たな展開を模索していきたいと考えています。

### <質疑応答>

Q：男性の参加者がグラフをみると増えていて、男性の参加者の感想に憩いの場になっているとありますが、どうして男性の参加者が増えたのでしょうか。普通はなかなか男性が来ないし、特に1時から3時半の時間帯に男性の参加者が増えていますが、どのように分析しているのでしょうか。

A：開店当初は、町会婦人会がつくったということもあって女性が多かったと思います。どうして最近男性が増えたかということですが、ちょっと私たちもわからない部分もあります。お散歩の途中で寄ってくださった方ですとか、家族の介護をされている方ですとか、声かけした中で、何かをやるってことではなく、ふらっと来て100円のコーヒーを飲んで帰られるという感じで、来ているうちに3、4人仲良くなる。男性同士が顔なじみの関係になって、おひとり暮らしの方もあって、その中で女性の方々もうまく話を引き出してくださって、近年男性の方が増えてきたのかなと思います。

Q：来年3月あんしんすこやかセンターが移転しますが、その後は誰が中心になって活動されるのでしょうか？

A：活動に参加されている方はサロンに所属されていて、地域の方々が中心になってやっただきつているので、あんしんすこやかセンターがなくなっても大丈夫だと思います。とはいうものの、急になくなっても心配ですので、来年度に向けて定期的に地域の方々と話し合いをすすめているところです。また今後は、月に1、2回は、出張相談という形で出向き、フォローする体制をつくっていきたくと考えています。

Q：男性が増えたことを分析していただきたい。その結果がわかると、同じような活動をされている他の事業所も展開できると思います。是非お願いします。

### <助言者コメント>

- ・私もまったく同じ感想をもちました。どこにいても、やっぱり男性の高齢者を引っ張り出すのは難しいです。私も男性だからわかるのですが、男性ってただしゃべる場所って絶対行かないんですよね。何か目的がないと行かない。きっとその場所で、何かいい実践をされているからかなと思います。是非、また発表して頂きたいと思います。
- ・私も奥沢の取組みは、以前から知っていました。奥沢は、地域の町会の皆さんの強いネットワークがはりめぐらされていて、その強い地域力と専門家の力が十分に発揮された結果ではないかなと思いました。



## 雑居祭りに参加して

### －北沢地域部会から発信する地域包括ケアシステムの実現－

世田谷区介護サービスネットワーク 北沢地域部会

○大平 泰博、小林 伸光

（ 雑居祭り 地域包括ケアシステム ）

#### 1. 目的

雑居祭りに来場した地域の方々との交流を通し介護・医療サービスや介護・医療を取り巻く周辺サービスについての相談受付や啓蒙を行い、地域包括ケアシステムの実現に向けた発信を試みたので、ここに報告する。

#### 2. 実践内容

ブース内にて以下の試みを実施。

- (1) 出張講座の実施：各分野の専門家が5講座を行う
- (2) 体験コーナーの実施：血管年齢測定や見守りロボットの体験を行う
- (3) 相談コーナーの実施：血圧測定を通して相談を受け付ける
- (4) アンケートの実施：ケアマネージャーに関するアンケートを実施
- (5) 各事業所の冊子配布：北沢地域部会メンバーが所属する事業所の冊子を作成し配布

#### 3. 結果

約190名の方々が北沢地域部会のブースに来場された。体験コーナーが集客につながり、出張講座を通して介護や医療、その他の周辺サービスに関する相談、啓蒙を行うことができた。また、アンケートは117名に行ってもらえることができ、半数以上の方が介護に興味を持たれていることが分かった。しかし、介護に興味の無い方も半数おり、少数意見としてケアマネージャーの存在自体を知らない方も見受けられた。

#### 4. 考察と今後の課題

今回、雨天での開催にも関わらず前年度に比べてブースを訪れてくれる方が多かった。体験コーナーの血管年齢測定に興味を持ってくれる方が多く、その流れで相談や啓蒙につなげることができた。アンケートの結果からも介護に興味のある方は多かったが、具体的なサービスの存在までを知っている人は少なかった。我々が当たり前のように思っている介護や医療を取り巻くサービスは、地域の方々には浸透しておらず、地域のイベントを通して伝えていくことが必要であると感じた。

北沢地域部会では、雑居祭りの参加以外に、地域の介護施設を借り、新年会やバーベキューの開催、お寺でのヨガ教室を多くの介護・医療関係職種と地域の方々を交えて行っている。北沢地域部会としても、地域の介護・医療関係者との交流を通してお互いが見える関係をさらに構築していくことが必要である。また、地域の方々に情報発信を行い、ご自身やご家族が要介護認定を受けたとしても、北沢地域には安心して在宅で生活していけるサービスがあることを知ってもらう機会も多く作る必要がある。今後も、地域における介護・医療を取り巻くサービスの代表として多方面に発信していくことで、地域包括ケアシステムの実現につながるのではないかと考える。

## <質疑応答>

Q：この雑居祭りは、障害の方が中心に集まっているように思いますが、高齢の方々との交流はあったのでしょうか。

A：自分たちのブースで夢中でやっていて、他のブースの方との交流はそこまでなかったのですが、正直どこまで交流があったかはよくわかりませんでした。でも、あるブースでのデモンストレーションの時は、たしか手話団体の方々だと思いますが、興味をもっていただき前方に集まってきてくれて、コミュニケーションがとれていました。

Q：雨天で中止になったブースもあったようですか、どのような講座やブースが人気だったり、好評でしたか。

A：この講座を聞くためだけに集まってくるのではないので、時間ごとに、これから血管年齢測定等の体験をはじめます等声かけをして、そこに集まってくれた方々に講座のことを話して、興味があったら参加してもらおうという感じでした。その中でも不安があったりこの様な講座が、人気があった感じがします。介護に特化して聞きにくるわけではないため、来年度も雑居祭りに参加するにあたっては、どう聞いていただけるか考えていきます。

Q：今年、初めての参加でしょうか。

A：今年で3回目になります。私自身としては、2回目ですが、部会としては3回目になります。

Q：1回目、2回目、3回目と何か変えていっていることはありますか。

A：1回目は、講座はしていなかったと思います。2回目から講座がはじまって、今回は、デモと講座を実施しました。年々、より参加者が多くなっているので、来年はさらに工夫していい啓蒙活動につなげることができると思います。

## <助言者コメント>

- ・知っていただくためのアンケートについてですが、世田谷区の方でも区民意識調査や「あんしんすこやかセンターを知っていますか」などのアンケートをやっております。しかし、65歳以上の高齢者の方は知っていても、40代や50代の現役の世代は知らないという声が多い。なので、知っていただくための工夫という点が、重要になってくると思いますし、今後の課題にあがると思います。



**尿路感染症を防止するために陰部洗浄方法の統一を試みて**

社会福祉法人康和会 特別養護老人ホーム久我山園

○中村 碧、下山 香苗

(陰部洗浄 尿路感染症 水分)

**1. はじめに**

看護師より平成30年1月より尿路感染症が多く発生していると報告を受けた。排泄ケアの状況を確認することにより、陰部清拭はしているが陰部洗浄はしていないことがわかった。正しい陰部洗浄の方法を統一し、尿路感染症を減少させることが出来た為、ここに報告する。

**2. 研究方法**

- (1) 研究期間 2018年9月～2019年4月
- (2) 排泄ケアの方法について調査（利用者のベッド上排泄ケアかトイレ排泄の区別）
- (3) 排泄ケアにおける尿路感染症の発生比率
- (4) 排泄ケアの手順の確認
- (5) 陰部洗浄の方法と用具の準備
- (6) 水分摂取量の統一

**3. 結果**

尿路感染症と診断された人数を調べると、平成30年1月から8月までの期間に9名の発症が見られた。尿路感染症発症の比率はベッド上排泄介助者67%、トイレ排泄介助者33%であった。ベッド上排泄者の尿路感染症が多いことが分かった。陰部洗浄の方法を看護師から指導してもらい、指導内容を介護士に個別に伝達指導することで方法を習得してもらった。飲水量も尿路感染症に影響する要因であるため、1日平均750ml以上の摂取を目標にしてスタッフ間で統一した。特に尿路感染症を繰り返している利用者には注意を要し、摂取量を記録として残した。結果約900mlの摂取量を確保することが出来た。これらを試みて、平成30年9月から平成31年4月までの尿路感染症発症者がベッド上排泄介助者3人、トイレ排泄介助者1人に減少した。

**4. 考察**

職員からは、洗浄方法の手順を変更し時間がかかるとの意見もあった。現在では慣れ業務の負担になることもなくなっている。陰部洗浄の方法を統一した結果、尿路感染症も減少し、利用者からは「スッキリして気持ちいい」との声も聞かれた。これらは、介護ケアの質の向上にもつながったと考える。今後も、利用者目線で日々の健康状態の観察を行いながら、介護ケアの質の向上を図れるよう努力していきたい。

### <質疑応答>

Q：私も医療職のひとりです。陰部洗浄や陰部ケアはとても大事だけど、チームで職員の手技を統一することはとてもむずかしいことで、その陰にはご苦労も多かったと思います。みんなでやるにあたって、工夫した点があったら是非教えてください。

A：排泄委員が各フロアに2名ずついるのですが、まずは看護師からやり方を教えてもらい、委員で相談しながら、陰部洗浄の手技を考えました。そして、その方法や手順のマニュアルを作成しました。そして、決定したことを、各フロアの連携ノート（このノートにあることは、必ずみんなが読むことになっています）にマニュアルを張り付けて、みんなに読んでもらいました。そこで統一してもらって、わからないことがあれば、排泄委員に聞いてもらう方法をとりました。職員全員がすべてわかってやっているかについては、正直わからない部分もありますが、施設内研修でも3回ほど手順などを発表したり、そこで情報提供し方法を共有しました。

### <助言者コメント>

- ・チームでケアを実施する際に、全員が同じ認識の上、手技を統一することは大変難しいことだと思います。これからも是非続けていって欲しいと思います。排泄委員がいるということも、初めて知りました。どうぞ、これからも、頑張ってください。
- ・今回の発表では統計をとっておられますが、数として9名と少ないので、今回の方法の効果を客観的にするためにも、今後も続けていただきたいと思います。また、施設内だけにとどまらず、在宅で介護されているご家族やヘルパーの方々にも伝えていただきたいと思います。



## エピソードを通じて本人の気持ちに気づく —知的障害がある方の気持ち、心情をどう捉えるか—

社会福祉法人せたがや檜の木会 世田谷区立下馬福祉工房

○長見 亮太

（個別支援計画 エピソード記述 心情理解）

### 1. はじめに

知的障害のある方への支援を行う時、本人の「こうしたい」「こうなりたい」という気持ちに沿って個別支援計画を立て、実際の支援を行っていく。ただ障害があるがゆえに自分の思いを言葉でうまく伝えられなかったり、言葉で伝えられる幅が狭く、なかなかその方の気持ちを汲み取りにくい、ということが多くある。ともすれば家族や支援者の「こうなってほしい」という希望だけが優先されがちな面もある。本人の気持ちという、目には見えないが対人援助を行うために何より大切な事柄をどう捉えるか。エピソード記述という方法を通じて、本人主体の支援とは何かを考える。

### 2. 方法

エピソード記述とは、本人と支援者の関わりの中で生まれた出来事をエピソードとしてまとめ、考察を加えることで、そこから浮かんでくる本人の心情の表れを捉えようとする試みである。支援者は客観的立場ではなく、ともにエピソードを生む立場として存在し、本人の言動や表現から支援者が「こう感じた」「だからこんな風に応えた」という部分も書き加えることで、「私」と「あなた」の関係の中から気持ちを捉えていく。「～さんはこんな風に思っていたんだ」（と、支援者である私がそう感じた）というエピソードの積み重ねから、本人の「こうしたい」という気持ちがより分かってくるのではないかと考えている。

### 3. エピソード（数例を当日紹介いたします）

- ・集団の中に入りにくいAさん。段々過ごし慣れてきた時期、施設の忘年会で、皆の前で「はじめの言葉」を言うことになった。事前の練習では淡々と役割をこなすように読み上げていたAさん。本番の会場に向かう電車の中で見せた、これまでにない姿があった（つづく）

### 4. まとめ

Aさんとのエピソードをどう解釈するかによって、Aさんという人をどう捉えるか、そしてそこからどんな関わりが大事になってくるかが違って来る。正解はないが、エピソードを通じてその人と自分との間に生まれた心の動きを文章として残し、人に読んでもらうことで、本人が抱えているであろう気持ちを周りの人と共有しやすくなるという良さがある。また支援者は単なる黒子ではなく、エピソードを通じてともにその場を生きる存在であり、その人だからこそその関わりがあるということを確認することが出来る。自分自身が、またそれを読んだ人にとっても、この仕事をする意義のようなものを振り返り、励みになることもある。自身の成長にもつながるから、続けたい取り組みである。

### <質疑応答>

Q：私は、仕事から支援記録をみる機会が多いですが、支援記録とはまた別に、普段からこのようなエピソード記述を書かれているのでしょうか。どのような形で記録を残されているのでしょうか。

A：普段の支援記録は、ここまで掘り下げては書いていません。ここまで書いてると大変な分量になってしまうので、普段の支援記録はもう少し簡単な内容です。ただその記録の中にも、こんなことがあったと客観的な事実だけでなく、自身が感じたことも交えて書いて欲しいと伝えていきます。今回のようなエピソード記述の時は、まとまったものを、別の機会に書いています。それを、ストックし、利用者ごとにエピソードが増えていくといいと思います。支援記録とは別にまとめています。

### <助言者コメント>

- ・ケアに携わる方々は、ご本人が怒った時に対応に困ってしまいますが、怒ったり理解できない行動があった時でも、言葉にならないメッセージだと受け止めて、その背景に何か本人の意図があるのだろうと探っていくことが大切だと思います。
- ・エピソード記述という言葉ははじめて伺いましたが、そういう関りのプロセスの分析の仕方というか、1回書きだしてみると何かが見えてくるというのもひとつの方法で、とてもおもしろいご提案だと思いましたし、他の場面でも活用できると思いました。



## 特別支援学校介助員を通して学んだこと、感じたこと

社会福祉法人せたがや檜の木会 上町工房

田島 和美

（ 支援のあり方 教育 福祉 ）

### 1. はじめに

12年勤めた、知的障害者就労継続支援B型での支援員を一旦離れ、特別支援学校で2年間介助員として過ごした。今年度再び18歳以上の方と出会い、「子ども」と「大人」なのか、または「教育」と「福祉・社会」といったステージでの違いがあるからなのか、明確でないが関わり方に何か漠然とした違いを感じるがあった。エピソードを用いながら感じた違いや改めて学んだことを振り返る機会とする。

### 2. 支援員としてこれまで大事にしてきたこと

(1) 現象に振りまわされない

自分がこの仕事に就き、一番最初に、毎日のように教えていただいたこと。

(2) 肯定的な解釈のもとにたつ

今の姿を困った姿、ではなく肯定的に受けとめる。

(3) その方の全体像を描く

その方が10年後、20年後にどうなりたいか、どうあってほしいか、強みを生かしてその方らしく生きる姿を思っって今の関わり方を考える。

### 3. 介助員になり感じたこと

(1) 介助員としての役割

(2) エピソード・1 「もう6年生だから」

(3) エピソード・2 「遊びながら、できた実感を繰り返し」

(4) 獲得期を支える教員の役割

### 4. 再び支援員となって

(1) 長期的な目標を捉える

(2) エピソード・3 「素直に心からの、楽しかったということば」

－かつてのレポートから今の姿に感じたこと－

(3) 目標は同じ、その過程や考え方に違いがあるのか

### 5. まとめ

個人の思いや感じ方に偏ったレポートにはなったが、その方の成長過程、それぞれのステージでそれぞれの出会いを経験しながら年齢を重ねていく中で、いろいろな支援者がいて当たり前だと思う。しかしその一方で、どう支えることがその方らしい人生になるのか、何を大事にして伝え関わっていくのかは気持ちを同じにしていきたいと感じた。今の自分が福祉の分野とするならば、教育分野、また高齢分野で支援をされている方々と意見交換をする場をどんなふうを持てるか、互いの思いを深めていけるか、を課題としながら、そこで改めて自分の弱さや不得手さに気づきスキルアップにつなげていければと思う。そんなことを考えさせてもらう機会となった。

### <質疑応答>

Q：こういうふうにご自身の心情も含めて、本人とのエピソード記述を分析されることは、定期的にされているのですか。

A：自分はこの法人に入ったときに、このように記録を残していくことを教えられました。法人の中では、実践報告会などで、まとめるようにしています。

### <助言者コメント>

- ・ 日常の業務の中でつくるのは、本当に大変だとは思いますが。かなり意識的にやらないと、ご自身の心情も含めた本当のソーシャルワークの相互作用というか 利用者との関係の中でのソーシャルワーク理論で言えば新しいナラティブ、新しい物語をつくっていくみたいなどの、エビデンス、証拠を外部に示すということはなかなかできないのではないかと思います。そういうことを定期的につくられているというのは、大変いい試みだと思いました。またできれば多職種連携の時代ですので、これからはご自身の法人だけでなく、他の職場の多職種の方々ともできるとよいのですが、これには多くの時間と手間がかかるという課題があると思います。
- ・ 実は分野別縦割りというのは、区役所にも正直ありまして、やはり区民の方々にとっては、障害の分野、高齢の分野、こどもの分野など分かれているわけではない、地域に住らしている区民の皆さまはそれぞれ分断しているわけではない、ひとつの世界にいろんな人が住んでいるので世界丸ごと支援していかなければならない。だから、横のつながりをもって皆で相談していく、チームで関わっていくことがとても大事だと思います。今回の発表で共感しながら聞かせていただきました。



## 児童養護施設における多職種連携について

－医師、看護、心理職の働きから－

児童養護施設 福音寮

○岡田 真未子

( 児童養護施設 多職種連携 )

### 1. はじめに

児童養護施設では、さまざまな理由で家庭での養育が困難になった子どもたちが生活している。こうした子どもたちの日々の安心・安全を保障しながら、心身ともに健やかに育つためには、生活を基盤とした支援に加え、心理職や看護師、医師を含めたチーム養育や多職種連携が求められている。近年では、施設内多職種連携から、施設外、地域における多職種連携へと広がりを見せている。今回は、施設内心理職の立場から、福音寮の多職種連携の実践について報告する。

### 2. 実践内容

- (1) 医師：児童精神科医。月2回ご来寮。月1回ケース会。月1回ホーム訪問、参与観察。年2回研修会実施。
- (2) 看護師：常勤配置。児童の健康管理・指導、児童の受診判断・付添・指導。予防接種管理。服薬管理への指導。感染予防の保健指導。
- (3) 心理職：心理職5名。入所児童の心理療法、ホーム訪問、参与観察。コンサルテーション。医師によるケース会の運営、医師訪問ホーム・研修会調整。
- (4) 地域との連携について  
 医師：医師による施設内研修に地域の養育家庭の方々をお呼びして、職員とともに学びあう機会としている。グループディスカッションでは医師と養育家庭の方々と同じグループで話し合う。  
 看護師：子どもが退所する際に地域の保健師の方へ引継ぎを実施。施設内子育てひろばにおいて、地域で子育てしている保護者の方々とのお話し会を実施。

### 3. 考察と今後の課題

医師のご来寮により、日々の生活支援において、医療的な視点を取り入れた支援が可能になると同時に、日々の支援を客観的に考える機会となっている。看護師の存在により、服薬管理や予防接種管理等の技術の向上、子どもたちの健康的配慮の充実、人為的ミスの予防となっている。心理職による心理療法と生活場面面接、担当保育士および児童指導員とのコンサルテーションは子どもたちのより良い支援や支援の経過確認の一助となる。また、医師のケース会や訪問ホーム、研修会を心理職がコーディネートすることで、医師による医療的な視点が有効となるような配慮が可能となる。

地域との連携については、少しずつ広がりを見せているところである。今後も施設内の子どもの支援の充実を中心に置きながら、地域の中の児童養護施設としてできることを検討し続けていきたい。

### <質疑応答>

Q：施設の集団生活のなかで心理療法をされると伺っていますが、個別的な時間のなかで行うことと、アットホームという視点から行うこと、一般の家庭では生活のなかで面談等はないわけですが、お子さんたちはそれぞれどんなふうに、その時間を捉えているのか教えてください。

A：6人という小さな集団ではありますが生活しておりますので、一對一のゆっくりとした時間のなかで個別に信頼できる心理職と一緒に考える時間をとることは有効だと考えます。また、アットホーム的なところでの面談では、心理職として迷うところもありまして、生活の中においては、街の相談所や病院の外来やカウンセリングとは質が違いますので、その特性を日々迷いながら、明確な答えが出せず、悩みながら行っている状況です。

### <助言者コメント>

- ・今回は心理職と医師と看護師の3職種の働きからの発表でしたが、ここで社会福祉士が相談員としてどう関わっていくか、社会福祉士は、個別性から地域支援につなげるという専門性がありますので、是非この中でどう社会福祉士が位置付けられて、地域支援に関われるか、またいずれ発表いただければと思います。
- ・多職種協働の視点で言いますと、いろんな職種の人がひとりの人に関わっております。職種によってそれぞれがもっている専門性の知識と技術がありますので、1職種では上手くいかないのは当たり前です。だからこそみんなで力を寄せ合ってお互いの強みを出し合って、いい役割を發揮することが非常に大事だと思います。そういう点で、実際に取り組んでくださってことにすごいと思い、発表を聞いておりました。



## 口頭発表 第5分科会 進行役・助言者



久保田 純  
(日本大学文理学部社会福祉学科助教)



高橋 裕子  
(世田谷区砧総合支所 子ども家庭支援課長)

# 分科会（口頭）発表 第6分科会

【5階3509教室】

進行役・助言者

大熊 由紀子（国際医療福祉大学大学院教授）

張 珉榮 （日本大学文理学部社会福祉学科助手）

	発表者	所属	タイトル
1	新井 里奈 宍戸 每名 川又 千弘 古家 雄太郎	日本大学 駒澤大学	せたがやゼミナールの実践
2	新澤 亜希 加藤 貞行	特別養護老人ホーム上北沢ホーム	ケアを受け入れてもらうためのアプローチ ー入浴ケアを通して介護職員が学んだことー
3	小熊 祐慈	おおらか学園	不安を強く抱きやすいAさんとの関わりについて
4	濱野 泰裕 保坂 和美	特別養護老人ホーム上北沢ホーム	食事を継続して召し上がって頂くために ー食事の提供時間ー
5	長谷川 裕和 才木 浩也 中澤 真美 河合 靖子	小規模多機能ホーム三宿	『おかえり、ただいま』と、声が響くホーム ー小規模多機能ホーム三宿での生活ー
6	梶 由香里	上町工房	気になりの多さからトラブルになりやす かったAさんとの関わりと変化
7	村本 真澄	世田谷区介護サービスネットワーク 介護ネット塾 みずたま介護 ST 自由が丘ケアプラン センター	行動 心理症状の改善を多職種で取り組み 在宅生活継続を目指す ー妻と一緒に過ごすためにー

**せたがやゼミナールの実践**

日本大学 駒澤大学

○新井 里奈、宍戸 每名

川又 千弘、古家 雄太郎

(居場所 学生ボランティア)

**1. 目的**

生活困窮者自立相談支援センター「ぷらっとホーム世田谷（以下、ぷらっと）」では、子供の学習支援事業「せたがやゼミナール（以下、せたぜみ）」を区内にて実施している。せたぜみは、ぷらっと職員と学生ボランティア、地域住民と参加する子ども自身もその主体として行われている。日本大学文理学部と駒澤大学では子どもの学習サポートや食育を通じた日常生活習慣の形成はもちろんのこと、子どもにとっての居場所づくりにも力を入れている。

**2. 実践内容**

- (1) 学習ボランティア：学生、地域ボランティアスタッフ
- (2) 参加する子ども：子ども家庭支援センター、スクールソーシャルワーカーなどの紹介、小学生と中学生が参加
- (3) 開催状況：基本的に週1回、午後5時から7時、月1回は食育（食事）の日で、会場ごとの状況により柔軟に運営
- (4) プログラム：寄り添い型の学習支援、トランプやUNOなどのゲーム、食事作りなどを通じた学生や大人との交流

**3. 結果**

子どもたちは参加回数を重ねていくにつれて活動場所での役割意識を持てるようになり、社交性が身に付くようになり、また、年上の子どもが年下の子どもの面倒を見るようになるなどの成長が見受けられる。また、学習支援を行っていることから机に向かう習慣ができ、食育を通して食べたことのない食材を食べてみるようになるなどの成長も見られる。

**4. 考察、今後の課題**

子どもたちはみんな同じではない。せたがやゼミナールにも様々な子どもたちが参加しており、全員を同じ子どもとして一括りに接するのではなく、それぞれ異なる考え方や性格をもった一個人として接することが求められる。課題に関しては次の三点に及ぶ。学生ボランティア自身の課題・子供の課題・運営に関する課題。

### <質疑応答>

Q：集まってくる子どもの数を教えてください。

A：会場によって違いますが、登録している子どもは10人前後で、継続してきてくれている子どもは4~5人です。

Q：会場によって違うとは思いますが、今までうまく子どもと接することができて、その子どもが著しく成長したというか、みなさんの関わりによって成功した例がありましたら教えてください。

A：個人の見解としては、子どもは急に変わるものではなくて、だんだんと活動を積み重ねていくことで変化していくものだと思います。最初はなかなか何も話してくれなかった子どもが、こちらから話していくことで、だんだん自分から積極的に話してくれるようになるということが多いです。私の拠点では、口の悪かった子に何か月も注意し続けたら、他の子どもたちからも注意するようになって、子ども同士で言いあえる空間というか、関係性ができていると感じたことがあります。年齢の下の子が入ってきて、小学6年生の子が、こちらから言わなくても自分から面倒をみるようになったということがあります。

Q：子どもたちは、だれかに行きなさいと言われて来ているのですか。

A：子どもたちが自発的に来ているという印象ですが、親が連れてくることもあります。もともとどなたかの家だった場所を区が借りて、そこを拠点として活動しています。お茶とお菓子が出ます。

Q：新しく入る子どもと来なくなる子どもの割合は、どのくらいですか。

A：割合は半々位かなと思います。来なくなったきっかけはばらばらで、突然音信不通になったり、親の都合や引っ越しなどで来なくなったり、高校に進学して忙しくなって来れなくなったりなどで、一概には言えません。

### <助言者コメント>

- ・今回の報告は、生活困窮者の自立支援の一環として、学習支援の学生ボランティア活動の報告でした。学生という立場から支援くださることが、とても大きなメリットになると思います。学生であることは、子どもたちと同じ立場にいる人でもあり、子どもたちが相談しやすい人であり、子どもの気持ちを理解しやすい、共感を得やすいというメリットがあると思います。様々な観点から子どもたちをサポートできると思います。しかし、課題にもあげられていましたが、判断に迷うことだったり、親のニーズと子どものニーズのずれから問題が生じることもあります。あくまでも学生のボランティア活動ですので、社協の職員につなげたり協力することで、解決できたらいい活動になるのではないかと思います。大変貴重な実践ですので、是非続けていっていただきたいと思います。



## ケアを受け入れてもらうためのアプローチ

### —入浴ケアを通して介護職員が学んだこと—

世田谷区社会福祉事業団 特別養護老人ホーム上北沢ホーム

○新澤 亜希、加藤 貞行

( 認知症ケア その人らしく ケアの統一 )

#### 1. 問題と目的

入浴が大好きなAさん（アルツハイマー型認知症、脳梗塞後遺症）は、湯船に浸かると10分以上経過しても、出浴を促す声掛けに応じず浴槽から出ようとしない。介護職員が無理に出浴させようとする、Aさんは手足を浴槽に貼りつかせて出浴に強く抵抗する。入浴担当になった職員がそれぞれのやり方でAさんの出浴に奮闘していた。出浴はAさんにとって強要の場となり表情も険しくなる。どのようなアプローチを行えば、気持ち良く出浴してもらえるのか。Aさんの気持ちに寄り添い、大好きな入浴を最後まで楽しく終えるケアを見つける事を目的とする。

#### 2. 実践内容

2019年6月初旬から8月末日までの入浴日を対象に実践する。入浴は1週間に2回ある。6月初旬から8月初旬までのAさんの入浴について、介護職員がどのようなケアを実践したのか、項目を決め入浴の状況を記録した。その記録から、入浴担当になった介護職員がそれぞれまったく違うやり方を行っている事が明らかになった。Aさんが納得する明確なコミュニケーションが図られていると自発的に浴槽から出るので、出浴にかかる時間が短くなる。短時間で出浴した状況を参考に手法を定めて、Aさんが気持ち良く出浴できる環境を整え、入浴ケアの統一を図る。

#### 3. 結果

以前はAさんを出浴させる介護職員の気持ちが優先になり、Aさんが納得するまで待つ事ができない時もあった。この取り組みにより入浴中のAさんの表情を観察し、声掛けのタイミングや浴室の環境に配慮するようになる。複数の職員の意見が集まり新たな発見がある等、介護職員のケアの質の向上につながった。また、Aさんが自発的に浴槽から出てくる事で、労働負担も軽減された。

#### 4. 今後の課題

入浴ケアに限らず、介護職員によって差がない均一なサービスを提供できるよう、ケアの統一が課題であると考えます。そのためには、介護職員同士が十分に話し合い、成功体験や失敗体験の情報を互いに共有し、ケアに対する共通認識を持つ事が必要である。また、多職種からの専門的視点を交え、様々な気付きを積み上げていく事も大切である。ケアの統一ができれば、ご利用者が混乱する機会が減り安心してその人らしい生活を送ることができ、ケアの質の向上につながるのではないのでしょうか。

今回の取り組みで学んだ事を様々な場面で活かし、今後もご利用者の視点に立ち気持ちに寄り添ったケアを介護職員の中で統一できるよう努めていく。

### <質疑応答>

Q：Aさん以外に対しても、今回のような方法で気づきが広がりましたか。

A：入浴介助に限らずに口腔ケア等についても、どうアプローチしたらいいか、以前より話し合うようになりました。

Q：ケアの方法の統一を図ることは、とても重要なことだと思います。項目ごとにやり方を決めて統一を図ったにもかかわらず、なぜまちまちだったのでしょうか。まちまちのあとは、もう一回なにかアプローチをやったのでしょうか。そこを教えて欲しいです。

A：今回のケースについては、施設の改修工事に伴い浴槽自体が変わり、これまではひのきの浴槽を使っていましたが、リフトのチェアに替わってしまったので、試行錯誤しながらやりました。一度決めたことができなかつたら、できなかつた理由があると思うので、その理由を聞いてもう一度みんなで話し合い、方法を具体的にします。例えば、便秘傾向にある方に、入浴後に水分をたくさん飲んでいただく決めても、水分を出すことを忘れてしまう職員がいて、忘れない為に入浴後の2杯目のコップを事前に作っておくなど、新しい方法を具体的にするなど、みんなで話し合っただけで統一していくようにしています。

Q：このようにお風呂の時間が長い人は、他にもいましたか。

A：お風呂から出ようと言ってからも20分以上かかり、ここまで時間が長い方はいませんでした。

### <意見・感想>

- ・この方は、何分入ったら満足してお風呂から出たいというふうになるのでしょうか。ご本人に好きなだけ入ってもらって、自分から出たいというのでしょうか、今までそのようにしたことはありますか。介護するこちら側が、10分って決めるのではなくて、本人の希望を聞いてやられても良かったかなと思いました。

### <助言者コメント>

- ・他のケースも分析してみたら、どうかと興味深く聞かせてもらいました。

Aさんからの家族から意見を聞いたり、人によっては5分で出てくる人もありますし、長く入っておられる方もありますので、認知症を発症する前の習慣も影響するのではないかと思います。

ケアの統一ということですが、同じ方法にすることは大切ですが、同じようにしたからといって必ずしも同じ反応をされるとは限らないと思いますし、認知症の方の当日の体調や気持ち、気分も左右すると思いますので、これからも色々工夫しながら頑張っていってほしいと思います。

- ・区民学会らしく、研究のための研究でなく、本当に役に立つ実践研究だったと思います。



**不安を強く抱きやすいAさんとの関わりについて**

社会福祉法人嬉泉 おおらか学園

小熊 祐慈

( 安心感 気持ちの表現方法 これから )

**1. 問題**

入園当初Aさん（自閉症）は周囲の刺激に対して強く不安を抱きやすく、特に本人に向けられた視線や言葉掛けを感じた際、自傷、失禁、物損等の問題行動が見られるため、学園内での生活においても刺激を制限しつつ生活を送る状況が必要不可欠となっていた。しかし、本人が学園生活を送る以上、集団状況は避けられず、また、学園行事や慣れない支援員との接触など、イレギュラーな状況に対しても不安感を強く抱く様子が見られた。そして、Aさんがそのような不快感を持った状況が再びあるのではないかと思いを巡らせた際、Aさんにとって不快刺激が無い状況からでもフラッシュバックのように不安を表現することから、結果的に様々な状況に強く抵抗感や不安感を持つ様子が伺えた。

**2. 方法**

Aさんの不安を感じてしまう特性を考慮し、人的・環境的な整理を行っていった。まず人的配慮として本人の特性を学園職員に周知し不安を感じる場面を回避・軽減していけるよう努めた。また、本人と関わる支援員を固定し関係を築いていくことで、支援員を頼りにやりとりを重ね不安な気持ちを解消していけるよう取り組んだ。そして、環境的な配慮としてパーテーションで仕切りを行いAさん単独で過ごせる空間を作り、Aさんが好きな本や音楽を提供し視覚的・聴覚的な刺激を軽減していけるよう取り組んだ。

**3. 経過**

特定の支援員との間で関係を深めていく中で、問題行動での気持ちの表現方法から言葉や筆談で訴えてくる様子が伺えるようになり、一定の生活を送ってきた中で本人なりの生活の見通しが持てることで、安心感の広がりも見られてきた。また、安心感の広がりから学園行事等でも変化が見られ、Aさんが周囲の人から褒められたり、認めてもらうような言葉掛けを受けてきた経過の中で笑顔を見ることができたり、少ない部分ではあるが状況に沿った行動をとれるようになってきている。

**4. まとめ、今後の課題**

Aさんの安心感を根底に日々の支援を継続してきた中で、入園当初に比べ混乱なく過ごすことができる状況が多く見られてきている。しかし、特定の支援員と関係を築いてきた経過から本人と関わる支援員が現在2名しかおらず、Aさんが不安を表現してきた際の対応に困難な状況がおきてしまっている。そして、Aさんが不快感を募らせた際に支援員がその刺激に対して回避・軽減を促してきたため自律心を育てていくことも課題の一つになっている。

### <質疑応答>

Q：決まった担当支援員を配置するのは、Aさんに限ってですか。他の人もあるのですか。

A：入園したばかりの時は、その方がどのような特徴の方なのか知るために、個別に配慮をおこなっています。この方の場合は、継続して個別な配慮が必要と判断しました。個別な配慮を通してしている方は、他に2人います。これが現状です。

Q：今も1人で担当しているのですか。

A：今は、自分ともう1人の2名体制でやっています。

Q：自分がいるから相手の気持ちが落ち着いてくるとお感じになりますか。

A：私がいると私との関わりのなかで気持ちをおさめているような場面はあり、他の支援員が関わると不安になり問題行動になることがあるので、自信はあるとは言えませんが、そういう様子から安心してくれているのかなと自分なりに感じています。

Q：自分がいて、Aさんが落ち着いていることは嬉しいことですが、自分がいないとだめなのだろうか、支援者としてやり切れない気持ちになりますか。それとも、自信をもってやっぱりおれがなんとかしようと思いますか。

A：本音としては、いろんな人との間で気持ちを解消していければと思いますが、現状では職場の運営上、個別にやっていくことがいいのかと感じます。

Q：課題にもあげられていましたが、担当を特定することが、むしろ母親との関係が難しくなるという意味でしょうか。

A：違う支援員が関わることで、本人が不安定な状態で家に帰ってしまうということがあったので、担当を広げていくことが難しい状況になっています。

### <助言者コメント>

- ・人の行動には、必ず背景があります。自閉症の症状をもつ人の行動は、その人にとっては自分なりの表出であっても、自閉症じゃない人がみると問題だったりするので難しいと思います。その背景を探ることは難しく、理解することは大変だと思いますが、大切にして欲しいと思います。貴重な報告をありがとうございました。



**食事を継続して召し上がって頂くために****－食事の提供時間－**

世田谷区社会福祉事業団 特別養護老人ホーム上北沢ホーム

○濱野 泰裕、保坂 和美

(食事 睡眠)

**1. はじめに**

上北沢ホームに入所されてから約7年間、食べるのが大好きで、安定して食事をよく召し上がっておられた100歳代のご利用者が、朝食時間帯の傾眠によってあまり朝食を召し上がられなくなってしまった。その際、ご利用者の状況に合わせて、どのように職員が対応し、継続的に食事を美味しく召し上がって頂く環境を整えたか、食事摂取量がどのように変化していったか等、報告する。

**2. 対象者と方法**

対象者Aさん、女性、100歳代前半。Aさんを対象として、体力温存と睡眠時間を増やすため、朝食の時間に食事を提供せず、そのままベットにて休んでいただく対応を実施した。また、朝食の代替食品を提供し、食事環境や食事形態、食事時間等を多職種で検討し、ご本人にとって食べやすい時間や環境を整えた上で、食事摂取量を記録し、実施前と実施後の食事摂取量を比較した。

**3. 結果**

朝食時間を食事の時間としてではなく、睡眠時間に充てたことで、離床時間中の傾眠状態が軽減され、他の時間も含めて覚醒時間が多くなり、食事摂取量も安定し、継続して食事を美味しく召し上がって頂ける状態になられた。また、代替食品の進みもよく、通常の食事時間も含め、時々傾眠されておられる時以外は、概ね全量召し上がられており、体重減少も抑えられた。そして、食事時間を調整したことにより、食事の間隔が短くなったにもかかわらず、むせ込みやゴロつき等も軽減された。

**4. まとめ**

今回は、睡眠時間を確保したことによる食事の対策について取り組んだ。施設では、食品衛生上、食事の提供時間が決まっているため、食事時間をご利用者ごとに大きく変更して提供することが難しい対応となる。その中で、朝食時間は睡眠のための時間とし、代替食品へ変更して提供時間をずらし、ご利用者の生活リズムに合わせたことで、食事を継続して美味しく召し上がって頂けるようになったのではないかと考える。また、提供時間がずれたことにより、食事間の時間が短くなり、お腹が満腹で食べられないことや、むせ込みやゴロつき等についても想定していたが、そのような状況はほとんどなく、安定して召し上がって頂けたこともご利用者にとって良かったことと考える。今後もこの対応を継続していくが、ご利用者の食事摂取状況や体重減少等へ注意し、睡眠や傾眠時間に変化があった場合には多職種で検討し、ご利用者にとってより良いケアを目指して実践していきたい。

### <質疑応答>

Q：100歳代の方が、健康に暮らすために取り組んでいる実践活動に感心しました。今回のご本人の写真は、承諾は得ているのでしょうか。

A：事前に、ご家族に承諾を得ています。

Q：食事と睡眠について実践されていますが、他に身体を動かすなどの工夫はしていますか。

A：施設では定期的なクラブ活動がありまして、その活動に参加できる状態の時に参加していただいています。また、日中は傾眠傾向でしたので、不眠の副作用がある薬に対して、医師とご家族とで相談してもらい調整し、現在薬は服用していません。

Q：管理栄養士さんが関わっていたと思いますが、感想を教えてください。

A：利用者は、ご自身でとてもお食事を美味しそうに召し上がってくださっています。本日も発表することを伝えると、笑顔で答えてくださり、とても嬉しく思います。今後も、大切にケアに携わっていきたいと思いますし、末永く美味しく食べていただけるよう工夫していきたいと思います。

Q：むせこみや痰がらみはないのですか。

A：全くなく、ぐっすり寝ておられます。しっかり寝て、11時前に起きて、しっかり食べています。

Q：ゼリーは既製品のものですか。

A：メーカーから出されているものです。今、色々な種類のもので出ておりますので、その人に合ったものを検討し選んでおります。今は2回に分けて召し上がってもらっています。

### <助言者コメント>

- ・この方がもし病院に行ったら、経管栄養になってしまうのだろうとも思いましたし、このホームで暮らすことができ幸せだと思いました。ご自身で食べることができ素晴らしいです。自分の老後も、このようになったら嬉しく思います。素晴らしい発表をありがとうございました。



**『おかえり、ただいま』と、声が響くホーム****—小規模多機能ホーム三宿での生活—**

社会福祉法人こうれいきょう 小規模多機能ホーム三宿

○長谷川 裕和、才木 浩也、中澤 真美、河合 靖子

(自分らしい生活 小規模多機能型サービス 安心した生活)

**1. 目的**

小規模多機能ホーム三宿のサービスによる利用者への関わり方、生活支援、自立支援の実践を通し、利用者が不安を感じず自分らしく生活するには、どのようなことができるのか検討すること、またそれを実践することを目的とした。

**2. 実践内容**

- (1) 小規模多機能のサービス(通い、訪問、泊り)を通し、(自分らしさ、自立支援)についてアセスメントを行い職員間(介護職、看護職、計画作成者等)で検討。
- (2) 検討した内容を本人、家族と共有しサービス内容を実践。
- (3) 実践した内容を職員、本人、家族で評価・再検討し必要に応じて、サービスの変更。
- (4) その人らしさを意識した小規模多機能だからこそ行えるサービスにより、利用者のことをより深く理解し、よりよい関わり方で支援をする。

**3. 結果**

アセスメント、日々のサービスを通し、サービスを柔軟に対応することでその人らしい生活の支援が可能となった。本人だけでなく家族の安心につながることも確認できた。

少人数制だからこそ可能な一人一人に合ったサービス、体調の把握、状態変化の共有により、安心した生活を送る支援が可能となった。

**4. 考察**

小規模多機能型のサービスは他の介護保険サービスに比べ、より利用者の生活に密着したサービスであり、家族との関わりもより深いものであると再確認した。通いだけでなく泊り、訪問もあることで、その人のニーズに合わせた利用が可能であり、よりコミュニケーションを必要とされる。職員と利用者の間では、「お帰り、ただいま」と言い合えるような関係を作ることができた。

日々の状況がつかみやすいことで、翌日のサービスを考え、変更することがデイや訪問介護、ショートステイと違うところであり、切れ目のないサービスで支援することの重要性を再認識できた。

これからも引き続きホームに来ることが楽しい、自宅に訪問に来てくれて安心できる。といった支援を続けていきたい。また自分らしい生活ができていると感じてもらえるように、よりよいサービスの提供を目指していきたい。

### <質疑応答>

Q：急な対応が多々あると思いますが、職員の配置等、運営における課題がありましたら教えてください。

A：職員体制は非常に大変です。夜勤も常勤職員が兼ねているので、シフトをつくる上で苦勞している点があります。もちろん急な泊り対応もあるので、職員はみな努力してくれています。情報の共有が一番大変であり、課題だと思います。発熱したために急な泊りになるとか、通院した後での泊りになった場合は、全員がそろふことは難しく、そういう点で情報の共有に日々苦勞しています。

Q：もし当日、急に泊まりになったら、その日にだれか夜勤を頼んで来てもらうのですか。

A：基本的には夜勤のシフトを作っていますが、急な泊りに関しては、管理者の私と介護リーダーと相談しながら、夜勤をしてくれる職員を探してお願いしています。

Q：私はこの制度ができた時から、小規模多機能ホームを応援しています。このような場で発表する以外に、この小規模多機能ホームの良さを皆さんにわかってもらうには、どのようにされていますか。特に、ケアマネジャーの方々にわかってもらうためにどうしていますか。

A：ケアマネジャーの集まる会に参加させてもらったり、地域のいろんな行事に参加させてもらい、地域の近くに小規模多機能ホームがあつて、何かあつたらいつでも相談にのれる体制があることを皆さまに伝えています。

Q：経営は、大丈夫なのですか。

A：私たちの施設は、社会福祉法人が運営しておりますので、多大な利益を求めているわけではありません。そういう点から理事長、施設長は理解していただいているので、経営はぎりぎりなところでしょうか。

### <助言者コメント>

・今日話されたような事例を、物語と言いますでしょうか、物語が人の心を動かしますし、その良さを広めていって欲しいと思います。頑張ってくださいと思います。



**気になりやすさからトラブルになりやすかったAさんとの関わりと変化**

せたがや檜の木会 上町工房

梶 由香里

(知的障害 否定しない関係)

**1. 事例の概要**

Aさん(20代男性、知的障害 愛の手帳2度、自閉症)

人好きな面が、時にちょっかいを出す関係になり、こじらせることになる。6年前までは、本人ペースの行動が基本で、表出されたマイナスの言動やトラブルに対し、叱る・注意するという関わりであったため、常に大きな声が出て多動、他利用者への他害等のトラブルもエスカレートしやすく、周囲からは『困った人』というイメージで捉えられやすかった。

**2. 課題理解と目標設定**

Aさんの様子の観察から、Aさんのちょっかいは、人との関わりたい気持ちの表現と捉え、「和やかな仲間関係を持つ」ことを長期目標とする。衝動的な言動など、自己コントロールの難しさは、刺激への過敏さ・繊細さがあり、気になることへの反応の多さと捉え、環境を整え、見通しの持てる安心した過ごしが必要なこと。また、プラスの関わりでの積み重ねや得意な作業での力の発揮から、充足感を得ることの大切さを確認し合い、そのためのアプローチについて話し合いを重ねた。

**3. 課題への支援方法**

工房での過ごしに見通しが持てるよう、作業スペースや食事時の座る席、行動範囲、担当職員を定めて刺激の軽減を図り、常に職員の見守りの中で、役割等を通して自律的に行動できる場面を設けてきた。またプラスの関わりができるよう、仲間とのやり取りには職員が間に入り言葉を添えたり、作業の丁寧さを仲間と共に大いに認めたり、上手な関わりには〇を、行き過ぎる場面では代わりの関わり方を具体的に繰り返し伝えるようにしてきた。

**4. 経過**

対応の変化に対し、当初は戸惑いや反発も見られたが、構造化された過ごしの中で徐々に落ち着きが見られてくる。落ち着いた姿は、作業への集中力や周囲との折り合いに繋がり、それらを認めることでの嬉しさや充実感も出てくるようになった。同時に、衝動的・自分本位な行動ではなく、職員を意識した確認や言葉が増え、担当を頼りにして、仲間関係でのマイナス行為の軽減、微笑ましいやり取りの増加がみられる。継続した配慮の中で、作業や役割等、本来の持ち味や力が発揮されてきた。

**5. 考察**

マイナスの言動の大きさから、行動の制止や行動の制限だけになりがちなケースだが、そのマイナスの行為となる心情を探り、本人の思いを叶えるに必要な支援を目指していくことで、少しずつ変化があった。数年の中で担当職員も変わっていったが、ベースとなる目標はぶれないよう引継ぎ、その時々本人に必要な関わりとその担当との関係性の構築がAさんの持ち味発揮に繋がった。環境設定の重要性と、いかにプラスの言動を拾い、多くのプラスを返していけるかの大切さを学んだ。

### <質疑応答>

Q：関わり方を考えるきっかけとして、施設の建て替え、職員の入れ替えがあったようですが、それ以外になかったでしょうか。

A：建て替えの時期に、ほとんどの職員が入れ替わりました。その時期に改めてアセスメントを取り、Aさんの対応や関わり方を見直しました。以前の関わり方は、環境設定がされていない中で本人ペースでの動きになり、関わりが注意や制止になり、本人の思いを受け止める場面が少ないので、思いを通そうと強引な動きが増えたり、他害に繋がったりと支援がうまくいっていなかったことが支援を見直すきっかけになりました。

Q：Aさんは得意技があると聞きましたが、どんな得意技でしょうか。

A：作業に関しましては、誰よりも正確で早く作業されます。できることも多く、プライドをもって取り組んでいると思います。

Q：こういう方のサポートは、誰がされるのですか。

A：グループ制で担当はいますが、この人はどういう方なのか、どういう支援、関りが必要か。日常の過ごし、エピソードを通しての振り返りを職員全体でしています。

Q：他で利用者との関係が密すぎるという事例もありましたが、そういう点でAさんはどうでしょうか。

A：まずは、Aさんにとっては安心できる人と環境設定が必要です。Aさんはとても緊張感の高い方ですので、キーパーソンになる人をつくり、どう環境を整えて安心して過ごしていけるか。気楽さをもって接することができるか考えました。

### <助言者コメント>

- ・自閉症の方へのケアは、一人ひとりへの一品の芸術みたいな仕事だと思います。本当にご苦労様です。



## 行動 心理症状の改善を多職種で取り組み 在宅生活継続を目指す

### － 妻と一緒に過ごすために －

世田谷区介護サービスネットワーク介護ネット塾

東京海上日動ベターライフサービス（株）みずたま介護 ST 自由が丘ケアプランセンター

村本 真澄

（ 行動・心理症状 多職種連携 ）

#### 1. 問題と目的（はじめに）

昨今高齢者が増加する中、老老・認認介護・8050 問題等介護の厳しい現状が社会問題となっている。当事例の夫妻も疾患を抱える 80 代。同居する 50 代の長男は、食事と新聞配達の仕事以外は部屋から出てこない。進行するアルツハイマー型認知症で行動・心理症状がみられる本人と在宅生活をあきらめかけた妻を、どのように支援をすれば在宅生活が継続できるのか考えたい。

#### 2. 方法（対象と手続き）

80 代 男性 要介護 4 アルツハイマー型認知症 妻(80 代)と長男 (50 代) の 3 人暮らし。

本人は介護支援に拒否が強い。妻は抱え込む傾向があり介護負担が過重になっている。認知症は、失認・失行から拒否・興奮・昼夜逆転・異食等の行動・心理症状がみられる。妻以外の家族の介護力がないため、施設入所を検討するも、本人は妻の顔を見ると落ち着く様子から、できる限り在宅生活を継続するために支援を開始した。支援前、半年後、1 年後、2 年後の本人に対する支援内容と、多職種での取り組みの成果と課題について報告する。

#### 3. 結果（経過）

支援前：事業所閉鎖で前担当者より引き継ぐ。通所拒否強く、排便、ヘルニアの状況確認で週 1 回の訪問看護と手すりのサービス。人が来ると机をたたくなどみられる。まず関係性構築から始める。

半年後：以前から地域の食事会に夫妻で出席していたことから、妻同行で通所サービス開始。環境変化による不安から、弄便やフォークを振り回すなどみられるが、徐々に音楽療法時や園児訪問時は喜ぶようになる。その後週 2 回通所可能。歩行が不安定になり、インフルエンザに罹患したことを機に通院から訪問診療に切り替えた。血圧の管理や認知症状の進行など医療と看護の連携を強化する。

1 年後：不明瞭な発語、失禁、昼夜逆転になることが増える。日中の活動量を増やすため通所増回を提案するも、妻は腰痛の悪化も見られ、入所との間で気持ちが揺れ始める。しかし環境不適應を考え、まだ歩けるのであれば現状でやってみたいとの意見で継続となる。

2 年後：異食や集中力の低下から食事量が減少し、ヘルニアの影響で嘔吐もあり、3kg の体重減少がみられた。妻と関係者で情報共有を図り、栄養剤を併用し通所週 3 回に増回する。また同通所内でのショートを定期的に開始し水分と食事摂取の支援を強化した。排泄ケアは訪問介護を週 6 回導入。妻も要支援 1 の認定となり、リハビリを開始しながら、夫妻一緒に在宅生活を継続している。

#### 4. 考察（まとめ、今後の課題）

進行する認知症と行動・心理症状に対して、体調管理の基本ケアを医療とともに多職種で実施することができ、本人の体力を維持する工夫と妻の介護負担軽減を図ることができた。多職種との連携を行う上では情報の共有は不可欠であった。介護負担が軽減された妻は、最後まで自宅で看取れるかもと話すようになった。今後は以前妻が通っていた認知症カフェの再開や、近隣との繋がりができるように地域資源をうまく活用できるように支援していくことが必要であると考えている。

## <質疑応答>

Q：情報共有の方法、ツールを教えてください。

A：多くの職種が関わるようになりましたので、基本的にはケアマネジャーに連絡が入るようにしています。医療と看護、訪問介護も弊社の事業所が入っていますので、毎日情報が入ってきます。デイホームは、最初からずっと通っていた事業所ですので、随時報告が入ります。他に認知症のデイホームにも通っておられますので、私の方から普段の様子をお伝えしています。その施設ではショートステイも使っていますので、その情報がショートステイにも伝わるようになっています。情報の中心はケアマネジャーですが、それぞれの施設ごとに様々なつながりがあります。またヘルパーさんは食事量や排便状況など、ノートに記録をして情報の共有をし、何かあればケアマネジャーに連絡をいただいています。

Q：長男の協力のきっかけは何ですか。家族関係で何か変わったことがあったら教えてください。

A：長男と本人が喧嘩した後に、医師とも相談し、本人の病状ことを伝えるために何日か設けましたが、一切部屋から出て来られませんでした。そこで、長男を介護に引き込むことはどうなのだろうかと考え、長男が出かけられる時にこちらから挨拶をすとか、何かあったら連絡が欲しいと名刺を渡して挨拶をしたり、その辺もあってか徐々に顔見知りの関係ができたかもしれないです。妻から、日曜だけはどうしてもヘルパーさんに入って欲しくないと言われ、そうすると本人は全く動けないこともあって、長男ご自身がやらなければならないと思いいったことも、きっかけの一つではないかと思えます。

Q：いろんな職種をつなげる秘訣のようなものがあれば教えてください。

A：アルツハイマー認知症で水分をとるときにむせこみがあり、家族にきいてもどの位とったかわからなく、体調を崩す時期が夏でした。ですので、関わる事業所に行き情報を集めること、色々なことが分かり、ケアの方法を具体的に相談しました。本人の体調管理をしっかりすることが一番だと思います。あとは、早い情報共有です。状態に応じて、午前中はこうで、午後からはこうだったと、連絡をとることだと思います。

## <助言者コメント>

・8050 問題につながっています。

一人ひとりの歴史を把握されて、きめ細かなお仕事をされてこられてきたと思います。皆さんもとても参考になったと思います。



## 口頭発表 第6分科会 進行役・助言者



大熊 由紀子  
(国際医療福祉大学大学院教授)



張 珉榮  
(日本大学文理学部社会福祉学科助手)

# 分科会（口頭）発表 第7分科会

【5階3510教室】

進行役・助言者

鴨澤 小織（日本大学文理学部社会福祉学科助教）

木本 義彦（世田谷区北沢総合支所保健福祉センター所長）

	発表者	所属	タイトル
1	瀧 楓花	日本大学文理学部社会福祉学科	キャンパスライフを通して考える共生社会 －合理的配慮の視点を大切に－
2	露崎 愛	輝水会	スポーツを通じた地域連携作り －ボッチャを例として－
3	金安 博明 山本 学	世田谷区社会福祉協議会	地域共生社会の実現に向けた個別支援と 地域づくりの一体的な展開 －コミュニティソーシャルワーク機能の 発揮を軸とした社協の取り組み－
4	斉藤 由子	上町工房	楽しさをベースに －知的障害のある方の施設での取り組みを 通して－
5	グスティ アユ プトウ メルタ エカ プトウリ ウエニ リハエニ ネシ スラニ シティ ランギ	特別養護老人ホーム等々力の家	「EPAインドネシア介護候補生」その プロセス －インドネシアでの教育、日本での高齢者 ケアについて－
6	中島 勝 宮原 陽子 小杉 かおる 野々村 武志	世田谷区立烏山福祉作業所	音楽でひろがる・音楽でつながる夢のお話
7	山本 学 久保 彩子	世田谷区社会福祉協議会	地域住民が地域に参加するきっかけづくり とその効果 －「地区サポーター制度」拡充の 取り組み－

**キャンパスライフを通して考える共生社会****－合理的配慮の視点を大切に－**

日本大学文理学部 社会福祉学科

瀧 楓花

(共生社会 合理的配慮 キャンパスライフ)

**1. 目的**

一般の小学校に通っていた8歳で発病し視覚障がいがある。中学校高校は盲学校へ進学、点字を習得し、現在は日本大学文理学部で社会福祉を学んでいる。特に児童福祉を専攻しており、社会福祉士資格を取得のために日々勉学に励んでいる。

2006年国連総会において採択された障害者権利条約では障害者の尊厳と権利が保障されており、そこには合理的配慮という考えが盛り込まれた。しかし当事者としては、それが浸透していない現状に直面することが多くある。実体験を通して日本の合理的配慮を考えたい。

**2. 実践内容（体験から）**

周りと同じような大学生活を送るためには苦労が尽きない。入試の前には受験の許可を得る必要があり、合格後は通学できるようになるために歩行練習が必要だった。授業を受けるときには板書やパワーポイント、プリントなどが全て見えないこと、テストは規定の形式・時間では行うことができない。環境の整わない大学では一人でできることがほとんどなく、そのストレスは大きい。「障害者」と一括りにされることで、私個人の意思が尊重されない経験もあった。

**3. 結果**

具体的には配布・表示資料は、全て私が読める形式に変更し事前にデータで提供してもらえよう依頼し、テストは点字で受験できるよう外部の業者も利用しつつ対応してもらっている。学内の設備は必要なものをそろえてもらい、環境整備は行うことができている。日々の困りごとについて相談できる窓口を設置してもらえたことで早急に対応してもらうことができ、理解してくれる人がいるという安心感は大きい。ステレオタイプになってしまう人に対しては、自身のことを伝えることを続けている。

物理的な解決はできても、周りからの理解を得るなど精神的な部分での課題を解決していくことは非常に難しいことだと実感した。

**4. 考察と今後の課題**

私には、厳しい社会の中で生きていくことを考え支援がなくても生きていける力を障害者が身につけなければならないのではないかという思いと、本来一人の人として整った環境を求めることは当たり前のことであるため十分な支援を権利として主張してもいいのではないかという二つの思いがある。これはどちらが正しいということでもなく、人それぞれ感じ方が違うと考えられるため、合理的配慮としてはその選択肢があることがのぞましいと考える。

### <質疑応答>

Q：授業において、こういった工夫が良かったか、もっとこうしてもらえるといいということはある  
ますか、今後の参考にしたいので教えてください。

A：良かった配慮としては、授業で用いるパワーポイントのデータをもらう時に、ページ番号をつけ  
てくださいとお願いしているのですが、私だけでなく他の学生にもつけてくださる先生がいます。  
そうすると授業の中で自然とそのスライド番号を言ってもらえ、私も今どこを見ているかがすぐ  
わかり、私と他の学生が必要とする情報が一致しているととても授業を受けやすいと感じています。

### <意見・感想>

- ・事前に授業内容をデータにして渡すことは、本人にとってのみでなく、教員側にもメリットがあり  
ます。内容を確認できたり、検討できたりと、決して一方向ではないと感じます。自立するとはど  
ういうことかと考えてみると、自立は決してひとりですることではなく、上手く人に頼ったりとか、  
上手く頼られたりとか、関係性のなかで生きていくことではないでしょうか。自分ひとりでやるこ  
とと捉えなくて良いのではないかと思います。
- ・ご自身の経験と合理的配慮についてお話してもらいましたが、発表者がわがままだと思わせている  
のは、環境がまだ整っていないという大学側の課題があるのだと感じました。
- ・社会福祉協議会も、ご自身の本音の部分や思い・悩みに対して寄り添っていきたいと感じました。

### <助言者コメント>

- ・ひとりで頑張ることには限界があると思うので、みんなで仲間をつくってやっつけようという話も  
ありました。日本は、障害者権利条約に批准してまだ日が浅いこともありながら、発表者は「大学  
は社会に出る準備期間」と頑張っている姿があるのですが、いい社会を一緒につくっていきたく  
いと思います。卒業後も、地域の人たちとつながりでもらってほしいと思いました。率直な意見が聞け  
て、とても有意義な発表でした。
- ・“合理的配慮”というのは、まだよちよち歩きしたばかりで、基本的には障害を経験したことのない  
人間は何をしたらいいのかについてを色々考えています。障害は個人差等や体調の変化により、程  
度や質が変わるので、一度理解したつもりでも何度も共有し話し合う必要があると思います。発表者  
自身が力をつけなければいけないと言われていましたが、一般の学生だって不安がいっぱいなのに、  
いろいろな苦労を経験されてこられたことがわかりました。他にも発達障害やパニック障害や弱い  
部分をもった人間が、何百人もキャンパスライフを過ごし、時間を共に過ごしています。発表者の  
ように論理的に説明してくださる人達が増えていって、多様な人たちと共生できることが必要だ  
と思います。よちよち歩きの合理的配慮を、大学ですすめていく必要があるのかと思いました。



**スポーツを通じた地域連携作り**

－ボッチャを例として－

一般社団法人 輝水会

露崎 愛

( スポーツ 交流 地域連携 )

**1. はじめに**

地域包括ケアの取り組みとして当法人では九品仏地区の他機関と連携し、他世代・他機関での交流を図ることを目的としたスポーツ交流会を行った。誰もが住み慣れた地域で安心して暮らし続けられる地域社会の実現として、地域内での交流は重要であり、スポーツは障害のあるなし関わらず活用できる一つのツールである。九品仏地域には障害者支援施設や高齢者施設が多くある為、障害のある方や高齢者でも行うことのできるボッチャをツールとして交流会を実施した。今回は交流会後に質問紙調査や聞き取り調査を実施し、スポーツ交流会で得られた効果をまとめ、報告する。

**2. 実施内容**

令和元年6月～9月の間、全8回、1回約1～2時間で、九品仏地域の精神障害者施設・高齢者居住施設・高齢者自主活動グループ・地域福祉推進員対象に交流会を実施し、参加総人数は180名であった。実施場所に関しては各施設の環境を使用し、そこに参加者を集って行うという形式を取った。高齢者自主活動グループ及び地域福祉推進員の28名より質問紙調査の回答を得た。また、交流会受け入れ施設職員へ聞き取り調査を実施した。

**3. 結果**

交流会を実施した結果、身体面（身体の動き、頭の動き、スピード、体調、技術）、心理面（楽しい気分になった、意欲が湧いた、頭が冴えた、パワーをもらった、感動した）、社会面（多様性への理解、新しいスポーツの理解、交流の拡大）など、心身の変化が見られた。特に心理面や社会面における変化が大きく、相互理解や交流が促進されていることが分かった。また、全員が今後も交流会の実施を希望し、他の人にも勧めたいと回答した。交流会受け入れ施設職員の聞き取り調査からは、「立ち座り動作が自然と出来良かった」「参加者の表情が良かった」「ボッチャ後に参加者、推進員、スタッフでの会話が弾んだ」等の感想が挙げられた。

**4. まとめ**

質問紙調査での感想において肯定的な意見が多数を占めており、老若男女、障害あるなし関わらず、すべての人が交流を深めるツールとしてボッチャを利用することは有効であると考えられる。しかし、今回の交流会では70代、80代の参加者が多かったため、異なる世代が一緒に交流することによって地域内での相互理解がさらに深まると思われる。今回はスポーツ（ボッチャ）というツールを使用して単発での交流会を複数回行ったが、単発の交流会だけでも十分相互理解に繋げることが可能であることが示唆された。また、今回は地域内だけでなく、各機関での連携も深めることができ、スポーツの持つ可能性は大きいと感じられた。

### <質疑応答>

Q：施設で生活する人と地域の人をつなぐための今後のお考えがあれば聞かせてください。

A：今は施設内でボッチャを行っておりますが、地域の取組みとして住民たちが自主的に集まって、交流会が広がって欲しいと思います。最初から自主化は難しいと思いますので、まずはこちらでサポートし、その後自主化へと繋げていければと思います。

Q：交流会の時間は？

A：だいたい1～2時間程度です。

Q：日本大学でも発達障害の方々と行っていますが、色々な障害や世代の方ともやっていこうと思っておられるのですか。

A：はい。もともとボッチャは、麻痺の強い方に向けて考案されたスポーツですが、健常の方でも楽しめる競技ですし、工夫次第で障害のあるなしに関わらず全員で行うことができます。

Q：九品仏地域ではボッチャが広がっているようですが、九品仏以外の地区でボッチャをする時、道具の貸し出しをしていますか？

A：当法人からの貸し出しはしていません。ネットなどで既存の道具は購入できますが高額です。道具がないときは新聞紙などを代用することはできます。

### <意見・感想>

- ・区ではスポーツ推進課のスポーツ振興会を通して、道具や人の貸し出しを行っています。九品仏地域に関しては、社会福祉協議会、あんしんすこやかセンター、まちづくりセンターの三者連携が密であり、地域の方ともつながっていて、そこに輝水会さんがモデルになる活動をしてくださっています。今後、リハビリ教室も計画しており、障害者の居場所を広めていきたいと思っております。
- ・北沢地域では、新代田地区と松原地区と松沢地区で地区サポーターの交流会を実施しております。そこでもボッチャを活用しております。ボッチャは、区立の小学校にもボッチャの道具が配置されました。そこで地区の社協は、学校からお借りして活動するようになりました。世田谷区全域でもできると思います。

### <助言者コメント>

- ・障害のある方々は、スポーツを行う時は自分が自分らしくいることができると言われています。色々な場所で、いろんな方を巻き込んですすめていって欲しいと思います。
- ・全員が一斉に投げて得点を競うスポーツと聞いて、私もおもしろいスポーツだと思いました。みんなで考えたルールで、その人にあったルールで、仲間と一緒に楽しい時間を過ごせることは、素晴らしいと思いました。是非これからも発展していって欲しいと思います。



## 地域共生社会の実現に向けた個別支援と地域づくりの一体的な展開

### ーコミュニティソーシャルワーク機能の発揮を軸とした社協の取り組みー

世田谷区社会福祉協議会

○金安 博明、山本 学

( コミュニティソーシャルワーク 個別課題の共有 福祉のまちづくり )

#### 1. 発表の目的（はじめに）

コミュニティソーシャルワーク（CSW）機能による地域生活課題の解決に向けた支援は、既存サービスの利活用に留まらず、ナラティブに基づく本人意思の最大限の尊重や専門多職種・地域住民等との連携によるチームアプローチなどを踏まえた総合的な支援である。

また、同じ地域に暮らす住民が課題を共有する事で、“我が事”意識に基づく地域交流の促進や住民活動の増進など、福祉のまちづくりにも繋がるものである。

地域共生社会の実現に向けたCSW機能による個別支援と地域づくりの一体支援の有用性について、実際の事例を交えて発表する。

#### 2. 発表の方法

CSWに関する機能や手法等を概観するとともに、CSW機能を発揮した具体の支援事例を一部紹介し、今後の取組みを展望する。

#### 3. 現状の取り組みと成果

##### (1) CSWの基本的な機能とステップ（概観）

##### (2) 実際の支援事例

###### ○単身男性への支援事例

- ・就労に結びつかないことによる生活困窮、家政管理能力（日常生活スキル）の不足

###### ○日常生活上の課題→本人意思を踏まえた支援

- ・生活スキルの獲得支援と就労支援（多機関協働）

- ・日常的な見守りや交流促進の支援（地域との関係づくり）

###### ○地域住民との協働による日常生活スキルの獲得と交流促進の場づくり

###### ○専門多職種による個別支援と地域住民による本人を支えるプログラム開発（地域支援）

#### 4. 考察（まとめ、今後の課題）

本事例では、専門多職種連携による既存サービスの利活用とともに、生活支援NPO団体の協力による部屋の片付け等生活スキルトレーニングの実施や社協内専門機関等による就労支援、地区社協の地域福祉推進員による見守り訪問等、緩やかなソーシャルサポートネットワークを構築できたとともに、地域住民や社会福祉法人・NPO法人、あんしんすこやかセンター等とともに、“自炊力”の習得と地域交流等の機能を合わせた居場所が出来るなど、本人を支える様々な仕組みの整備が進んだ。

今後は、刻々と変化するニーズを寄り添いの視点により細かく把握しながら、本人の思いや自己実現に向けた支援を地域における連携と協働で継続的に行っていくことが重要であるとともに、住民や支援機関・団体等の支援プラットフォームの形成が不可欠である。

### <質疑応答>

Q：世田谷区はどんな特徴がありますか。

A：世田谷区で言えば、まちづくりセンターとあんしんすこやかセンターと社会福祉協議会との3者連携だと思います。全地区に身近に気楽になんでも相談できる窓口があり、相談対応も速度が増してきたことは大きな意義だと思います。社会福祉協議会内での強みといえば、行政から受託しているぷらっとホーム世田谷（世田谷区生活困窮者自立相談支援センター）、成年後見センターなど、専門的なセクションがあるので、社会福祉協議会内だけで連携をするだけでも、ずいぶん資源の効果があがると思います。

### <助言者コメント>

- ・世田谷区社会福祉協議会だけでなく、社会福祉協議会を通じて様々な地域をコーディネートしたり紹介してもらったり、とても助かっております。また今後の取組みに対して理解をしてくれる区民を増やしていくことも引き続きお願いしたいと思います。



## 楽しさをベースに

### － 知的障害のある方の施設での取り組みを通して －

社会福祉法人せたがや檜の木会 上町工房

斉藤 由子

( 障害理解 発信 主体的な暮らし )

#### 1. はじめに

当所は、18歳以上の知的障害のある方の就労支援継続B型事業所として、①働くこと②身体づくり③仲間づくり④余暇支援を4つの柱として日々のプログラムを組み立て、主体性が発揮しやすい場面を意図して盛り込みながら、自分らしく力を発揮し、仲間と共に充実した生活を送れることを目指している。

これらの目標や試みも5年を経て少しずつ定着、自分たちの持ち味を発揮し、がんばる姿、楽しむ姿が見られている。そのような利用者の、当たり前前に生き活きとした姿を、より多くの方に知っていただき理解に繋げていけるよう、これまでの取り組みをまとめ、これから必要な視点について考察したい。

#### 2. 主体性の発揮を目指した取り組み

(1) 朝の体操・発表の時間：言葉のある方もない方も、毎日同じ内容の方も違う方も、正解や間違い、上手下手は関係なく、その時々、その方の関心のある事柄をフォローしながら、皆の前で一人ずつ『発表』したり、体を動かしたりしようというプログラム。何をしてもOK、皆で盛り上げ、皆で拍手し合うという和やかさ、安心感から、一人一人のユニークさや、『私もやってみたい』という意欲が引き出された。

(2) 誕生会：毎月、司会進行や様々な役割を設け、ゲームや歌を楽しみ、その月の誕生者を祝うプログラム。同じゲーム、同じ歌を定番として何年も繰り返し行うことで、見通しが持てる『自分たちの会』として、皆が期待を持ち、楽しみに参加できる会、作業では見られない姿を発見できる機会となっている。

(3) グランサマーフェス：(1)(2)の積み重ねから生まれた夏まつり。利用者の皆さんがホストとなって、いつも行っている得意の歌やダンス、絵等で、地域のお仲間やお客様をお迎えし、一緒に楽しみ、生き活きとした姿を知ってもらおうという意図で開催。いつものお仲間だけでなく、たくさんの方に認めてもらうという嬉しさが「やった！」という充実感や、「楽しかったー」という余韻の残るイベントとなる。

#### 3. 利用者の皆さんの変化～周囲の変化

始めた当初は、「やらない」「イヤ」と遠慮や、拒否したりする方もいた自己表現も、今では皆が楽しみに行う姿がある。仲間の出番にも同じように期待をし、笑い合い、拍手し合う毎日が定着し、さらに「こんなことしたい」が、誕生会で膨らんできた。そんな折、「うちもお祭りをしたい」という言葉や、実習生や見学者から「元気をもらえる」という言葉が聞かれ出す。そうして開始したサマーフェスも、徐々に主体的な姿が増え、そんな姿に私たち自身も触発され、「より多くの人に伝えたい、発信しなければ」という思いから、外への働きかけが増した。皆さんならではの表現や、ユニークさ、懸命さ、素敵さをきちんと伝え、感じていただくことで、応援してくださる方も増え、出会いが広がってきている。

#### 4. まとめ

障害がある方は、“困っている人・大変な人”“養護される人”という側面だけが、一般的なイメージ、全体像になってはいないだろうか。多くの配慮が必要なことも事実だが、当たり前前に一人ひとり様々な思いを持って暮らしていることは障害がない方と同じである。安心できる関係や環境の中、楽しさをベースに、力や主体性を引き出し、その“楽しむ姿や笑顔”を発信していくことが、障害理解へ繋げる一つの大きなきっかけになることに気づかされた。身近にいる私たちがまず、利用者の思いや持ち味を引き出せる関係にあること、外にきちんと発信する感性を磨いていくことの重要性にも気づかされた。

## <質疑応答>

Q：地域に啓発する意味でも、利用者の主体性を重んじ、丁寧に取組んでいることがわかりました。しかし現実に枠組みがない中で、困惑したりどうしたらいいかわからない利用者もいらっしゃると思いますが、支援者の皆さまはどのように捉えて、サポートされたのかについてお聞かせいただけますか。

A：利用者は、変化にとても弱かったり、いつもと違う状況に動揺したり困惑される方々が多いのが事実です。これは5年を通しての取り組みで、最初からみんなが参加できていたわけではありません。活動に入れない人、できない人もいていい、失敗しても大声を出してもいい、どんなことをしても皆が拍手をしたり笑ってくれたりすることを実感してもらえたらいいと考え、まずは職員自身が楽しいと思えるようなことを率先してやってみせ取組んできました。和やかさの演出のなか、無理なく少しずつ、一人ひとりの特性を活かしていくなかで、利用者もなんとなく楽しく思えるようになって、そしてみんなの中にも大丈夫と思えるようになったのだと思います。分科会テーマは、「多様性をみとめあう共生社会づくり」で、他にもみんな違ってそれでいいという意見があったと思います。一番身近な支援者が楽しそうにやって、利用者の力を引き出していく、それが外に発信されて、プラスのイメージで障害の理解につながっていく、大きな流れになっていけばいいなと思います。

Q：支援者の皆さんは、最初からこのような目的をもってやってこられたのか、それとも日々の活動実践の中から広がってきたのか、教えてください。

A：初めて上町工房に来たときは、このような活動は少なかったように思います。私はこれまでの経験から利用者の主体性の発揮という視点に魅力を感じ、職員の方へ提案し続けました。最初はなかなか理解してもらえませんでした。利用者の笑顔が多くなる、今までしゃべったこととない人が話してくるなど、利用者が変わっていくことで周囲の協力も得られるようになり、現在のよう取り組みにつながっています。

## <助言者コメント>

- ・当事者がもつアート性を、あまりにも凡人の私たちが理解できなかつたり、弱いのだと感じており、私たちが感性を研ぎ澄ませて、一緒に人生を楽しめるようになれるといいと思いました。とても素晴らしい取り組みだと思いましたので、是非これからも続けていって欲しいと思います。



## 「EPAインドネシア介護候補生」そのプロセス ーインドネシアでの教育、日本での高齢者ケアについてー

社会福祉法人奉優会 特別養護老人ホーム等々力の家

○ガスティアプトラ マタ 功 プトラ、ウエ ワユ、ネ スニ シティ ラギ

(外国人介護職 共生社会 高齢者ケア)

### 1. 問題と目的（はじめに）

社会福祉法人奉優会 特別養護老人ホーム等々力の家では、2015年12月にEPAインドネシア介護候補生5名の受入れを開始した。翌2016年度には4名、2017年度には5名のEPA候補生を新たに受け入れ、現在も介護職として活躍している。母国のインドネシアを離れ、ここ東京世田谷の地で生活をしながら、特別養護老人ホームにて日本の高齢者介護を学び、日本の国家資格である「介護福祉士」の資格取得をめざして日々勉強に励んでいる。今回、EPA（経済連携協定）制度の概要、来日前母国インドネシアで受けた教育、そして来日後等々力の家での仕事と勉強の両立など、EPA介護インドネシア候補生のこれまでのプロセスについて発表する。

### 2. 方法（対象と手続き）

2016年度生として来日したEPAインドネシア介護候補生により、EPA制度とはどのようなものか、来日前にインドネシアで受けてきた教育やインドネシアでの看護師としての職務経験、EPA候補生として選考されるまでのプロセスについて詳しく説明する。さらに、来日後6か月に渡る研修内容や日本の介護福祉施設での高齢者ケアへのやりがいやとまどい、インドネシアと日本の違いについてもまとめた。

### 3. 結果（経過）

EPA候補生の大部分はインドネシアにて約1～2年間病院で看護師として働いた経験をもつ。また、EPA候補生として選考されるまでには、書類選考、看護師スキルテスト、インタビュー、健康診断などさまざまな工程を経て、マッチングに至り、さらにインドネシアで6か月間の日本語研修、来日後も6か月間の日本語研修と日本語スキルテストが行われてから、各事業所へ配属となる。

配属後も、看護師としての仕事と日本の介護職としての仕事の違い、ケア記録の書き方などに困ることもあるが、仕事の面だけでなく、生活面でも先輩職員や日本人職員と積極的に交流を図り、その都度、課題や悩みを解決し、お互いの文化を理解することができ、日本語能力の向上にもつながった。

### 4. 考察（まとめ、今後の課題）

等々力の家では、EPA候補生を受け入れてから今年で4年目となる。言葉についてはまだ伝えきれないものの存在もあり課題も残るが、業務については成長と共に積み上げることができた。今後もお互いの国の文化や考え方について理解を深め、多様性を認めあい、仕事でもそれぞれの能力を発揮して活躍することで、共生社会の実現につながるのではないかと考える。

### <質疑応答>

Q：「もっとこういうふうにしてもらえたら、介護がやりやすい」とか、「もっとこうしてもらえていたら、早く覚えられた」など、本音のところで感じるところがあったら教えてください。

A：心配なことは、国家試験のことです。設問は、専門の言葉がありますので、ひらがなをふってもらっても難しく心配です。生活について最初は困ったけれど、等々力の家の方々に助けられ、今は安心してしています。今は、試験のことだけが心配です。

Q：では、国家試験に向けての勉強の機会がもっとあれば良いと思いますか。

A：そう思います。あと、日本の法律についても知りたいです。

### <意見・感想>

- ・特別養護老人ホームに勤務しています。以前、フィリピンとベトナムの方と一緒に仕事したことがありました。2人とも愛情がいっぱいでとても心を尽くす方々で、多くの学びがありました。きっと皆さんも、日本人にない気遣いがあるのだと思います。日本人以外の方と働いてみて、お互いにいい影響があると思いました。
- ・私は、外国の方に来てもらって介護を行うEPAの協定を審議する担当をしておりました。当初、外国の方に来てもらって介護してもらうのは問題が多いのではないかと指摘され、日本では反対する人が多く、結構苦労しました。でもこうして3年間頑張っているみなさんの様子を見せていただいて、そして先輩の皆さまがきちんとされている様子をお聞きして、大変うれしく思いました。どうぞ頑張ってください。

### <助言者コメント>

- ・最後に素晴らしいコメントをいただきました。この分科会の最初は、合理的配慮について話し始めましたが、こういう分野にも広がって合理的配慮があって、試験についても何かあるといいと思いました。



**音楽でひろがる・音楽でつながる夢のお話**

世田谷区立烏山福祉作業所

○中島 勝 宮原 陽子 小杉 かおる 野々村 武志

(音楽 つながり 夢)

**1. はじめに**

作業所の利用者、ボランティア、職員で結成したバンド（BBB：ブラック・バード・バンド）の練習などの活動の様子や取り組みについて、演奏活動としてやってきたこと、これからもっとふくらませたい夢のお話を当作業所の利用者を中心に発表します。

**2. BBB としての取り組み**

烏山福祉作業所では、作業時間の他にクラブ活動の時間があり、クラブの一つに音楽クラブがあります。今までの音楽クラブの内容は、利用者みんなが好きなカラオケをすることが多くありました。2017年に白門会さぎそうチャリティーコンサートへの出演の機会をいただき、その時に自分たちの歌と演奏で出演しようということになり、練習を始め、BBB（ブラック・バード・バンド）が誕生しました。

最初は演奏の経験も少なかったこともあり、世界的に活躍をされているパーカッショニストのペッカー氏による『ドラムサークル』の講師として作業所に来ていただき、リズムを体感することの楽しさなどを教えていただきました。作業開始前などの短い時間を利用し練習を重ねています。白門会さぎそうチャリティーコンサートへの出演がはじめの一步となり、現在では年間10回ほど演奏活動を行っています。

**3. さいごに ～BBBの活動からみえてきた夢のお話～**

2019年3月に「とっておきの音楽祭東京世田谷 IN 烏山」が開催され、BBBも出演しました。地元での開催ということもあり、ノベルティグッズの製作やポスターのイラストを担当するなど演奏以外の部分でも利用者が運営の一部を担いました。音楽の好きな人は当日のステージで演奏する、イラストが得意な人は絵を描く、それぞれの強みや得意なことを活かし、音楽祭に携わりました。

そして、2020年4月、「とっておきの音楽祭東京世田谷」が開催されます。障がいのある人もない人も一緒に音楽を楽しむ『心のバリアフリー』を目指す音楽祭です。これからも誰もが分け隔てなく楽しめる音楽のチカラを活かして、自分たちにできることに取り組んでいきます。

<質疑応答>

Q：たくさんの曲を練習されていますが、どうやってみなさん練習したのですか。

A：朝や昼の休憩時間で行っています。曲選びは懐かしい曲だけでなく新しい曲も入れ、イベントなどのお客様にあわせた曲決めをしています。このときの選択肢を広げたいという思いから、曲目の提案をすることもあります。

Q：B B Bは、何人でやっているのですか。

A：53名全員がB B Bのメンバーとして活動しています。作業所の行事の時は、全員がステージにあがるときもあります。イベントごとに参加希望を募って編成をしています。

Q：この可愛いイラストはだれが書かれたのですか。

A：絵はインターネットの画像は勝手には使えないので、こちらでトレースなど活用して作成したものです。

Q：他の職員の協力や理解や体制はどうですか。

A：利用者の社会参加や、表現活動の支援として職員だけでなく、ボランティアの方にも協力していただいています。

<意見・感想>

- ・発表が素敵で素晴らしかった。本当にかっこよく、わくわくしました。「とっておきの音楽祭東京世田谷」でのB B Bの演奏をぜひ聞いてみたいです。

<助言者コメント>

- ・本当に楽しそうだなと思いました。音楽の力は凄いですね。楽しむことをみんなで共有したいです。



## 地域住民が地域に参加するきっかけとその効果

### －「地区サポーター制度」拡充の取り組み－

世田谷区社会福祉協議会

○山本 学、久保 彩子

( 地域共生社会 地域活動人材 活動プログラム )

#### 1. 発表の目的（はじめに）

平成29年2月に「我が事・丸ごと」地域共生社会」の考え方が厚生労働省より発出されて以来、世田谷区内においても、地域で共に生きる社会の実現に向けた様々な取り組みが進んでいる。世田谷区社会福祉協議会（以下、世田谷区社協）では、区より地域資源開発事業を受託し、地区（まちづくりセンター管内）を基盤とした地域包括ケアシステムの深化に向け、生活支援体制整備・地域力強化推進の視点を踏まえた取り組みを進めている。そのような中、全国的にも活動の担い手不足が指摘されている今日、地域共生社会の実現には、区民を主体とした地域活動人材の確保と育成が必要であり、“我が事”意識に基づく人材確保の対策が急務となっている。今発表では、世田谷区社協による地域活動人材の確保と育成の取組みや具体的な地域活動へのマッチングなど実践成果を発表し、今後の地域活動人材の機能や可能性等に関して共有する場とする。

#### 2. 発表の方法

世田谷区社協による地区サポーター制度を概観するとともに、実際の活動に繋がった事例など、地域活動人材の拡充に向けた実践支援の一端を発表する。その上で、地域活動人材の拡充における現状の課題や災害時における地区サポーターの活動等を提起するとともに、今後の取り組みを展望する。

#### 3. 現状の取り組みと成果

令和元年9月末日現在、地区サポーターは全区で1000名の方々が登録しており、延べ1448件の活動マッチングが行なわれている。活動内容は、町会・自治会イベントの応援や、外出機会の少ない高齢者等を対象とした集いの場のスタッフ応援、小・中学生を対象とした福祉体験学習の指導補助など多岐にわたっている。また、町会のイベント応援活動を通じて地域とつながり、町会に加入、役員就任を要請された事例など、住民同士のつながりが広がっている。

なお、登録者1000名のうち、157名が「災害福祉サポーター」として登録しており、大規模災害発災時の安否確認や避難誘導、ニーズ把握などに取り組む事となっている。

#### 4. 考察（まとめ、今後の課題）

地区サポーター制度は、ボランティア活動の基本である無償性・自発性等の原則はもとより、身近な地区における区民同士の支えあいの理念（現地性）を基盤とした区民参加の方法である。

この点、より多くの地区サポーターが地域住民、とりわけ地域生活課題を抱える方へのサポートに繋がる支援プログラムを開発し、個別具体的な内容によるマッチングが重要であり、地域活動人材（区民）の活動は、地域共生社会の実現において不可欠である。今後は、地区サポーター登録数の地区別偏在の解消、看護師等有資格者による専門ボランティアの確立、活動参加から活動主体への支援などに留意した人材の確保と育成を強化し、地域共生社会の実現に向けた重要な担い手と位置づけ、取り組みを強化して行く必要がある。

### <質疑応答>

Q：先ほどの意見ですと、「やりたい人集まれ」みたいな感じに聞こえたのですが、やりたいと思ってもなかなか自分で手をあげることのできない人もいると思うのですが、何か背中を押すというか無理やりでも手を引っ張って引き出すとか、そんなアプローチなどは考えたことはありますか。

A：無理やり引っ張ることはしませんが、この地域サポーター制度があることで事前に登録していただき、活動について説明しておくことができます。頼まれたら必ずやらなければならないわけではないので、その方のお気持ちですとか、その方にあった活動を紹介し、そういう方たちが集ってどういう活動ができるか、寄り添いながら一緒に考えていければいいと考えます。

Q：地域サポーターは、60歳以上や定年後の人たちが多いということでしたが、私は職場が世田谷区で自宅は杉並区でして、例えば日中に災害が起きた時には世田谷で活動するなど、どちらの区でやってもいいと思っています。もっといろんな世代の方を巻き込むように、時間など柔軟に活動できるようにしてはどうかと思いました。どうでしょうか。

A：「地区サポーター制度」の登録は細かな条件等はありません。区内で働いておられる方々や企業、学生からも登録いただいています。ただ実際の活動につなげる場合は、時間的な制限も一部でくるので、つなぎきれていないところもあると思います。

### <意見・感想>

・この取組みは、非常に必要な取組みであって、もっと有効に使っていければ良いと思います。ひとつ懸念は、「地区サポーター制度」は社会福祉協議会しか行うことができない活動で、人が集まって来る活動だけに、1つ目は社会福祉協議会がまる抱えしてやってもらっては困る、地域にはたくさん団体があるので、やりたいという人とサービスを提供している団体と連携し、道筋をつけてもらいたい。間口としてやってもらいたいと思います。2つ目は、専門性のある方々、そこも組織化してもらいたいです。集まって来てくれた方々に、ただリストをつくっておいて、何かの時にそれを使う、それで終わりにするのは絶対にやめて欲しいです。主体的に動くことを考えてもらいたい。その地域課題を、社会福祉協議会の職員と地域のサポーターの方とが一緒になって考えるという状況をつくってもらいたいと思います。

### <助言者コメント>

・災害時の支援サポートにおいても大事な事業になっておりますので、今後頑張ってくださいと思います。



## 口頭発表 第7分科会 進行役・助言者



鴨澤 小織  
(日本大学文理学部社会福祉学科助教)



木本 義彦  
(世田谷区北沢総合支所保健福祉センター所長)

# ワークショップ



# 学生交流会 ワークショップ

時間：14:50～16:00

会場：5階3501教室

## テーマ『学生でつくる住み続けたい世田谷<sup>ま</sup>ち<sup>ち</sup>』

ファシリテーター	手塚 由美 (一般社団法人 輝水会 代表理事)
当事者	三嶋 完治
グループリーダー	日本大学文理学部社会福祉学科卒業生 三村 祐介 安藤 伸也 富沢 優 土井 祥弘 浅賀 崇
助言者	長谷川 幹 (せたがや福祉区民学会会長)
参加者	46名

「世田谷 (まち) の魅力って何? 強みって何?」

「だれもが住みやすいまちをつくるために、わたしたちにできることは何?」

「障害があっても、高齢になっても住み続けたいまちってどんなまち?」

三嶋さんのお話をお聞きする

ポッチャ体験

グループワーク

発表・講評



### ●三嶋 完治さんのお話 (要旨)

- ・人との「出会い」を経て「きっかけ」(励み) に変わり、「新しい自分」(目標・役割) を発見した。動機づけは、心の持ちよう。「支える他者」とともにいることで、立ち直ることができた。
- ・支援者に大切な役割は「対等関係」をもとに、安心感を与え「その気にさせること」が大事。
- ・障害(者) を考えるとき、「互いに」住みやすい環境をどう創るか。国民皆「障害者予備群」で、誰もが自分のこととし、互いに「学び」、「体験」する姿勢が大切。
- ・協働(みんな) の前提は、互いに「対等」あること。尊厳とは、全ての個人が互いに人として尊重されること。一方的に支援を受けるだけでなく、自分も誰かの役に立っている実感が必要。双方で考える対等関係を「共に成長」(共生)。『互いに増幅し協働する仕組み』と考える。
- ・「人」を大切にすると、自分にも相手にも率直、誠実で、対等関係を維持し、相手への“敬意”を表すことで、「人間関係」(信頼関係) が生まれる。
- ・障害者を特別扱いにするのは違う。一人の人間として接してほしいと思う。



### ●グループワークの声 参加者：東京都市大学・昭和女子大学・日本体育大学・東京医療保健大学、東京農業大学・日本大学文理学部の皆さん、当事者

どうしたら障害者の気持ちを理解してもらえるか？と思っていたが、当事者が参加しないのは、対等といえるのか？との声に障害がある者も考えさせられた。

座学では学べないことが、当事者と関わることで学ぶことができる。一方的に対応するのではなく、「何かお困りではありませんか」との声かけも大事ということが分かった。

世田谷区の強みは、小さな公園が多く、福祉に熱心、畑もあるので、それらをもっと生かせれば良いと思う。誰もが近くに学校・職場以外の知合いがいれば良い。学校・職場以外の知合いとなるには、行動を起こさないと難しい。

世田谷区は交通の便もよく、人と人が対等に話せるまちだと思う。エレベーターも地域に整備され、ボランティアも多い。今の取組みを発展することで、住みやすいまちになると思う。感謝と思いやりが大事だと思った。

### ●助言者のコメント

- ・障害のある人の思いは、関りがないとわからない。お互いを知るために、交流する場が増えるといい。障害者の良いところに注目し、能力にあった役割が持てるとよい。そのためにスポーツ、芸術が活用できます。まず、話をするのが大事。話を聞くことで変わります。
- ・生の声、話は深みがあり、理解が違うといつも思います。相手への敬意を持つことが大切です。

休憩・交流スペース「ほっとスペース」・区内障害者施設手作り品販売



# 全体会Ⅱ



## 大会総括

司会／よろしいでしょうか。

ただいまから全体会Ⅱを開会いたします。

全体をなごやかに振り返ろうというコンセプトです。しかしながら、司会進行は日本大学社会福祉学科きっての強面、白川が担当いたします。引かないようお願いいたします。

まずは、ご参加いただきました皆様、発表者、進行役・助言者の皆様、また学生ボランティア、スタッフの皆様、お疲れさまです。全体会Ⅱにおきましても、引き続き記録と広報に使用するため、写真とビデオの撮影を行います。これらの使用について、不都合のある方は、恐れ入りますが、スタッフにお申し出ください。



本日は、基調講演に続き、全体で48の口頭発表、8つのポスター発表、学生交流会ワークショップが行われました。大会の締めくくりとして、この全体会Ⅱでは、それらの会場の様子について、皆様からのご感想をお聞きしたいと思います。

ではまず、口頭発表の方、発表をされてのご感想をお伺いします。

第1分科会の松原あんしんすこやかセンターの方から、お願いします。挙手を



お願いします。マイクがまいます。

【松原あんしんすこやかセンター  
国枝様】

国枝です。20年以上、世田谷区で福祉に従事していますが、初めて発表しました。準備も大変で、もう嫌だと実は思っていました。

今日、松原地区の地域活動について、そこから見えてきた松原地区の高齢者のいきいきと暮らせる条件について話しました。地域活動の内容が、諏訪先生の基調講演であった話にぴったり合うものでした。そして、地域活動の担い手の方たちが来て、発表を聞いて、私たちの活動は、意味があったんだ、これからもやっていく元気が出たと言ってくれました。こうやって、まとめて発表した意義があったと感じました。ありがとうございました。

司会／ありがとうございました。

長年のご活動の中で初めての発表とのこと。今後の活動の力になるような発表ということで、主催者側としてもよかったと思います。ありがとうございました。

それでは、口頭発表とポスター発表には進行役・助言者が17名いました。進行役・助言者の皆様からも感想をいただきたいと思います。分科会の口頭発表で、第6分科会、国際医療福祉大学大学院の大熊先生、お願いします。

【国際医療福祉大学大学院 大熊様】



第1から順繰りに来るのかと油断していて、びっくりしています。もともとが医学記者だったので、医学関係の学会にはよく出ていたのですが、今日、拝見して、福祉の方の発表はすごいと思いました。お一人お一人の人生、歴史を踏まえているということ、福祉であり

ながら、体のほうについても配慮をされる発表が大変多く、私のところでは、認知症、自閉症の両方でした。一見違うような2つのカテゴリーのものが、その人の人生をとことん推理していくというところで似通っていると思いました。具体的には100歳になって、傾眠しようとうとしてしまう人に、何とかして口から食べてもらおうと努力し、それに見事に成功されて、最後に100歳のお年寄りが、スプーンで食べているうれしそうな顔を見てすごいなと思いました。参加させていただいて、ありがとうございました。

司会／ありがとうございました。

仕組みとして、どうしていくかも、もちろんあるかもしれませんが。ご感想でいただいたとおり、最終的には1人1人に、どう向き合っていくかに行き着く部分もあると思います。

そういう点で非常に充実した発表があったのだと思います。

ありがとうございました。

続いて、学生交流ワークショップです。

「学生でつくる住み続けたい世田谷」。障害当事者の方のお話をお伺いし、会員大学の学生さんたちが46名参加し、活発な意見交換を行っています。

では、ワークショップに参加いただいた、当事者の方として、三嶋様から一言、頂戴できますでしょうか。よろしくお願いいたします。

【ワークショップ参加者 三嶋様】



今日は初めて参加させていただきました。

私は40年間、法律畑にいて、14年前に発症しました。法律をかじった者から見ると、何かおかしい、「障害者って何?」とっていました。2年前に、だったら福祉学にもう1度入り直して勉強しよう

と思い、この春卒業しました。

分かったことは、やはり対等関係。障害者・健常者の分け方が、対等関係を維持していけない。もう1つは、自分に対する尊厳と同時に、相手に対する敬意が若干大切なんじゃないかなと思い、学生に対して、そういうことを提起しました。皆さん、本気で話してくれました。来年もまた参加したいと思います。今は自宅が熊谷です。今日は、ありがとうございました。

司会/ありがとうございました。私もスタッフなので、あちこち動いて回っていました。冒頭の話を押聴させていただき、非常に心に刺さるお話で、また学生も真剣なまなざしで伺ってる様子が印象的でした。ぜひ、また来年もよろしくお願いいたします。

参加した学生さんからも感想をお願いしたいと思います。

みんなドキドキしてるでしょうか。あらかじめお願いしてあるので、突然指されることはないです。東京医療保健大学の小原さん、挙手お願いします。

【東京医療保健大学 小原様】



学生交流会に参加させていただき、三嶋さんのお話やグループワークを通して、自分たちが世田谷区を住みやすくするために、何ができるかを話し合い、様々な人の話を通して、自分では気づけなかった視点にも気づけました。

新しい考えや意見を持つためには、人と人との交流がとても大切だと、改めて行き着けました。今日得られた学びを、また多くの人との関わりを通して深めていけたらと、改めて考えさせられました。ありがとうございました。

司会／本当に、いろいろな大学から多くの学生さんに参加いただきました。また、ふだん、なかなか他大学の学生さんとお話しする機会はなかったと思います。そうした意味でも、いろいろな人たちの意見を聞きながら、意見をぶつけ合いながら自分たちのまちを考えると、非常に充実したワークショップだったのかなと、コメントから感じました。ありがとうございました

一方、ポスター発表も行っています。こちらでも進行、助言役をお願いしていました。ポスター発表の進行役・助言者として、今回初参加の東京農業大学の杉原先生から一言お願いします。

【東京農業大学 杉原様】

東京農業大学の杉原です。感想にかえまして、ポスター発表の場でどのような報告がされたか、簡単に説明します。今回、ポスター発表の形式として、概要発表が3分、質問による質疑応答が2分、助言者による講評が1分。助言者



として、昭和女子大学の根本さん、東京医療保健大学の神田さん、農大からは私が担当しました。デイホーム、ボランティア協会、大学などの発表でした。発表内容として、8本ありましたが、4つに分類できます。1つは、物、ツールの開発を通じての現場での適用。

例えば、歩行訓練プログラム、手作り自助器具、当事者の意向を元に作られる在宅版のパス。2番目が場の創出や提供への取組み。失語症カフェ、料理教室、介護する者同士が集う場の取組みがありました。3つ目。どのようなこだわりを、入院中の子どもに付き添う母親が抱えているかという課題をあぶり出すものがありました。4つ目。福祉方面の人材確保。小学校のうちから、非常に意欲的な見学会を通じて、福祉の分野の理解を高める。このような4つに分類できる発表がありました。こうしたポスター発表でした。

東京農業大学として、昨年度から、こちらの会に入会しました。私どもは、福祉をうたう学部、学科はありません。しかし、農業や農そのものは非常に福祉と親和性が高く、例えばバイオセラピーや農業の分野でも福祉の分野でも農福連携が注目されています。農大としても、今後とも、こちらに加入させていただき、いろいろ学ばせていただきたいと思います。私どもの研究も、この場で進めさせていただければと思います。本日は6名の学生とともに参加しました。今後とも、よろしくお願ひします。ご挨拶を兼ねて、報告させていただきました。

司会／ありがとうございました。

農業もいろんな就労の場ということで注目を集めたり、地域共生社会のコンセプトの中では、いろんな分野の壁を越えようという発想もあるわけです。その中で、またユニークな発表なり、新しい風を吹き込んでいただければと思います。引き続き、よろしくお願ひします。ありがとうございました。

続きまして、今回、こうした発表のほかに、区内の障害者施設から、手作品の販売があり、ちなみに私もかばんを買いました。授業に行くときに、入れていくのがぼろぼろになってきたんです。建物がいっぱいあるので、こうしたものが重宝します。そして、飲物を提供するほっとスペースの設置がありました。そのほか、本日は運営スタッフとして、会員大学から学生ボランティア多数のご協力をいただいています。では、学生ボランティアの皆さん、ご起立願

います。軽く地響きが鳴るほど、多数の参加をいただき、本当にありがとうございました。皆さんのおかげで、大会の運営がスムーズにいきました。本当にありがとうございました。学生ボランティアの皆さんの中から、ほっとスペースの担当をしていただいた本学科の福田さんから一言お願いします。

【日本大学 福田様】



日本大学の福田です。私は今、社会福祉学科の4年です。この学生生活の中で、福社區民学会、特にほっとスペースに関わる機会が多かったです。飲み物の提供を通して、一息つく方に来ていただくだけでなく、いろんな学生と一緒に活動しながら、新しい輪もでき

たと思います。今回の活動は、なごやかで楽しい時間でしたが、私だけでなく、皆さんにもそういう時間を提供できていたら、うれしいなと思います。ありがとうございました。

司会／ありがとうございました。

学生の皆さんの力が、大会の運営に、非常に大きな助けになりました。本当にありがとうございました。

ということで、振り返りという形で話を伺ってまいりました。

いずれの会場、発表も、非常に活発な様子が報告され、いろんな交流があったと感じています。普段はなかなか聞くことのない話や、興味深いお話もあったと思います。私もちょこっとしか聞けませんでした。心に刺さるような話だったり、地域のつながりをすごく感じる発表だったり。あるいは、ちょっとずつの積み重ねで自立に向かっていくステップが見えてくるような話など、いろんな話が聞けてよかったです。ぜひとも、本日の大会の成果を、皆様でお持ち帰りいただき、また明日からの実践、次回の大会へつなげていければと考えています。

個人的には、ふだん私はこういうところに立って学生に向かって授業をしています。今回は、学生の発表を私がそちら側で聞く、逆の立場が入れ替わった

発表がありました。先生って、意外と大変でしょ？

ということで、次回のお話を申し上げます。

第12回大会は、駒澤大学さんで開催していただきます。来年、令和2年12月5日に開催予定です。詳細が決まり次第、ホームページなどでお知らせいたします。来年度もぜひ、お誘い合わせのうえ、ご参加いただきますよう、よろしくお願ひします。

以上をもって、せたがや福社区民学会第11回大会を終了します。



## 第 11 回大会実行委員長挨拶

せたがや福社区民学会第 11 回大会実行委員長

諏訪 徹

皆さん、お疲れ様でした。

参加者は合計 460 名。スタッフが 120 名、ボランティアは 60 名以上。一般の方は 340 名で、多くの方が来てくださいました。

昨日の段階では関東地方・平野部はもしかすると雪との予報でしたが、皆さんの心掛けがそれほど悪くなかったのも、この程度の天気でおさまり、たくさんの方に来ていただけて、ほっとしています。

まとめろということですが、こんな学会まとめられないですよ。不思議な学会です。私は初めて参加したとき、不思議だけど面白い学会だと思いました。学生が発表してる、隣で市民が発表している、当事者の人がいる、事業者の人もいる。普通、学会というと、だいたい専門分野に特化してやっているのも、その分野のテーマのことしか聞けません。この学会は、いろいろな話が、いろんな立場で、でもみんな福祉のことを考えている。福祉をつくるのに、こんなに多くの方が色々な営みをしているということが本当にわかる学会です。

このごちゃ混ぜの面白い学会をつくった人も偉かったと思いますし、続けて、大きくして下さった皆さんも、本当に努力をされて、ここまで来たんだと、改めて、そういう思いをしました。

学生の皆さん、発表とかけっこう色々なことを聞けましたか？ 授業より面白かった？ いろんな話が聞けて本当に授業より楽しいと思います。皆さんが参加してくれることで、おじさん、おばさんたちは、大変に力を得ています。なんだか未来が明るいような気持ちに、今年もさせてくれたと思います。本当にありがとうございました。

これは、シナリオにないことです。ずっと支えてくれてる事業団の皆さん。

この学会は準備が大変で、私たち何年かに1回だからできますが、毎年これを支える、本当に大変です。事業団の皆さんの働きがあればこそだと思います。どうも、ありがとうございました。これからも続けてください。よろしく願いします。

多くの方のお力をいただいて、この学会が非常に成功したと思い、本当にほっとしています。来年以降も実りある学会が続いていくことを期待します。

ありがとうございました。



# 資 料 編

- せたがや福社区民学会役員
- 第 11 回大会実行委員名簿
- 第 11 回大会実績
- 団体会員名簿
- 設立趣旨

せたがや福祉区民学会役員

【順不同】

役職	氏名	所属／職名
会長	はせがわ みき 長谷川 幹	三軒茶屋内科リハビリテーションクリニック院長
副会長	そのだ いわお 園田 巖	東京都市大学人間科学部児童学科准教授
理事	かんだ ひろこ 神田 裕子	東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科准教授
理事	ねもと はるよ 根本 治代	昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科准教授
理事	かわかみ とみお 川上 富雄	駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授
理事	すお とおる 諏訪 徹	日本大学文理学部社会福祉学科教授
理事	よこやま じゅんいち 横山 順一	日本体育大学体育学部健康学科教授
理事	すぎはら たまえ 杉原 たまえ	東京農業大学国際食料情報学部国際農業開発学科教授
理事	おおくま ゆきこ 大熊 由紀子	国際医療福祉大学大学院教授
理事	なとり じゅんいち 名取 順一	「おとこの台所」グループ代表
理事	むらた きちこ 村田 幸子	福祉ジャーナリスト
理事	やまざき じゅんこ 山崎 順子	東京都発達障害者支援センター長
理事	とくなが のぶゆき 徳永 宣行	世田谷区介護サービスネットワーク代表
理事	なかほら ひとみ 中原 ひとみ	世田谷区特別養護老人ホーム施設長会
理事	ながおか みつはる 長岡 光春	世田谷区高齢福祉部長
理事	かなざわ ひろみち 金澤 弘道	世田谷区社会福祉協議会常務理事
理事	こが まなぶ 古閑 学	世田谷区社会福祉事業団理事長
理事	うりゅう りつこ 瓜生 律子	世田谷区福祉人材育成・研修センター長
監事	くどう ふみあつ 工藤 郁淳	世田谷区会計管理者
監事	まきの まゆみ 牧野 まゆみ	日本放送協会学園高等学校教諭

第6期（平成31.4.1～令和3.3.31）

せたがや福社區民学会 第11回大会実行委員名簿（順不同）

	氏 名	所 属/職 名
◆ ◎	委員長 諏訪 徹	日本大学文理学部社会福祉学科教授
◆	副委員長 上之園 佳子	日本大学文理学部社会福祉学科特任教授
◆	太田 由加里	日本大学文理学部社会福祉学科教授
◆	金子 絵里乃	日本大学文理学部社会福祉学科教授
◆	鴨澤 小織	日本大学文理学部社会福祉学科助教
◆	久保田 純	日本大学文理学部社会福祉学科助教
◆	白川 泰之	日本大学文理学部社会福祉学科教授
◆	張 珉榮	日本大学文理学部社会福祉学科助手
◆	山田 祐子	日本大学文理学部社会福祉学科教授
◎	長谷川 幹	三軒茶屋内科リハビリテーションクリニック院長
◎	園田 巖	東京都市大学人間科学部児童学科准教授
◎	神田 裕子	東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科准教授
◎	根本 治代	昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科准教授
◎	川上 富雄	駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授
◎	横山 順一	日本体育大学体育学部健康学科教授
◎	杉原 たまえ	東京農業大学国際食料情報学部国際農業開発学科教授
◎	大熊 由紀子	国際医療福祉大学大学院教授
◎	名取 順一	「おとこの台所」グループ代表
◎	村田 幸子	福祉ジャーナリスト
◎	山崎 順子	東京都発達障害者支援センター長
◎	徳永 宣行	世田谷区介護サービスネットワーク代表
◎	中原 ひとみ	世田谷区特別養護老人ホーム施設長会
◎	瓜生 律子	世田谷区福祉人材育成・研修センター長
	住岡 麻依	砧地域ご近所フォーラム2020実行委員会
	米倉 人美	キョウエイケア世田谷
	津村 佐和子	深沢あんしんすこやかセンター
	江口 卓	（社福）世田谷区社会福祉協議会
	八木 早知子	世田谷区障害福祉担当部障害者地域生活課障害者就労支援担当
	大野 和啓	世田谷区高齢福祉部高齢福祉課管理係

◆印＝開催校委員 ◎印＝学会運営委員

事務局	中村 雅俊	日本大学文理学部社会福祉学科事務室
		世田谷区福祉人材育成・研修センター

# 第11回大会実績

参加者数479人

内訳) 来場者 343人

当日スタッフ、ボランティア、理事等役員136人(うち学生ボランティア65人)

分科会参加者(各発表終了時の人数:単位 人)

発表番号	1	2	3	4	5	6	7
ポスター発表	65(コアタイム時 延べ人数)						
第1分科会	57	21	24	37	46	67	16
第2分科会	32	34	26	26	18	27	20
第3分科会	30	24	21	20	16	17	24
第4分科会	20	23	26	26	25	21	14
第5分科会	23	13	14	19	23	17	
第6分科会	20	30	21	47	22	10	29
第7分科会	6	10	29	14	53	10	34
学生交流会	46(延べ人数)						

その他

\*パソコン文字通訳(全体会)及び手話通訳(全体会、分科会)をお願いしました。

\*会員大学(昭和女子大学、駒澤大学、日本大学、東京都市大学、日本体育大学、東京医療保健大学、東京農業大学)の学生やスタッフに、設営・会場案内・記録・写真撮影・休憩コーナー運営等の大会運営にご協力いただきました。

\*区内8ヶ所の障害者施設が手作り品の展示販売を行いました。

団体名	
1	昭和女子大学人間社会学部福祉社会学科
2	日本大学文理学部社会福祉学科
3	駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻
4	東京都市大学人間科学部児童学科
5	日本体育大学体育学部健康学科
6	東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科
7	東京農業大学
8	世田谷高次脳機能障害連絡協議会
9	社会福祉法人武蔵野会 世田谷区立駒沢生活実習所
10	社会福祉法人武蔵野会 世田谷区立世田谷福祉作業所
11	社会福祉法人武蔵野会 世田谷区立九品仏生活実習所
12	社会福祉法人 世田谷ボランティア協会 福祉事業部
13	社会福祉法人 世田谷ボランティア協会 市民活動推進部
14	社会福祉法人せたがや檜の木会 上町工房
15	社会福祉法人せたがや檜の木会 下馬福祉工房
16	社会福祉法人せたがや檜の木会 まもりやま工房
17	社会福祉法人せたがや檜の木会 世田谷区立千歳台福祉園
18	社会福祉法人せたがや檜の木会 ぽーときめた
19	社会福祉法人康和会 久我山園
20	社会福祉法人大三島育徳会 世田谷区立玉川福祉作業所
21	社会福祉法人大三島育徳会 博水の郷
22	社会福祉法人大三島育徳会 ホームいろえんぴつ
23	有限会社ヘルパーサービス和知
24	社会福祉法人友愛十字会 砧ホーム
25	医療法人社団慈泉会 介護老人保健施設 うなね杏霞苑
26	社会福祉法人嬉泉 子どもの生活研究所 おおらか学園
27	社会福祉法人嬉泉 宇奈根なごやか園
28	社会福祉法人嬉泉 鎌田のびやか園
29	砧地域ご近所フォーラム2020実行委員会
30	世田谷区
31	社会福祉法人 世田谷区社会福祉協議会
32	社会福祉法人 福音寮
33	世田谷福祉専門学校
34	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 芦花ホーム（特養）
35	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 上北沢ホーム（特養）
36	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 芦花ホーム（短期入所）
37	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 上北沢ホーム（短期入所）
38	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 寿満ホームかみきたざわ
39	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 デイ・ホーム世田谷
40	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 デイ・ホーム太子堂
41	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 デイ・ホーム弦巻
42	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 デイ・ホーム松原
43	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 デイ・ホーム芦花
44	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 デイ・ホーム上北沢
45	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 世田谷一丁目介護保険サービス

団体名	
46	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 北沢介護保険サービス
47	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 芦花介護保険サービス
48	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 太子堂介護保険サービス
49	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 上町地域包括支援センター
50	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 太子堂地域包括支援センター
51	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 北沢地域包括支援センター
52	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 上北沢地域包括支援センター
53	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 上祖師谷地域包括支援センター
54	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 松原地域包括支援センター
55	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 世田谷ホームヘルプサービス
56	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 烏山ホームヘルプサービス
57	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 訪問看護ステーションけやき
58	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 訪問看護ステーション北沢
59	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 訪問看護ステーション芦花
60	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 訪問看護ステーションさぎそう
61	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 訪問看護ステーション三軒茶屋
62	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 パルメゾン上北沢
63	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 総務課
64	社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団 世田谷区福祉人材育成・研修センター
65	世田谷区福祉移動支援センター「そとでる」
66	社会福祉法人正吉福祉会 世田谷区立きたざわ苑
67	世田谷区老人問題研究会
68	世田谷区介護サービスネットワーク
69	社会福祉法人奉優会 等々力の家居宅介護支援事業所
70	社会福祉法人奉優会 特別養護老人ホーム 等々力の家
71	社会福祉法人奉優会 通所介護 等々力の家デイホーム
72	社会福祉法人奉優会 優っくりグループホーム池尻
73	社会福祉法人奉優会 デイホーム奥沢
74	社会福祉法人奉優会 奥沢地域包括支援センター
75	社会福祉法人日本フレンズ奉仕団 特別養護老人ホーム フレンズホーム
76	社会福祉法人日本フレンズ奉仕団 デイ・ホーム上馬
77	社会福祉法人古木会 特別養護老人ホーム 成城アルテンハイム
78	セントケアリフォーム等々力
79	一般社団法人 子ども・若者応援団
80	特定非営利活動法人 若者の自立支援すみれブーケ
81	社会福祉法人敬心福祉会 特別養護老人ホーム 千歳敬心苑
82	有限会社 ケアステーションたね
83	株式会社 すずらん
84	樹のはな居宅介護支援事業所
85	在宅介護家族会 かたよせ会
86	社会福祉法人こうれいきょう デイホーム池尻
87	社会福祉法人こうれいきょう デイホーム三宿
88	社会福祉法人こうれいきょう 小規模多機能ホーム三宿
89	老人給食協力会ふきのとう
90	特定非営利活動法人 NPOはあと世田谷 フジ介護支援センター

団体名	
91	グループホーム成城さくらそう
92	株式会社サンケイビルウェルケア ウェルケアガーデン馬事公苑
93	東京リハビリテーションセンター世田谷
94	世田谷区立烏山福祉作業所
95	社会福祉法人なごみ福祉会 ここから
96	社会福祉法人老後を幸せにする会 特別養護老人ホーム 深沢共愛ホームズ
97	社会福祉法人老後を幸せにする会 特別養護老人ホーム 等々力共愛ホームズ
98	社会福祉法人青藍会 ハートハウス成城
99	認定特定非営利法人 語らいの家
100	株式会社 世田谷区サービス公社
101	トラストガーデン桜新町
102	医療法人財団青葉会 介護老人保健施設 ホスピア玉川
103	あいメッセージ成城
104	NPO法人 せたがや子育てネット
105	世田谷区立身体障害者自立体験ホーム なかまっち
106	特定非営利活動法人 キープ・ママ・スマイリング
107	公益社団法人 東京都世田谷区歯科医師会
108	株式会社 りはっぴい
109	公益財団法人 世田谷区保健センター
110	世田谷スポ・レクネット
111	社会福祉法人敬寿会 東京敬寿園
112	東京ロイヤル株式会社
113	世田谷区柔道整復師会
114	社会福祉法人南山会 特別養護老人ホーム 喜多見ホーム
115	社会福祉法人東京有隣会 第2有隣ホーム
116	社会福祉法人東京有隣会 有隣ホーム
117	社会福祉法人緑風会 特別養護老人ホーム エリザベート成城
118	社会福祉法人楽晴会 世田谷希望丘ホーム
119	社会福祉法人寿心会 特別養護老人ホーム フォーライフ桃郷
120	社会福祉法人七日会 せたがや給田乃杜
121	チーム三茶
122	社会福祉法人常盤会 ときわぎ世田谷
123	一般社団法人 玉川砧薬剤師会
124	社会福祉法人ノテ福祉会 居宅介護支援事業所 ノテ深沢
125	社会福祉法人ノテ福祉会 訪問看護ステーション ノテ東京
126	社会福祉法人ノテ福祉会 小規模多機能型居宅介護 ノテ深沢
127	社会福祉法人ノテ福祉会 認知症対応型グループホーム ノテ深沢
128	社会福祉法人ノテ福祉会 24ヶアステーション ノテ東京
129	社会福祉法人ノテ福祉会 船橋地域包括支援センター

個人会員	
49名	



## せたがや福祉区民学会

福祉活動は何よりも実践を基本とし、その質を高め、内容が広く地域の方々に共有されることが望まれ、地域の中で行われている取り組みについて互いに発表し、共有することによって、さらに高まります。また、自分たちの取り組みが、地域全体の中でどのように位置づけられるのか、再発見することも大切です。

せたがや福祉区民学会は、世田谷区内の大学、福祉施設や事業所で働き、学び、研究する者と区民、行政で構成されます。会員が一体となって相互に、福祉活動や研究成果を発表し、学びあい、区民福祉の向上を目指して平成21年12月に設立されました。

本学会は身近な地域で日頃の実践を発表し、情報交換を通してお互いの交流を深めあい、区民福祉を向上することを目的としています。



発 行 せたがや福社区民学会  
発 行 日 令和2年6月

〈事 務 局〉

社会福祉法人 世田谷区社会福祉事業団  
世田谷区福祉人材育成・研修センター

〒156-0043

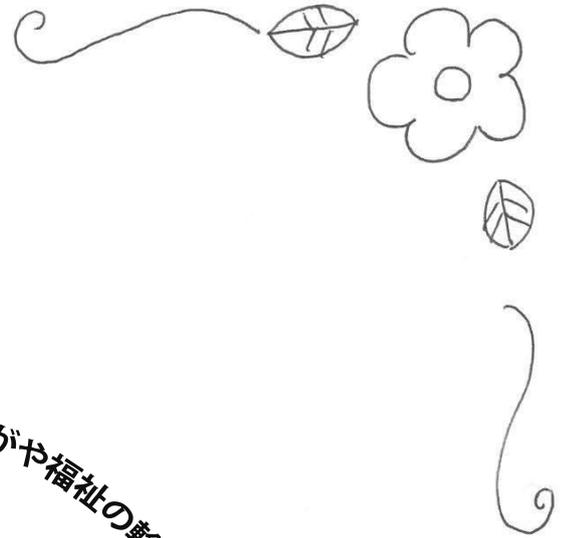
世田谷区松原6-37-10

世田谷区立保健医療福祉総合プラザ1階

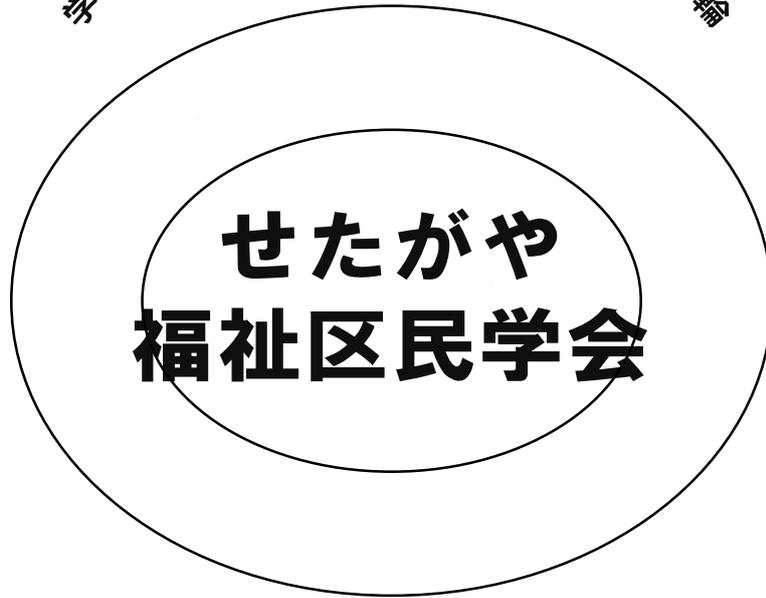
TEL : 6379-4280 FAX : 6379-4281

E-mail : fukushijinzei@setagaya-jinzei.jp

URL : <https://www.setagaya-jinzei.jp>



学びあい 広げよう せたがや福祉の輪



# せたがや 福祉区民学会

主催：せたがや福祉区民学会

せたがや福祉区民学会第11回大会実行委員会

共催：日本大学文理学部

社会福祉法人世田谷区社会福祉事業団

後援：世田谷区

社会福祉法人世田谷区社会福祉協議会

